

令和5年度
第62回鹿児島県私立幼稚園教職員研修大会
—鹿児島大会—
研究集録

—〈大会研究主題〉—
「新しい時代を伸びやかに生きる」(4年次)
～社会に開かれた質の高い幼児教育を～



写真協力：公益社団法人 鹿児島県観光連盟

と き 令和5年7月24日(月)～25日(火)
ところ 分科会(24日) 鹿児島市内11幼稚園【対面開催】
全体会(25日) マリンパレスかごしま【ハイブリッド方式】

主催 一般社団法人鹿児島県私立幼稚園協会
後援 鹿児島市・鹿児島市教育委員会

第62回鹿児島県私立幼稚園教職員研修大会

—鹿児島大会—



全体会場（マリンパレスかごしま）



遠藤 利彦 先生

大会会長
上原 樹 縁



開催地実行委員会会長
富永 宏



次期開催地実行委員会会長
吉井 健



特別出演
中間遥斗さんと
鹿児島バトン研究所の皆様



講演（遠藤 利彦 先生）

目次

◆ 発刊に寄せて	1
◆ 日程及び分科会	2
◆ 全体会	
◆ 分科会担当一覧表	4
◆ 特別出演	6
◆ 講演「乳幼児期におけるアタッチメントと非認知的な心の発達」	7
講師 東京大学大学院教育学研究科 教授 遠藤 利彦 先生	
◆ 分科会	
第1分科会「子どものやさしさや思いやりの育ちを考える」	25
第2分科会「保育者の主体的な学びと遊び体験の充実」	29
第3分科会「得意分野を磨き遊びの専門性を高める」	33
第4分科会「仕事の効率化と組織の活性化を考える」	37
第5分科会「子ども理解から子どもの育ちを考えた保育実践」	41
第6分科会「子どもたちの多様性の尊重、ジェンダー平等などへの理解を深める」	45
第7分科会「子どもとともに作り出す環境構成」	49
～主体的・対話的で深い学びを支える環境の構成・再構成～	
第8分科会「子どもとともに作り出す環境構成」	53
～子どもたちの主体性を大切にする丁寧な保育～	
第9分科会「子どもとともに作り出す環境構成」	57
ふれあい活動を豊かにする環境構成の工夫	
～コーナー別活動の実践を通して～	
第10分科会「子どもの主体性がいきる保育者のかかわり」	61
第11分科会「子どもの主体性がいきる保育者のかかわり」	65
◆ 大会運営推進組織表	69
◆ 参加者集計	71
◆ 参加者数一覧	72

発刊に寄せて

(一社) 鹿児島県私立幼稚園協会

教育研究委員長 室 屋 賢 三

令和5年度第62回鹿児島県私立幼稚園教職員研修大会鹿児島大会は、「新しい時代を伸びやかに生きる」－社会に開かれた質の高い幼児教育を－を研究主題として7月24日と25日の両日に開催され、第1日目を鹿児島市内11の幼稚園を会場にして分科会を、第2日目をマリパレスかごしまをメイン会場として対面方式及びオンライン方式を併用したハイブリッド方式で全体会が開催されました。

1日目は、市内11の園の公開保育を提供していただくと同時に、各ブロック・地区の11の問題提起園に研究実践を発表していただきました。各分科会とも活発な研究協議がなされ、私たちの大きな使命である教育・保育の資質向上が十分図られ、大きな成果を上げることができたと考えています。

大会後の感想にも「会場園見学や公開保育を通して、今後の自園の保育の参考になる工夫がたくさんあった。」「問題提起園の実践発表から多くの保育の工夫を学ぶと同時に対面で多くの先生方との情報交換ができ、有意義な研究協議ができた。」などの感想が多く聞かれました。

これもひとえに、保育を公開していただいた11の会場園及び研究の成果を発表していただいた問題提起園の熱心な取り組みの成果であろうと考えています。各支部、ブロックの一体となった取り組みに対して改めて感謝申し上げます。

2日目は、特別出演として全体会会場で鹿児島バトン研究所・学校法人神村学園中等部高等部吹奏楽部に所属している中間遥斗さんにバントワーリングをご披露して頂きました。会場で直接演技を見る先生方と各園からZoomによるオンラインで見る先生方とのハイブリッド方式での鑑賞でしたが、流れるような演技に多くの先生方から「素晴らしい演技を見ることができた」などの感想が多く寄せられました。

講演では、東京大学大学院教育学研究科教授 遠藤 利彦先生に「乳幼児期におけるアタッチメントと非認知的な心の発達」と題して対面方式と各園とオンラインでつないだハイブリッド方式で講演をしていただきました。講演の中では、アタッチメントの重要性及び非認知の重要性を様々な例を挙げて丁寧にご指導していただきました。特に「認知」「学力」も「非認知」の支えがあってこそ確実に伸張するなどのご指導は、今後の幼児教育を実践していく上で多くの示唆をいただきました。

今大会は、県大会としては4年ぶりに対面での保育参観・研究協議となり、オンラインのよさと同時に対面での研修のよさを再認識する大会ともなりました。

ここに、研究集録として講演内容や各分科会の様子をまとめました。各園の今後の保育の充実、先生方の資質の向上に役に立てれば幸甚に存じます。

終わりに、講師や指導助言の先生方をはじめ鹿児島支部の先生方、全体会や分科会にご尽力くださいました運営委員、司会、記録の皆様、そして大会に参加してくださいました会員すべての皆様に心より感謝を申し上げ、次年度大隅大会での再会を祈念しご挨拶といたします。

日 程

第1日目 7月24日(月)【分科会：鹿児島市内の11の幼稚園】

9:30	10:00	11:30	11:45	12:45	15:35	15:45
受付	公開保育 会場園見学	開会 行事	昼食	問題提起・分科会 (中間に休息・後半に指導助言)	閉会行事 諸連絡	解 散

分 科 会

研究課題	研究・研修 テーマ	問題提起園
1 愛されて育つ子ども	「子どものやさしさや思いやりの育ちを考える」	第一鹿屋幼稚園 (大隅)
2 子どもと共に育つ保育者	「保育者の主体的な学びと遊び体験の充実」	せいあこども園 (南薩)
3 子どもと共に育つ保育者	「得意分野を磨き遊びの専門性を高める」	錦城幼稚園 (鹿市5B) 九州大会問題提起園
4 子どもと共に育つ保育者	「仕事の効率化と組織の活性化を考える」	宮内認定こども園 (始良・伊佐)
5 子ども理解	「子ども理解から子どもの育ちを考えた保育実践」	伊集院幼稚園 (西薩)
6 子ども理解	子どもたちの多様性の尊重、 ジェンダー平等などへの理解を深める	ヴェリタスこども園 (鹿市4B)
7 保育実践	子どもとともに作り出す環境構成 ～主体的・対話的で深い学びを支える環境の構成・再構成～	いにしき幼稚園 (鹿市1B)
8 保育実践	「子どもとともに作り出す環境構成」	吉田南幼稚園 (鹿市2B)
9 保育実践	「子どもとともに作り出す環境構成」 ～ふれあい活動を豊かにする環境構成の工夫～ (コーナー別活動の実践を通して)	清谿幼稚園 (鹿市6B)
10 保育実践	「子どもの主体性がいきる保育者のかかわり」	めぐみ幼稚園 (鹿市3B)
11 保育実践	「子どもの主体性がいきる保育者のかかわり」	あゆみの森こども園 (熊毛・大島) 九州大会問題提起園

<会場園>

伊敷幼稚園、辻ヶ丘幼稚園、集成幼稚園、聖母幼稚園、やはた幼稚園、
鹿児島おおとり幼稚園、さつき幼稚園、紫原幼稚園、つばき幼稚園、宇宿幼稚園、喜入幼稚園

第2日目 7月25日(火)【全体会：マリンパレスかごしま】

鹿児島市与次郎2丁目8番8号 TEL 099-253-8822

9:00	9:30	10:00	10:30	10:45	12:15	12:30
受付	特別出演	開会式	準備	講演	閉会式	解散

司会進行 小平田 典子 (鹿児島おおとり幼稚園)

特別出演

9:30~10:00

バントワラー 中間 遥斗さん (神村学園中等部3年生)

開会式

10:00~10:30

- 1 開式のことば 鹿児島県私立幼稚園協会副会長 富永 宏 (伊敷幼稚園)
- 2 国歌斉唱
- 3 あいさつ 鹿児島県私立幼稚園協会会長 上原 樹縁 (おおぞらこども園)
- 4 表彰 鹿児島県私立学校教育功労者表彰 上原 樹縁 様
一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構優秀教員表彰
三月田 智子 様
鹿児島県私立幼稚園協会功績表彰 川迫 美由紀 様
畑野 裕太郎 様
永年勤続表彰 桃菌 智 (加世田聖母幼) 様 他 133 名
- 5 祝辞 鹿児島県知事 塩田 康一 様
鹿児島市長 下鶴 隆央 様
- 6 幼稚園讃歌斉唱
- 7 閉式のことば 鹿児島県私立幼稚園協会副会長 橋口 孝志 (吉田南幼稚園)

講演

10:45~12:15

演題 「乳幼児期におけるアタッチメントと非認知的な心の発達」
講師 東京大学大学院教育学研究科 教授 遠藤 利彦 先生
講師紹介 鹿児島県私立幼稚園協会副会長 三木 隆朋 (川辺幼稚園)

閉会式

12:15~12:30

- 1 閉会のあいさつ 鹿児島県私立幼稚園協会会長 上原 樹縁 (おおぞらこども園)
- 2 引継ぎ 鹿児島市支部から大隅支部へ
富永 宏 (伊敷幼稚園) → 吉井 健 (信愛こどもの園)
- 3 閉式のことば 鹿児島県私立幼稚園協会副会長 橋口 孝志 (吉田南幼稚園)

令和5年（2023年）度 第62回鹿児島県私立幼稚園教職員研修大会鹿児島大会

	担当	分科会場	研究・研修・テーマ	運営委員	助言者
1	大隅	鹿児島おおとり幼稚園	こどものやさしさや思いやりの育ちを考える	三浦 昌平 (大崎)	丸田 愛子 (鹿児島国際大学 福祉社会学部准教授)
2	南薩	喜入幼稚園	保育者の主体的な学びと遊び体験の充実	朝倉 文昭 (枕崎)	味園 佳奈 (鹿児島純心女子短期大学 生活学科准教授)
3	市5B	聖母幼稚園	得意分野を磨き遊びの専門性を高める	尾方 みゆき (鹿児島さくら)	有村 玲香 (鹿児島国際大学 福祉社会学部准教授)
4	始良伊佐	さつき幼稚園	仕事の効率化と組織の活性化を考える	西元 道子 (鹿児島第一)	福島 豪 (鹿児島国際大学 福祉社会学部准教授)
5	西薩	伊敷幼稚園	子ども理解から子どもの育ちを考えた保育実践	大園 貴文 (吹上中央)	森木 朋佳 (鹿児島純心女子短期大学 生活学科准教授)
6	市4B	紫原幼稚園	子どもたちの多様性の尊重、 ジェンダー平等などへの理解を深める	豊永 藤浩 (武)	千石 久美子 (メンタルケア研究会 コラソン代表)
7	市1B	宇宿幼稚園	子どもとともに作り出す環境構成 ～主体的・対話的で深い学びを支える 環境の構成・再構成～	森山 剛充 (はなぶさ)	中村 洋志 (天文館てんてん保育園長) (騎射場れいわ保育園長)
8	市2B	辻ヶ丘幼稚園	子どもとともに作り出す環境構成 ～子どもたちの主体性を大切にする丁寧な保育～	緒方 玲子 (和光)	今村 幸子 (鹿児島女子短期大学 児童教育学科 講師)
9	市6B	つばき幼稚園	「子どもとともに作り出す環境構成」 ふれあい活動を豊かにする環境構成の工夫 ～コーナー別活動の実践を通して～	田中 裕一 (鹿児島)	鮫島 準一 (鹿児島国際大学 福祉社会学部特任准教授)
10	市3B	集成幼稚園	子どもの主体性がいきる保育者のかかわり	義永 淳子 (鴨池)	植木 章子 (鹿児島キャリアデザイン 専門学校非常勤講師)
11	熊毛大島	やはた幼稚園	子どもの主体性がいきる保育者のかかわり	野田 理教 (西之表)	上月 素子 (社会福祉法人四恩こども園 教育保育スーパーバイザー)

分科会場園等 伊敷幼稚園、辻ヶ丘幼稚園、集成幼稚園、聖母幼稚園、やはた幼稚園、鹿児島おおとり幼稚園、

司会者	問題提起者	記録者	記録者	会場責任者	俯瞰図
鶴野 恵理香 (信愛)	菖蒲 ゆかり (第一鹿屋)	松浦 茜音 (鹿屋)	新町 名々保 (鹿屋)	伊福 勇史 (鹿児島おととり)	A 4
朝倉 俊江 (枕崎)	海老原 由子 (せいあ)	岡元 七菜 (せいあ)	神川あゆみ (せいあ)	野元 博史 (喜入)	B 2
前田 栞里 (桜ヶ丘中央)	並川 綾乃 (錦城)	北原 樹音 (錦城)	中仮屋 凜 (錦城)	泉 浩二 (聖母)	B 3
厚地 智佳 (高千穂)	鮫島 真由美 (宮内)	兼元 恵子 (高千穂)	森山 聖奈 (高千穂)	屋宮 栄作 (さつき)	B 4
藤田 はつほ (友愛)	西 優貴 (伊集院)	佐抜 真優 (伊集院)	坂口 小雪 (伊集院)	若松 新一郎 (伊敷)	D 2
富田 宏邦 (あけぼの)	牧 志穂美 (ヴェリタス)	上國料 夕佳 (ヴェリタス)	大島 あけみ (ヴェリタス)	花月 敏郎 (紫原)	D 3
西原 美緒 (恵光東侯)	本高 加奈 (いにしき)	松本 かおり (いにしき)	磯辺 明子 (いにしき)	鶴重 裕子 (宇宿)	E 4
吉田 竜也 (こばと・ゆなの木)	深見 茉由 (吉田南)	山田 望 (吉田南)	柿木 杏梨沙 (吉田南)	福田 雅紀 (辻ヶ丘)	E 4
山野 宏美 (こまつばら)	小中原 まりあ (清谿)	久松 彩香 (清谿)	一森 絵里香 (清谿)	大保 辰美 (つばき)	E 4
小濱 真由美 (研明舎)	藏前 美佳子 (めぐみ)	新福 果穂 (めぐみ)	濱崎 朱花 (めぐみ)	小村 重範 (集成)	E 5
中尾 志津江 (ゆかり)	松田 直之 (あゆみの森)	川原 由佳 (榕城)	徳浦 亜美 (榕城)	森園 直子 (やはた)	E 5

さつき幼稚園、紫原幼稚園、つばき幼稚園、宇宿幼稚園、喜入幼稚園

特別出演

出演 鹿児島バトン研究所
学校法人神村学園中等部高等部吹奏楽部

中間 遥斗 さん



◆ プロフィール

幼少より鹿児島バトン研究所に在籍し、バトンに魅了され、バトントワーリングの素晴らしさを沢山の皆様へお届け出来るよう活動している。

小学3年生より「全日本バトントワーリング選手権」に九州代表として連続出場し、優秀な成績を収める。

現在は神村学園中等部・高等部吹奏楽部にも所属し、カラーガード・セイバー・エアブレード等にも取り組み、ソロの大会においても最優秀選手を受賞。

世界大会にエントリーできる年齢となり、2023 I B T F世界バトントワーリング選手権の日本代表に選ばれ、今年8月イギリス・リバプールで行われる大会に参加する。



講演

演題 「乳幼児期におけるアタッチメントと非認知的な心の発達」

講師 東京大学大学院教育学研究科 教授
東京大学大学院教育学研究科附属
発達保育実践政策学センター(Cedep)センター長

遠藤 利彦 先生



◆プロフィール

東京大学教育学部卒業
東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学 博士(心理学)
東京大学教育学部助手、聖心女子大学文学部講師、
九州大学大学院人間環境学研究院助教授、
京都大学大学院教育学研究科准教授、
東京大学大学院教育学研究科准教授等を経て
現在 東京大学大学院教育学研究科教授・同附属発達保育実践政策学センター長

【(専門) 発達心理学・感情心理学・進化心理学】

特に親子関係・家族関係と子どもの社会情緒的発達との関連性に関心を持っています。
赤ちゃんが特別な愛着を示す毛布、タオル、ぬいぐるみ等(漫画スヌーピーに登場するライナスが肌身離さず持ち歩いている毛布)の研究がきっかけでこの世界に入りました。
これまで関東・関西地区の保育所等の巡回相談活動、全国の保育士・幼稚園教諭・保育教諭
および家裁調査官や児童相談所・乳児院・児童福祉施設職員等の研修などにも携わってきて
います。

【学会等】

日本発達心理学会理事／監事・日本赤ちゃん学会常任理事・日本子ども学会常任理事・
日本乳幼児教育学会常任理事・文部科学省／国立教育政策研究所各種委員・
日本学術会議第25期会員 等

【近年の主要著書等】

『よくわかる情動発達』(共編著)(ミネルヴァ書房、2014)
『本当のかしこさとは何か：感情知性(EI)を育む心理学』(共編著)(誠信書房、2015)
『アタッチメントとレジリエンスのあわい』(単著)
(子どもの虐待とネグレクト、2016、17(3)、329-339)
『赤ちゃんの発達とアタッチメント－乳児保育で大切にしたいこと－』(単著)
(ひとなる書房、2017)
『アタッチメントが拓く生涯発達』(単著)(「発達」ミネルヴァ書房、2018、153、2-9)
『アタッチメント理論における基点と現代的展開』(単著)
(「こころの科学」、2018、198、1-16)
『言葉・非認知的な心・学ぶ力』(共著)(中央法規、2019)
『乳幼児の発達と保育－食べる・眠る・遊ぶ・繋がる－』(共編著)(朝倉書店、2019)
『情動発達の理論と支援』(編著)(金子書房、2021)
『入門－アタッチメント理論：臨床・実践への架け橋』(編著)(日本評論社、2021)
『アタッチメントがわかる本：「愛着」が心の力を育む』(監修)(講談社、2022) 等

講演

演題「乳幼児期におけるアタッチメントと非認知的な心の発達」

講師 東京大学大学院教育学研究科 教授 遠藤 利彦 先生

皆さんこんにちは。遠藤と申します。本日は声かけをいただきましてありがとうございます。本日私の方からは、乳幼児期におけるアタッチメントと非認知的な心の発達というタイトルでお話をさせていただきたいと思います。

最初に自己紹介をさせていただきます。現在、東大にございます発達保育実践政策学センターという所でセンター長をさせていただいております。漢字がつらつらと並ぶので硬い口調があるかもしれませんが、要は、今子どもの発達に関して、たくさんの研究が行われているいろんなことが分かってきています。しかし、その研究の成果というのがちゃんと幼児教育や保育に活かされているかという、残念ながら日本はまだ研究の世界と実践の世界との間には深い溝があって、上手く橋渡しされていない所が多いような気がします。そうした中で、せっかく子どもに関していろんなことが分かってきているんだったら、ちゃんとそれを幼児教育や保育の実践に活かしていこうよ、あるいは幼児教育や保育に関連したいろんな政策という所に研究の成果を繋げていこうよとそんなことを考えまして、大学の中に小規模ではあるんですが、保育や幼児教育を専門に研究する所を作らせていただきました。

発足以来8年ほど経っているのですが、この間、かなり規模の大きい調査や研究を手掛けていました。いろんな研究させていただいているのですが、その中には、今日お話させていただく非認知と呼ばれるところの力に関わるような調査もごございます。ただ調査というだけではなくて、最近幼児教育や保育の分野で非認知とよく言われるのだけれども、そもそもそれって何なのか、どうやればそれを伸ばすことができるのか、そのヒントになるような学習アニメ動画というようなものも作らせていただいております。1本3分程度の非常に短いものが合計7本ほどごございます。私共のセンターは、一般的にCedep セデプと呼んでいるんですけども、インターネットでCedepという風に検索をかけていただきますと、一番最初にホームページがヒットしてくるかと思しますので、もしご関心がありましたらホームページをのぞいていただき、いろいろ探していただきますとこういう画面が見つかると思います。そこのところをクリックしていただくだけですぐご視聴いただけるようになっておりますので、もしお時間のある時に少し見て頂ければなという風に思う所でございます。

また、これは一昨年度ということになるんですが、やはり文部科学省から委託を受けまして、この非認知と呼ばれる心の力についての調査・研究というのを実施いたしました。全国のいろんな園の先生方にご協力をいただき、聞き取り調査、あるいは実際に園に行かせていただき、子どもたちの様子、そして先生方の子どもの対する関わり方、そういったものを観察させていただいた結果を、1つはリーフレットという形でまとめさせていただいております。そして、それぞれの園が、うちの園ではこんな工夫をしてこんな子どもたちの力を伸ばそうとしているよという、保育や幼児教育の実践の事例を合計78集めさせていただきました。その事例集というものも作らせていただいております。こちらの方も先ほど申し上げたCedepのホームページを探していただくとデジタルブックという形でお読みいただけるようになっております。あるいはpdfファイルという形でダウンロードしてご活用いただけるようになっておりますので、特に、事例集の方は写真が中心でありまして、ちょっとご覧になっていただくだけでも少し楽しんでいただけるかなと思っております。

最近、保育や幼児教育に関連する少し実践的な指導などもさせていただいております。元々、私、発達心理学というものが専門でございまして。子どもの発達のすごく基礎的、基本的な研究をしてきた人間であるわけですが、何がきっかけで子どもの発達の研究をやるようになったかという、皆さん、スヌーピーはよくご存じだと思います。スヌーピーが登場する漫画ピーナッツですね。ライナスという男の子も出てくるわけです。ライナスという男の子は、いつもこういう毛布を持ち歩いています。お子さんによっては、毛布ではなくてハンカチ、ガーゼ、タオル、シー

ツの切れ端であったりお母さんのスカーフであったり、あるいは柔らかいぬいぐるみ、そういうものをぼろぼろに擦り切れるまで、あるいは少し汚れて嫌なおいを発するぐらいになるまで、ずっと持って離そうとしないお子さんがいるかなという気がいたします。今日ご参加の先生方の近くにも、こういうものを持っているよというお子さんが、最低でも2人から3人ぐらいはいるのではないかなという気がいたします。日本では、大体3割から4割くらいのお子さんがこういうものを持つということが知られています。しかし、これが欧米になりますと、7割、8割くらいのお子さんが持つということが明らかになっておりまして、ですから、欧米では持っているのが当たり前で持っていないと心配されます。逆に、日本では持っているお子さんの方が若干少数派ということもあって、かつてはこういうものを持っているとお家で何か寂しい思いでもしているんじゃないとか、そんなことを心配された時代もあったかなという気がいたします。ただ今ではこういう物を持っている、持っていないということがその後の子どもの発達に何か違いをもたらすかという、特にそういうことはなさそうだよということが分かっています。しかし、それにしてもやっぱり持ったり持たなかったり、そういう一人一人の子どもの違いには何か理由があるに違いない、だったらそういう一人一人の子どもの違い、個性、どんな仕組みで生じてくるんだろうか、それを少し掘り下げて調べてみたいなということで、子どもの発達の研究をやるようになった人間になります。平たく言えば、どんな環境でどんな人からどんな育てられ方をしたら、どんな性格・個性の子どもに成長するか、いろいろデータを集めながら、分析しながら少しでも明らかにできればなということで、これまで子どもの発達の研究をしてきた人間であります。

子どもが育つ環境、もちろん大切なこといっぱいあると思います。大切な要素はたくさんあるわけですが、その中でも1番重要なカギを握っているものは何かなって考えた時に、おそらくそれは子どもの1番近くにいる大人の人、家庭では当然お母さん、お父さん、おばあちゃんやおじいちゃんのような人、そして、早くから園に通っている子どもにとっては、その家庭の外の1番近くにいる大人の人、先生。そうした子どもの1番近くにいる大人、家庭の内側にしても家庭の外側にしても、その子どもの1番近くにいる大人と子どもが、幼少期にどんな関係を持つことができるか。これが、やはりその後子どもの発達を大きく左右する、それは確実に言えるのかなという気がいたします。そういう子どもの1番近くにいる大人と子どもの関係をどういう観点から考えたらいいかなということで、少しこれまでこだわってきたのが今日お話をさせていただくアタッチメントというものであります。日本語では愛着という言葉で呼ばれることの方が多いかもしれせん。愛着という言葉もいい言葉だなって思います。ただ愛着には愛という言葉が入っておりますので、時々愛情という言葉とごっちゃにされてしまうことが少なくはないような気がします。愛着、重要ですと申し上げると、時々「それって子どもに愛情たっぷり注いで接してあげればいいってことですよ。」ってみたいに言われてしまうこともあります。しかし、愛着と愛情は意味が全然違います。その意味をできるだけ正確にさせていただきたいなということで、最近、英語をそのままカタカナに置き換えてアタッチメントというようにしています。意味は何かって言うと、それこそアタッチすることです。くっつくということです。ただし、だれかれ構わずに、いつ、所かまわずにくっつくのがアタッチメントではなく、基本子どもが怖くて不安な時あるいは感情が崩れた時に、特定の大人の人にくっついてもう大丈夫だという安心感に浸ること、それをアタッチメントといいます。ちっちゃい子どもの場合は、日に何回、場合によっては何十回も見せるごくごく当たり前のことであります。しかし、そのごく当たり前のことが、私たち大人が頭で考える以上に、人間の一生に渡る心と体の健康であったりあるいは幸せの形成に対してであったりにとっても大きい影響力を持っているということが、現在たくさんの研究から示されてきております。本日は、そのアタッチメントの大切さ、とりわけ非認知と呼ばれる心の力の発達に、それがどういう意味で重要なのかということをお話しできればなという風に考えるところでございます。

世界で今いろんな研究が行われているんですが、その中でも最も大きい影響力を持っているものは何かなって考えた時に、ここに縦断研究という言葉があります。縦断研究って何かなって言うと、特定の人達を時間軸にそってずっと追っかけて調べ続けていく、そういうタイプの研究の事を縦断研究というわけでありまして。0歳の時にこんな家庭でこんな育てられ方をしていた子どもが、園に入って4歳になった時に他の仲間とどれぐらい良い関係を持てているのかなとか、小学

校に入って8歳になった時に学校でどれくらい一生懸命勉強しようとしているかなとか、中学生14歳、学校で何か問題起こしていないかな、高校生17歳、部活どれくらい一生懸命打ち込んでいるんだろうか、20歳、30歳、40歳、50歳、60歳、どんな仕事について、その仕事でどれだけ上手くやっているのかな、70歳、80歳、90歳、100歳、病気なんかせずにどれだけ健康な状態を続けることができているか、一人の人間をずっと追っかけて調べ続けていくわけですから、当然なんです、幼少期、こんな家庭、こんな育てられ方をしていた子ども、あるいは家庭の外の、こんな園で、こんな保育者の先生から、こんな保育や幼児教育を受けていた子ども、大人になって、現にこれだけ幸せになれている逆にあんまりなれていない、そういうことが実際分かってくる研究が縦断研究ということになります。実際は、たった一人の人だけを追っかけて調べていくというわけではなくて、何百人、何千人、規模の大きいものと1万人以上の人たちを同時に追っかけて調べ続けていきます。時間がかかるだけでなくお金もかかる研究です。ですから、こういう研究は、国とか大きい自治体だとかがリーダーシップをとって進めていかないと中々上手く実現しないものであります。しかし、今世界では、どれだけ時間がかかってお金がかかったとしても、こうした縦断研究から明らかになってくること、いずれも重要なことばかりだということで、多くの国がこの縦断研究をととも精力的に展開するようになってきております。

日本ももちろん、そういった縦断研究を過去もいろんな形で実施してきたわけでありまして、そして、現在進行形のもので言うと、もしかしたらご存じかもしれません。1つは、環境省がエコチル調査と呼ばれる縦断研究を実施しています。この研究は、子どもたちを取り巻く環境、その環境の中には、子どもの健康を脅かす危ない物質がもしかしたらたくさん存在しているかもしれない、空気中には危ないものが漂っているかもしれない、子どもたちが口にする食べ物の中にもまだまだ知られていない危ない物質があるかもしれない、あるいは、実はこの研究はお母さんのお腹の中に胎児としている段階からスタートしているんですけれども、お母さんには無害でもお腹の中の胎児、赤ちゃんにはすごく有害に作用してしまう物質があるかもしれない、もちろん、たばこ、ニコチン、アルコール、そういうものが悪いということはもう常識として知られているんですが、まだまだ知られていない危ない物質が存在している可能性があって、それが子ども達のその後の障害になったり、病気に繋がっていく可能性がある、そういう中で全国15地域10万組の親子を対象にして、子どもたちが13歳になるまでずっと調べ続けるというような研究が1つ行われていたりします。

それから、21世紀出生時縦断調査。こちらの方は文部科学省が進めている調査です。それこそ21世紀になって生まれたお子さん、2001年生まれのお子さんたち、全国6万人弱の子どもを年1回調査するというを実施してきております。その中には鹿児島県や鹿児島市で生まれ育った人たちも当然含まれているわけでありまして。2001年生まれの子ども達、今ではもう20歳を超えているわけです。この研究は、この後もずっと継続的に行われるということが決まっておりますので、実際日本でも、幼少期、こんな家庭でこんな経験をしていた子ども、あるいは、こんな園でこんな幼児教育を受けていた子ども達、大人になって、ああこんな風になっているんだなということが分かってくるかもしれません。ただこの研究もまだ20年ぐらいであります。ちなみに、現在私のセンター Cedep は、文部科学省から委託を受けて、来年度から年長児段階の幼児教育の経験、どんな幼児教育を受けていたかがその後の子どもの発達にどう影響するかという幼児教育の効果検証に関わる縦断研究を行うことになっております。これは、全国15000人ぐらいの子ども達を対象にして追っかけて、その幼児教育ってその後にこんなに重要な影響力を持っているんだよということ、それを明らかにしようとするような研究を実施することになっております。もしかすると先生方にもいろいろとご協力をお願いするかもしれませんので、その際はよろしくお願いいたします。

日本にもこういう縦断研究たくさんあるんですが、世界では20年どころか30年40年、長いものと半世紀以上に亘って続けられている縦断研究があったりします。いろんな目的を持ったいろんな方法の縦断研究があるんですが、今日はその中でも下2つのタイプの縦断研究についてちょっと触れさせていただこうかなという風に思います。1つは、ここに剝奪という言葉があります。奪われるという意味の言葉であるわけですが、このタイプの研究はどういう物かということ、普通だったら経験できて当たり前の事、その経験できて当たり前のことが奪われてしまったら、

経験できなくなってしまうたら、それって、その後の子どもの発達にどれだけ深刻なダメージを及ぼしてしまうのか、それを長期的に明らかにしようとする研究を時々剥奪研究だっていう風によんだりすることがあります。平たく言えば、恵まれない環境、悲惨で劣悪な環境で人生を出発させた子ども達その後どうなっていくか、長期目線で明らかにしようとする研究ということがあります。一方、ここに介入という言葉があります。介入はある意味剥奪とは真逆の方向性を持った研究でありまして、これは、普通だったら経験できないような特別なことを子ども達に経験させてみたら、あげたら、その特別なことがその後どれだけ大きい効果を上げるか、それをやはり長期目線で明らかにしようとする研究ということができます。この2つのタイプの縦断研究が、乳幼児期の大切さ、とりわけ、その中でのアタッチメントが1つのカギを握っているということを私たちにすごく印象深く教えてくれるような気がいたします。

最初に、剥奪研究の比較的最近行われた代表的な物を1つ簡単に今ご紹介できればと思います。ここに1冊の本の表紙があります。最近翻訳も出されています。元々英語で書かれた本でありまして、英語のタイトルをそのまま日本語に置き換えますと、『ルーマニアの捨てられた子ども達』というちょっとショッキングなタイトルになっております。捨てられた子ども達ですので、この子ども達は施設で生活しています。もちろんその施設も環境条件がちゃんと整ってれば、その子ども達、心も体も健康に成長できるはずです。しかし、こういう本が書かれているということは、この本に出てくる子どもの発達には何か問題があるんだろうなと容易に想像できる場所だろうなと思います。現にこの施設で育っている子ども達の発達は、著しく遅れていたり歪んでしまっていたりします。なんでこんな風に発達が遅れてしまうのか、歪んでしまうのか。それを現代科学の推移を集めて明らかにしようとした研究、その中間成果が今この1冊の本にまとめられています。発達が著しく遅れている、歪んでいる、さぞかしこの子ども達が生活している施設、とんでもなく悲惨なんだろうな、劣悪なんだろうな。つい私たちはそんな風に考えてしまいがちかもしれません。しかし、少なくとも物理的な意味での環境という観点でいくと、この子どもたちはそれほどひどい所で生活してはいません。衛生条件の整った、ある程度綺麗なところで生活できています。成長するのに十分な食べ物もある程度ちゃんともらえています。あったかい毛布で眠ることもできています。遊ぼうと思えばそこそこおもちゃもあります。読もうと思えばそこそこ絵本もあるような状況です。私たち人間が生きていく上で必要不可欠な、食べたいとか、飲みたいとか、あったまりたいとか、眠りたいとか、そういう生理的な欲求に関して言えば、この子どもたちは、ある程度その欲求を満たしてもらえています。であるにもかかわらず、心のみならず体も含めて健康に成長することができていない。じゃあ、何が足りていないか、お分かりかと思えます。物理的な環境という観点で言えば、さほど大きい問題があるわけではない。しかし、決定的に不足しているもの、欠けているもの。それは、人の手による温かいケア、世話。これが欠けているわけでありまして。そもそも子どもの数に対してそのケアをする大人、非常に少なかったりします。最悪の条件の施設になると、20人ぐらいの赤ちゃんに対してたった1人の大人の人がケアをするという状況です。

日本の場合は、一般的に0歳児保育、3人の赤ちゃんに対して1人の保育士の先生が細心の注意を払いながら接していらっしゃる。それと比べた時に、20人の子どもにたった1人の大人。これは信じられないような状況かと思えます。そこで行われる保育・養育は、当然不自然なものにならざるを得ない。不自然さを上げればきりがありません。例えば、ほとんどの事が一斉になります。ご飯を食べさせる時、皆一緒、一斉。これは分かるかと思えます。しかし、シャワーさせる、お風呂に入れる、たくさん子どもを少ない大人の手でやる。かなり危ないことだと思います。でも、それ以上に違和感を禁じ得ないのは、うんち、おしっこ、排泄の場面かもしれません。おまるを一行につらーっと並べて、そのおまるの上に子ども達を一斉のタイミングで強制的に座らせる。そして一斉のタイミングで用を足させようとしたりします。うんち、おしっこ、したいタイミングなんて子どもみんなそれぞれバラバラ。しかしそんなことお構いなく一斉のタイミングで用を足させようとする。逆に言えば、この子ども達一人一人の個別の欲求、あれしたい、これしたい、これ嫌だ、が多くの場合無視されて生活することになります。ちっちゃい子どもですから容易に怖がります。容易に不安がります。ちょっと暗くなるだけでも怖がってギャーって声をあげる、ある意味当たり前のことかもしれません。しかし、この子どもたちは、ギャーって声

を上げた時に誰かから抱っこされて慰めてもらうかというのと、それが非常に少ないわけでありませす。実は、この子どもたちにとって最も深刻な剥奪って何かっていうと、それこそ先ほど申し上げたアタッチメントの剥奪ということになります。

先ほどお話ししたように、アタッチメント、怖くて不安な時に特定の誰かにくっついてもう大丈夫だという安心感に浸ること、ただそれだけの事です。通常他の所で生活している子ども達であれば、多かれ少なかれ経験できて当たり前のもの、それがアタッチメントだと思います。しかし、その経験できて当たり前のもの、アタッチメントを経験できないとなると、どんなに普通に食べて飲んで綺麗なところで生活できて、あったかい毛布で眠れたとしても、体も含めて全然健康に成長することができない。そうしたことが、現代科学の推移を集めた研究の中でも確認されているわけでありませす。子ども達は、その月齢や年齢に見合った身長や体重を示していません。はるかに小さい、軽い。頭の大きさも相当小さいです。実はこの研究は、子ども達の脳の中で何が起きているのか、そういうミクロなところまでメスを入れた研究をしています。通常子どもの脳というのは、小学校入学する前の乳幼児期全般5、6年の間に大人の9割に達するぐらいになるまで猛スピードで成長します。これが通常の子どもの脳の成長のパターンです。それに対して、こうした施設で育てている子どもの中には、脳の成長どころか脳の萎縮、縮んでしまっているような子どもの事例も報告されています。それから、ちょっとここに取り上げたいことは、テロメアという言葉があります。これは、私たちの体を作っている一個一個の細胞に必ず存在しているものです。このテロメアという所が短縮してくる、短くなってくる。それは何を意味するかというのと、細胞が老化してきているということの意味します。通常、細胞の老化というものは、乳幼児期の段階では本来あまり認められないはずのものです。しかし、本来はあまり見られないはずの細胞の老化が顕著に見つかるような子どももいたりします。体も含めて健康に成長することができていない。心、体全般にいろんなダメージを受けてしまう。しかし、その中でもとりわけ、ここに書いた自己と社会性と呼ばれる、心の側面に受ける傷が最も深い、最も深刻だということも同時にわかってきました。この自己と社会性と呼ばれる心の側面の発達が一番遅れる、そして歪む。そういう事が分かってきたわけでありませす。

この自己と社会性って何かなって言ったときに、1つはこの自己に関わる心の力、すごく平たく言うと、自分の事を大切に、自分の事を適度にコントロールできて、自分の事をもっともっと良くしよう、高めようとする力、そんな風に考えて頂けるといいかなっていう気がいたします。先生方が普段お使いの言葉で言えば、ここに並んでいるようなものが、その自己に関わる心の力の代表的なもの、重要なものって言うといいかなという気がします。例えば、自尊心、自己肯定感、自分のこと好きって思っているよう、いいって感じる事ができているような。自己理解、自分の特徴をある程度自分でちゃんとわかっているような。それから意欲、動機付け、やる気あります。ただし、ここに内発的って言葉が付いています。内側から湧いて出てくるやる気。面白いからやってみたいっていう、そういうやる気ですね。好奇心に駆られたやる気。ちなみに、この反対の言葉は外発的動機付けっていう事になります。外発的動機付けって何かなっていうと、お菓子もらえそうだから頑張るとか、叱られるの嫌だから頑張る、賞や罰によって引き出されるやる気っていうのを外発的動機付けっていいませす。もちろん、子育てや保育、幼児教育の分野でも、「今度これ皆にあげるから頑張ろうよ。」っていう様な事はあると思ひませす。別にそれ自体が悪いっていう事ではありません。ただそればかりになってしまうと、賞や罰だけで子どものやる気を引き起こそうとすると、逆にこの内発的動機付けの方がどんどん弱ってくるということも研究を通して分かっています。ご褒美漬けにされた子どもは褒美をもらえなくなると、とたんにやる気を失ってしまう傾向が強い、そんなことも知られているわけでありませす。自己に関わる心の力に含まれているやる気は、内側から湧いて出てくる、面白いからやってみたい、好奇心に駆られたやる気の方であります。そして、自己効力感。ちょっと言葉は難しいんですけども、やればできるはずっていう自信の根源のような感覚です。そして、自制心。自分の衝動を抑えて、自分の行動をコントロールできる。そして、グリットは自制心の一種で、粘り強さとか辛抱強さっていう事になります。そして、一人で決めてちゃんと一人で実行できる、自立心、自律性。こういったものが、自己に関わる心の力の代表的な要素っていう風に考えていただけるといいかなっていう気がします。

一方、社会性って何かなっていった時に、それは集団の中に溶け込んで人との関係を作って維持していくための力、平たく言えば、人と上手くやっていくための力ということになります。でも、人と上手くやっていくためには人の気持ちが理解できる必要があるな、人とちゃんとコミュニケーションとれる必要があるな、心の理解能力やコミュニケーション力は当然重要な要素ということになります。そして、誰かが困っていたら、かわいそう、助けてあげなきゃ、助けてあげる、共感や思いやりもこの社会性の非常に重要な要素です。そして、集団で生活するためには助け合って協調する、協同する、そういう事も必要かと思えます。更には、何が良くて何が悪いかちゃんと判断できる心の力、それを道徳性なんていう言葉で呼んだりするわけです。そして、集団や社会には当然いろんな決まりやルールがあります。その決まりやルールをちゃんと理解して守る気持ちの事を規範意識なんて呼んだりするわけであります。この辺の協同性とか、道徳性とか規範意識ってどこかで見たような気がするなってそんな風に感じる先生たちがいらっしゃるかもしれません。これは、「幼児期の終わりまで育ってほしい10の姿」の中にも使われている言葉であったりします。こうしたものが、社会性を支える重要な要素ということになります。

この自己にしても社会性にしても、お分かりかと思いますが、子どもに限らず、私たち人間がそこそこ日常生活を健全に送るためには誰もが必要だなって心のどこかで感じているもの、正にそれが自己と社会性ということになると思えます。そこにもっとも深い傷を受けてしまう。何でアタッチメントが経験できなくなると、とりわけ自己と社会性という所に最も深刻なダメージを受けてしまうのか。それを少し理解していただくためには、それぞれの1番基盤にあるもの、根っこにあるものを考えて頂けたらいいかなという風に思えます。

自己に関わる心の力の1番基盤、根っこにあるもの、それは自己信頼です。自分を信じる気持ち、自分が信じられる気持ちであります。実はこの自分を信じる、信じられるということは、裏返して言うと、自分でちゃんと人から愛してもらえらるんだという感覚、愛してもらえだけの価値が自分にはあるんだという感覚、そういう風に言い換えることができます。どんなに激しく泣き叫んでも、いつだって無条件的に受け入れてもらえる、愛してもらえ、自分にはそうしてもらえだけの価値があるという感覚、これが自己に関わる心の力の1番の根っこです。一方、社会性の1番基盤、根っこにあるものは何か、すごく素朴な話です。人とうまくやっていくための大前提、それは人って信じていいんだなっていう感覚、他の人に対する信頼、他者信頼、これが正に社会性の1番根っこにあるものであります。

しかし、この子ども達(『ルーマニアの捨てられた子ども達』)、怖くて不安でギャーって声を上げてても多くの場合無視されます。ちっちゃい子どもがギャーって声を上げるっていうのは、言い換えれば助けてって言っているのと一緒だと思います。助けて助けて助けてって何回泣き叫んでも、誰からも助けてはもらえない。その繰り返しの中で、助けてって言っても助けてなんかももらえないのが自分なんだ、愛してはもらえない、愛してもらえだけの価値が自分にはない。言ってみればそうした絶望感にも似たような感覚を、この子どもたちは幼少期の段階で心の奥底に固めてしまう事があるわけであります。もちろん、愛する、愛されるなんて言葉自体は全然知らない。しかし、体でそういう感覚を身につけてしまうということが、実際あるということがたくさん研究から示されています。一方、助けて助けて助けてって何回泣き叫んでも誰も助けてはくれない。その繰り返しの中で、助けてって言っても助けてなんかもくれないのが人なんだ。人に対する不信任感。これが幼少期の段階で心の奥底に固まってしまう事があるわけであります。

実は、こうした恵まれないお子さんたちの研究、悲惨で劣悪な環境で人生を出発させた子ども達の研究は、何もこの研究一つだけではありません。実は、100年以上前から、1世紀以上前から世界各地でこうした研究が行われてきています。そうした研究全体を通して何が言えるかという、私たち人間の一生に亘る心と体の健康、あるいは幸せの形成において最も怖いこと、少なくともそのうちの一つは、私たち人間が一番最初に身につけておくべき心の土台、それが今申し上げた、自分ってちゃんと人から愛してもらえ、それだけの価値があるという感覚や人って信じていいんだという感覚。これが、私たち人間が一番最初に身につけておくべき心の土台だということが心理学では半ば常識とされています。その心の土台を上手く身に付けることができず、言ってみれば、土台の部分が空っぽのまま、その後の人生を送らなければならなくなってしまう。これが実は私たち人間にとって怖いことの1つ。どうしてもその土台を上手く身に付けることが

できていない場合には、その後の人生のいろんな時点でいろんな躓きを見せてしまう事が残念ながら非常に多く発生してしまいます。非行や犯罪に手を染めてしまったり、心や体にいろんな病を抱え込んでしまったり、実際そういう事が非常に多く発生してしまうということが示されているわけであります。逆に言えば、私たちにとってごくごく当たり前のアタッチメント、このごく当たり前のアタッチメントが、私たち人間が一番最初に身につけておくべき心の土台。愛してもらえ、それだけの価値があるという感覚、人って信じていいんだという感覚の発達に決定的に重要な役割を果たしている、そういう事が言えるのかなという気がいたします。

今度は、ちょっと介入研究のお話をさせていただきたいなと思います。触れさせていただこうと思いますのは、非常に有名な研究です。幼児教育や保育の分野ではよく知られているペリー就学前計画といわれる介入研究について少し、アタッチメントとの関りで触れさせていただきたいなと思います。ご存じのようにペリー就学前計画にはとても有名な研究者が関わっておりまして、このヘックマンさんのお名前もすでにご存じかもしれません。2000年にノーベル経済学賞を受賞したとっても有名な学者さんであるわけです。この人の研究テーマ、もちろんいろいろあるわけですが、その中でも1番よく知られているのは、人生のどの時期の教育にお金を投資したら、つぎ込んだら、1番大きい効果があるか。小学校の時の教育にお金をつぎ込む、それが一番大きい効果を上げるかな。それとも中学校の時の教育につぎ込む、それが一番大きな効果を上げるかな。どの時期の教育にお金を投資することが一番大きな効果を生み出すのか、それを明らかにするためにこの人はいろんな調査を手掛け、たくさんのデータを集め、いろんな分析をしました。そして得た結論。非常に有名な結論ということになります。教育にお金を投資する、つぎ込むのであれば、それは圧倒的に義務教育前、小学校に入学する前の乳幼児期の子ども達の教育にお金を投資する。これが長い目で見た時に最も大きい効果を生み出す。もちろんこの場合の投資するというのは、一つ一つの家庭でお父さんお母さんがその子どもにとりだけではなく、むしろそれ以上に、国や自治体などが公的な資金をどれだけちゃんと教育の使うべきところに回して、そしてその質の向上を実現させることができるか。乳幼児期の教育というのは、言い換えれば、それこそ子育て。子育て支援、保育、幼児教育ひっくるめて、その重要なところにちゃんとお金を回して、そしてそれを充実させていくっていう事が長い目で見た時に子ども達に最も大きい利益をもたらすんだよっていう、そういう結論付けをしたということでも知られているわけであります。この人の影響力は非常に大きい影響力があったように思います。かつては、教育というと全世界ほとんどの国が、やはり、義務教育以降、小学校以降の教育に力を入れるというのがそれまでの基本であったような気がします。しかし、今ではヨーロッパを中心に教育のウェイト、重みというのを確実に乳幼児期の方にシフトさせてきている国が増えているわけであります。もちろん、日本も子ども子育て支援新制度であったり、あるいは、保育・幼児教育の無償化だったり、その波ごとに消費税の引き上げがくるわけですが、かつてに比べれば若干子ども達の教育保育、そういったところにお金を回そうとする、そうした動きというのは近年見られているわけであります。ただ、残念ながら、日本はそれをもってしても先進国の中の比較で言えば後ろから数えた方がまだまだ早い。基本的にはまだ乳幼児期の子ども達の子育て支援、保育・幼児教育、そういったところにお金があまり使われない。そうしたところをどういう風に改善することができるか、それは日本という国が抱えている非常に重要な課題の1つなのかなという気がいたします。それだけ影響力を持った人がヘックマンさんということになりますが、そのヘックマンさんの研究の1つがペリー就学前計画。アメリカのミシガン州のとある地域で1960年代初頭に開始された研究であります。

その地域はアフリカ系アメリカ人の貧困層のご家庭が非常に多くあって、貧困層のご家庭のお子さん、お家にお金がない、お金がないことで義務教育の小学校に入学する前に幼稚園や保育園に入れてもらえません。ですから、貧困層のお子さんたちは、大概保育園や幼稚園という所に行くことなくいきなり小学校に入学して、そこで初めて文字や数やらを教わる。小学校の先生たちは、そういう子どもたちに対しても当然一生懸命勉強を教えるんだと思います。しかし、一向に成果が上がらない。それどころかドロップアウトして学校に来なくなってしまう子ども達が後を絶たない。そういう中で、その子ども達に何かしてあげられることはないか。その地域ではペリー小学校と呼ばれる学校があって。ペリーは小学校の名前です。そのペリー小学校には付属の幼稚

園があった。だったら、貧困層、お家にお金がないがゆえに普通であれば幼稚園なんかには入れてもらえないはずの子ども達を、あえて3歳から2年間幼稚園に通わせてみたらどうだろうか。先ほどの介入研究というのは、普通だったら経験できないような特別なことを経験させてみる。そしてその後の効果を検証する。それが介入研究だよという風に申し上げました。この場合は、普通だったら幼稚園に通えないはずの子ども達を、あえて3歳から2年間通わせてみるという介入をしたわけでありまして。その介入が、その後どれだけの大きい効果を上げるか。その効果をちゃんと示すためには、ちょっとかわいそうなんですけど、同じく貧困層の子ども達で、特に幼稚園に通わない子ども達のグループを設けておくわけです。そして、3歳から2年間幼稚園に行った子ども達、特に幼稚園に行かない子ども達、その2つのグループを今の今まで比べ続けている研究がこのペリー就学前計画。この子ども達はもう50歳をゆうに超えてきています。50歳の調査も行われて、結果も示されてきています。

3歳から2年間幼稚園に行った、行かない。その後40年以上の時を隔てて、現在その2つのグループにどれだけの違いがあったか見てみると、相当大きい違いがあったということが示されているわけでありまして。

これは、40歳の段階の結果なんですけれども、色の濃い方が幼稚園に通わせてもらった人たちの、薄い方が幼稚園に行っていない人たち。一番上の比較は、40歳の段階で1か月に2000ドル以上給料をもらっている人のパーセンテージ。2番目は、自分の家を持っているかどうか、持ち家率のパーセンテージ。3番目は、生活保護を受けていない人のパーセンテージ。いずれも色の濃い方、幼稚園に通わせてもらった人達のパーセンテージが高くなっています。40歳の段階で、全般的により経済的に安定している傾向がある、そういう風にまとめていえるのかなという気がいたします。他にもいろんな比較がされているんですけど、例えば、一番上の比較は40歳までの逮捕歴です。悪いことをして警察のお世話にどれだけなったかということの比較。上の方が幼稚園に通わせてもらった人たちですので、幼稚園に通わせてもらった人たちが警察のお世話にあまりなっていない。より健全な日常生活を送れている傾向が強い。そういう風に言えるのかなという気がします。

50歳の結果もいろんな形で示されています。その中で一つだけちょっと紹介させていただきますと、これは50歳の段階の比較なんですけど、実は比較の対象になっているのは、その研究に参加した人たち自身ではありません。その研究に参加した人たちの子どもの比較がされています。50歳を超えている、家庭をもって子どもがいる場合は、その子ども達も相当な年齢になっているわけです。大人になっているわけです。その子ども達の比較です。この右の方が幼稚園に通わせてもらった人たちの子ども。左の方が幼稚園に行かなかった人たちの子ども。一番上の比較は、高校に入学したらちゃんと高校卒業できているかっていうパーセンテージになります。幼稚園に通わせてもらった人たちの子どもの方がパーセンテージが高くなっています。そして2番目は、麻薬、アルコール依存、逮捕歴無し、犯罪などに手を染めていない人のパーセンテージ。やっぱり、幼稚園に通わせてもらった人たちの子どもの方でパーセンテージ高いです。そして、ちゃんと働いているかどうか。働いている人のパーセンテージ、やっぱり幼稚園に通わせてもらっている人たちの子どもの方で高いです。この比較の目的は何かっていうと、幼稚園に通わせてもらった人たちが、言ってみれば、よりいい親になれているかっていう事の比較です。幼稚園に通わせてもらったということが、その後家庭をもって親になった時、ちゃんと子ども達に躰をしたり、教育をしたり、そういう事ができているかどうか、そういう事の比較。実際この結果を見てみると、幼稚園に通わせてもらった人たちがいい親になれている、そういう傾向が強いついていう風になるかなという気がします。いずれにしても、40歳、50歳の段階で、幼稚園に通わせてもらった人たちが言ってみれば幸せの度合いが高いっていう事が言えるわけでありまして。

でも、なんで幼稚園に通わせてもらった人たちが大人になって幸せの度合いが高いのか、普通考えたくなるのは、その子ども達は早くから園に通わせてもらってそこでいろんなことを教わったんじゃないのか、学んだんじゃないのか、教わって学んで頭がよくなったんじゃないのか、頭がよくなったから大人になってちゃんと働いて悪いことしないでいられるんじゃないかなって、そんな風に考えたくなる所なんですけど、ご存じのように、このヘックマンさんという人はそ

ういう考え方をしなかったわけです。それは、それはというのは、40歳50歳大人になった時に、幼稚園に通わせてもらった人たちがより幸せの度合いが高いのはということであります。認知能力は、それこそ頭の良さ、頭のでき、IQの数値にあらわれるような心の力を一般的に認知能力と言います。その頭の良さ、頭のでき、認知能力を身につけることができたということ以上に、認知ではない、という意味で非認知という風に言っているわけであります。英語では Non-cognitive abilities とか Non-cognitive skills という風に言われるものです。認知ではない心の力。言い換えれば、頭の良さ、頭のでき以外の、何か大切な心の力、IQの数値などには表れない何か、大切な心の力。それを見つけることができたということが、より決定的に重要な意味を持ったからじゃないかな、そんな風にこのヘックマンさんは強く主張したわけであります。

その根拠になっているのは、このグラフということになります。横軸は子どもの年齢です。Entry 3歳で幼稚園に入ったよということを意味します。縦軸はIQです。知能指数。認知能力の最も代表的な数値。2本、線があります。上の方の線が幼稚園に通わせてもらった子ども達。下の方が行っていない子ども達。見ていただきますと一目瞭然です。幼稚園に通わせてもらった子ども達は、当初80くらいだったIQが、一気に1年の間に15ポイントほど伸びています。そういう意味では、ちゃんと認知能力にも効果が出ています。この子ども達は、幼稚園に入っているいろんなことをやっぱり教わって学んで頭がよくなった。そういう風に言う事ができるわけです。認知能力にも効果は出ている。ただ残念なのは、このせっきやくここまで伸びたIQの値、そのままずっとその後この値が維持されればいいわけですが、見てお分かりのように、幼稚園に行かなくなると残念ながらこの子どもたちのIQは、低下の一途をたどってしまいます。低下して低下して、小学校に入って8歳9歳10歳ぐらいになると、幼稚園に行っていない子ども達とのIQにはあまり違いがなくなってしまっています。10歳に至ってはIQにほとんど違いがない。認知能力、頭の良さ、頭のできに違いはないんです。しかし、ここから30年40年経った40歳50歳の幸せにははっきりとした違いがある。ということは、40歳50歳の幸せの差、でも、10歳の段階でIQ、認知能力には全然違いがないんだから、認知能力の違いで幸せの差、大人になってからの幸せの差は説明できない。頭がよくなったから、大人になってより幸せになれているという説明はできないわけです。そういう中でこの人は、ヘックマンさんは、認知能力以外の何か別な大切な力を幼稚園に通う中で身につけた。そっちの方がよりはるかに重要な意味を持ったんじゃないかなと、そんな風に主張したわけであります。

でも、非認知、認知、頭の良さ、頭のでき以外の何か大切な心の力って言われても、具体的にそれって何っていう事になるわけです。もちろん、いろんな考え方がされています。ただ、この力は、実はすでに先ほど触れさせていただいております。アタッチメントが経験できなくなると最もダメージを受けてしまう、その発達が遅れてしまう、歪んでしまうと申し上げた、正に自己と社会性の力。それが、非認知とよばれる心の力の具体的な中身って考えて頂けるといいかなという風に思います。でも、なんで幼稚園に通う事のできた子どもたちは、この非認知、自己と社会性の力のある程度身につけることができたんだろうか。その幼稚園では何か特別な教育のプログラムを実施していたんだろうか。そんな事何一つ報告されていません。もちろんいろんなことが絡み合っただけでこういう効果は生み出されているんだろうと思います。いろんなことが絡み合っているんだとは思いますが、その中でも最も大きい影響力を持ったものは何かなって考えた時に、それはすごく素朴な話になります。

その1番大きい影響力を持ったもの、重要なカギを握ったもの、それは、幼稚園という所に行くところとちゃんとした大人の人がいるということになります。先生がいる。いつも同じ顔ぶれで必ずそこにいる。そのこと自体が、この力の発達に一番重要な働きをしたという風にいう事ができるような気がします。ちゃんとした大人の人、ここでは常識、良識をもって温かい感情をもって一貫した関りができる大人。そんな風に捉えていただけるといいような気がします。常識、良識のある大人、温かい感情を持った大人、目の前ですごく寂しそうにして、しくしくずっと泣き続けている子どもがいたらどうするのか。恐らく、そういう大人の人にはほっとくってすることはできないと思います。「どうしたの。」って、やっぱり声をかけてしまいます。そして、多くの場合は、「よしよし。」って自分の方に抱き寄せて慰めてあげる。そして、また、その崩れた感情を立て直して楽しく遊ばせてあげる。それがごく自然にできるような大人の人。

私たち、日常感覚で、ああ、ちゃんとした大人の人だなんて感じるような気がします。少なくとも、自分がそういう大人の人を見ると、ああ、すごくちゃんとした大人の人だなんていう風を感じます。そのちゃんとした大人の人、先生が園に行くとき必ずいてくれる。でも、なんでそのことがそれほどまでに重要な意味を持ったかっていうと、この子ども達、貧困層のお子さんだという風に申しあげました。でも、ただ貧困というわけではありません。この子どもたちは、最初から誰がお父さんか分からない、あるいは、いたけどいなくなっちゃった、お母さん一人の手によって子育てされているケースが多いです。そのお母さんたちも、実は10代の年若いお母さんであることが非常に多いです。言ってみれば、自分の意志で子どもを産みたい、育てたいって考えて子育てしているケースは稀です。むしろ、妊娠しちゃった、産まれちゃったっていう中で子育てが開始されている。実は、そういう中でこの研究に参加している子ども達の中には、家庭ではかなりネグレクトに近いような状態で生活をしている子ども達もいます。それこそ、怖くて不安でぎゃーって声を上げて何もしてもらえない子ども達。怖くて不安で、誰かにくっついて安心感に浸りたくてもそれが叶わない子ども達。言ってみれば、家庭では十分にアタッチメントを経験できていない子ども達。でも、その子ども達が園に行っていると、そこには親とはまるで違って、ぎゃーって声を上げるとごく当たり前のように自分の事を慰めてくれる大人の人がある、先生がいるわけです。言ってみれば、この子どもたちは、家庭では経験できないそのアタッチメントを、家庭の外の、園という所で、そのちゃんとした大人の人、先生との間で、ある程度経験し直すことができた。これが、言ってみればこの子どもたちの非認知、自己と社会性の力の発達に非常に重要な意味を持っている。

先ほど申しあげたように、その根っこにあるのは自分でちゃんと愛してもらえる、それだけの価値があるという感覚や、人って信じていいんだという感覚。残念ながら、その感覚を、この子どもたちは、家庭での親子関係を通して身につけることはできなかったかもしれない。しかし、家庭の外の、その園で先生との関わりを通して自分だとしてもしかして愛してもらえるのかも、それだけの価値があるのかも、助けてって言えば人って助けてくれるんだ、信じていいのかも、そういう感覚をある程度身につけることができた可能性が高い。言ってみれば、このことが大人になってある程度幸せでいられるということの1番大きい理由になっていると考えることができるような気がいたします。心理学の世界では、人の幸せのかなりの部分というのは個人がどれだけ人間関係や集団生活にちゃんと馴染んで適応できるか、言うまでもありませんが、人間関係や集団生活の基本中の基本というのは人と人が信じあえるっていう事です。そのための基礎をこの子どもたちは家庭の外の園で学ぶことができた。それが大人になってからの幸せの基盤をなしている、そういう風に考えることができるかと思います。3歳からたった2年、もちろん休みがあったりあるいは午前中心の関りであったり、そういう事を考えると、決して長い時間、長い期間だとは言えないと思います。

しかし、この乳幼児期の段階に、親に限らず自分の事を無条件的に受け入れてくれる大人の人と出会い、その大人の人と一定期間持続的にちゃんと安定したアタッチメントを経験することができるということ、それがその後の私たち人の人生に確実に影響を及ぼします。親に限らずこの幼少期の段階で自分の事を全面的に無条件的に受け入れてくれる、感情を立て直してあったかく自分の事を受け入れてくれる、そういう大人の人と出会うこと、そして、一定期間その人とちゃんとこういうアタッチメントを形成することができること、それが非常に大切だということ、実はこの研究もまた私たちに、先ほどの剥奪研究とは別の意味でこのアタッチメントの大切さを教えてくれるのかなという気がいたします。今こうした研究というのが、世界でそれこそ非常に精力的な形で行われています。そして、改めてこの乳幼児期の大切さという所に注目が集まっているわけであります。

乳幼児期は、言うまでもありません、人の一生の基礎工事の時期、土台形成の時期です。先ほどのヘックマンさん、自分自身の研究結果を通して、これまで言われてきた小学校・中学校・高校とかの教育ってそんなに重要じゃないよなんていうことを言うわけでは全くありません。どの時期の教育も、もちろんそれぞれ違った意味で重要なんだ。だけど、まずは土台だよっていう事をとりわけ強調するわけです。土台が最初にしっかりと作られていれば、当たり前のことですが、しっかりと土台の上にはちょっとずつでも確実に物は積みあがっていく。逆に、土台が

全然上手く作られていない、ぐらついた土台、ぐらぐらした土台の上に小学校以降のどんなに立派な教育を受けようと思っても、その立派な教育はぐらついた土台にとってはただ重たいだけ。すぐに傾いてつぶれてものにならない。そういう中で、ヘックマンさんは、この土台作りってところにもっともっと私たちは目を向けていいんだということを強調するわけであります。小学校以降の教育がちゃんと子ども達に成果を上げるためには、小学校以降の教育を良くするだけではだめだ。むしろその前のほうがはるかに重要な意味を持つ。土台がしっかりと作られていて、初めてその後の教育っていうのもちゃんと子ども達に成果を上げるんだらう、そのことに、もっともっと目を向ける必要がある。そういう事を強く主張するわけです。そして、土台は土台でも非認知って言って、この自己と社会性の方の土台をしっかりと作っておくということがとっても重要だ。大人になって Well-being 幸せになれるっていうことにおいて、やはり乳幼児期に非認知、自己と社会性の力を身につけておくことが重要だ。そして、時間の関係で詳しくはお話できないんですが、実は最近の研究においては、この認知能力、頭の良さ、頭のでき、あるいは学校の成績なんかも、乳幼児期の段階ではまずはこっちの非認知っていう方の力をしっかりと身につけておくと、その後徐々にそれぞれの子どものペースで伸びていく傾向が強いんだよ、そういう事が示されてきています。

私たち大人の中には、その逆のことを考えることもあるかもしれません。この子には将来頭良くなしてほしいな、学校でいい成績とれるようになってほしいな。だったら0歳の段階からいっぱい早期教育、知育教育いっぱいやってあげて、もう乳幼児期の段階からこれがいえる、これができる IQ の値が高い、認知能力の方の土台を早くからしっかり身につけておくということが大人になってからの頭の良さや仕事の上での成功に直結するんじゃないか、そんな風について私たち考えてしまう傾向もあるのかもしれない。しかし、研究の世界では意外にそれは言えないなっていう事の方が、最近の研究結果を通して示されてきています。むしろ乳幼児期の段階では、非認知、自己と社会性の方の土台も身につけておくということが結果的には学力や認知能力にもプラスの影響をもたらす。考えてみるとある意味当たり前なんです。さっき自己に関わる心の力、自分の事を大切に、適度にコントロールできてもっともっと自分の事をよく知ろうとする力だという風に申し上げました。面白いことだったら夢中になってやる。なんとか自分の力でやろうとする。あるいは、自分の感情をコントロールする。言ってみれば、頑張るっていう所に繋がる心の力って言うそれが自己の心の力だったりします。社会性って言うのは、集団の中で上手くやっていくための力。それこそ学校にちゃんと適応する力だったりします。ああいうものをちゃんと幼少期の段階で身に付けておくことができ、子どもが、言ってみれば自分が頑張る中で、少しずつこういう認知能力や学力を高めていったとしても何も不思議ではないわけです。そのことが、研究の世界でもはっきりと示されてきている。そして、こういう自己と社会性というのを支える、促すという所の一番基盤にあるものが正にアタッチメントということになるわけです。

このアタッチメントをもう少し、これを深堀してみたいと思います。もうすでに申し上げていますが、子どもは容易に怖がる、不安がる存在です。そして、多くの場合は泣きながら誰かにくっつくこうとする。くっついて安全感・安心感に浸ろうとする。これがアタッチメントであります。ただ、ここで一つ注意していただきたいのは、アタッチメント、確かに元々の言葉の意味はくっつきです。しかし、これは、皮膚と皮膚がぴったりとくっついて気持ちがいい、心地いいというスキンシップとは意味が全然違います。実は、このアタッチメントとスキンシップは非常に勘違いされ易いのです。「アタッチメント重要ですよ。」と申し上げると、時々、「それって子どもをたくさん抱っこしてあげればいいってことですよ。」とか、「長くしっかり抱っこしてあげることが重要ですよ。」みたいに言われてしまう事も少なくありません。しかし、アタッチメント、いっぱい抱っこが重要だ、長くしっかり抱っこが重要だ、皮膚と皮膚の接触が重要だという考え方では全然ないです。このアタッチメントが強調するのは、あくまで子どもの感情が崩れた時、怖くて不安な時にしっかりと近くにいる大人の人がそれを共感的に受け止めて元通りに立て直してあげる、そして安心感をしっかりと与えてあげる、この安心感をしっかりと与えてあげるということの大切さを強調するのがアタッチメントです。

確かに、0、1、2歳っていう乳児の段階では、怖がっていたり不安がっている子どもを抱っ

こしてあげる、一番それは慰める効果的な方法である、これは間違いのないことかもしれません。しかし、その子ども達が、3歳4歳5歳と年齢が高くなっていく、そうした時には、もはや抱っこという方法は必要ない場合の方が多いような気がします。離れた所からにこって笑ってあげる、声かけをしてあげる、ただ温かい目でじいっと見といてあげる。それだけでも十分子ども達は安心感に浸れるはずで、重要な事は、安心感を与えること。実は今日は、このアタッチメントを子どもの話として取り上げているんですが、本来このアタッチメントという考え方は、子ども限定の考え方ではないんです。実は、私たち大人にとっても人の一生涯にわたってずっと大切な物であり続けるっていう大前提があります。

私たち大人も時々はやっぱりいろいろなストレスみたいなものを抱えて、不安になったり辛い気持ちになったりする。そういう時に、誰かに話聞いてもらいたいなっていう様な気持ちが強まったり、誰かと一緒にいたいなっていう気持ちが強まったり、ずっと帰ってないけどしばらくぶりに実家にでも帰ってみようかなって気持ちになったり、そういうことは少なからずあるかと思えます。あれも全部アタッチメントです。結局人間というのは、生涯にわたってちゃんと安心感に浸れている状態というのが一番健康な状態です。だから、それがちょっとでも崩れると、その安心感を回復しようとして、言ってみれば誰かと一緒にいたい、そういう気持ちが強まってくる。そういうことが言えるわけでありまして。そういう意味でアタッチメント、スキンシップとすごく勘違いされやすいんですが、それとは全然違う。言ってみれば、年少、年中、年長、子どもの年齢が上がって行って、さらには小学生、中学生、そういう風な年齢の段階になっても、アタッチメントは依然として重要なものであり続けるという、そここのところは是非しっかり押さえて頂ければありがたいなという風に思う所であります。

そして、アタッチメント。それこそ怖くて不安な時にだれかれ構わずではなく、この特定というのは別にたった一人という意味ではありません、何人かの決まった人に近接、くっつきこうとします。怖くて不安な時には何人かの決まった人、お家では、お母さんお父さんおばあちゃんおじいちゃんのような人かもしれません。そして園では、担任の先生を中心にやっぱり何人かの決まった先生に、子どもが怖くて不安な時、感情が崩れた時にくっつきこうとする。そして、くっついてちゃんと安心感に浸ることができている子どもほど、怖くて不安な時、ちゃんと安心感に浸れている子どもほど、ここにある見通しっていう感覚を確実に持つことができるようになる。見通して何かっていうと、何かあったらあそこに行けばいい、何かあったらあの人めがけてギャーって泣けば絶対確実に自分の所にすぐ飛んできてくれる、絶対自分の事守ってくれるはず、これが見通しです。そして、その見通しが一度ちゃんと子どもの中に成り立つと、子ども達はその見通しに支えられてどんどん自分から自発的に探索ができる。冒険やいろんなものにチャレンジすることができるようになっていく。もちろん子どもというのは好奇心の塊です。あれやりたい、あれ見たい。好奇心が非常に旺盛です。それはある意味、このように子どもが生まれた直後から、その好奇心の旺盛さっていうのは始まっているわけです。だけど、子どもは同時にやっぱりすぐ怖がりです。すぐ不安になります。特に、早い段階の子どもはすぐに怖がるんです。昨日まではそこまでしか行ったことがない、その先がすごく気になる。気になるけど暗い、真っ暗で何いるかわかんない。もしかしたらお化けいるかもしれない、お化けいたらどうしよう。お化け怖い怖い怖くて行けない、怖くて行けないけど、何あるか見てみたい。お化け怖いという恐怖。そして一方では、何あるか見てみたい、知らない所に行ってみみたい、その好奇心。恐怖と好奇心の間を行ったり来たり、正にそのせめぎ合いです。しかし、この見通しっていう感覚を持つことができた子どもは、ある時思い切るわけです。お化け怖い怖い、怖いけどいたらいたでその時ギャーって泣けば先生絶対すぐ自分の所にとんできてくれるよね、絶対自分の事守ってくれるよね、だったら今日行っちゃおうかな、行っちゃえ、行っちゃう。そうやって子どもというのは、それまで怖くて不安で踏み込めなかったところに一步勇気をもって踏み出していくことができる。そうやって大人が全然気が付かないでいる間に、子どもの行動半径って確実に広がっていつているわけです。そうやって、子どもというのは確実に一人でいられる力っていうのをちゃんと身に付けることができるようになっていきます。

実はこのアタッチメント、元々の言葉の意味は確かにくっつきです。しかし、すでにお話ししているように、それは皮膚と皮膚がぴったりくっついていて、大人と子どもがそれこそ本当に身

体的な意味のくっついていいることが重要だという考え方では全然ないんです。むしろアタッチメントという考え方の一番強調するのは、幼少期の段階でいかに子どもが一人でいられる力をちゃんと身につけることができるようになるか、そこを一番重視する考え方。一人でいられる能力、それを少し専門的な言葉で言うと自律性。ちゃんと一人で決めて、いろんなことが一人でできるになる。そういう力。それをちゃんと幼少期の段階で身につける。こう考えると、アタッチメントというのは、ある意味逆説的かもしれません。何が逆説的かっていうと、幼少期の段階で怖くて不安な時にちゃんとくっつくことができている子どもほど、くっつくことがちゃんと経験できている子どもの方が、その後徐々に人にべたべたくっつかず依存せずにちゃんと一人でいられるようになっていく。くっつくっていう事がちゃんと経験できている子どもが、結果的にはちゃんと一人でいられるようになっていく。私たち大人の中に、時々その逆のようなことを考える時もあるかもしれません。この子には、とにかく早くから一人でいられるようになってほしい、何でも一人でできるようになってほしい。だったら、もう赤ちゃんの段階から、少々泣くぐらいだったらむしろほっとくぐらいが丁度いいんじゃないの。ほっとくことによって最初はつらいかもしれないけれど、子どもは徐々にそれに耐えて、徐々にたくましく一人でいられるようになるはずだ。そんな風について考えてしまう事もあるかもしれません。しかし、実際それをやったらどうなるかっていうことを、むしろその大人の人思いとは裏腹に、そうされた子どもは一人でいられなくなるの方がやっぱりあるんだと思います。大人が少々泣きながら思っても、子どもの側からすると、怖い、怖くてくっつきたい。くっつきたい時にくっつけない子どもは、むしろくっつくことに非常に執着していきます。後追いやしがみつきの現実的には非常に強まってしまって、結果的には一人でいられなくなるということの方がむしろ助長されてしまう。これが一つの現実です。ちゃんとくっついて、安心感をちゃんと経験できている子どもは、この見通しっていう感覚をちゃんと持つことができるからこそ、一人でいられるようになっていく。そして、今申し上げたようなことを、よくアタッチメントという考え方では安心感の輪という図にして考えることが多いです。この輪っかの事を「安心感の輪」といいます。

ここに、二つの手のひらがあります。これが、子どもが信頼を寄せる大人の人って考えて頂ければと思います。家庭では、お母さんやお父さん、おばあちゃんおじいちゃんのような人、そして園では、当然担任の先生を中心に何人かの決まった先生方が正にこの手のひら。この大人の方は、子どもにとって二つの大きな役割、一つは安全な避難所、そしてもう一つが安心の基地です。子どもは好奇心の塊です。好奇心の塊。好奇心に駆られて、あれやりたい、これやりたいと遊ぶわけです。いろんな活動するわけです。しかし、当然ちっちゃい子ども、ちょっとしたことで転んでしまう、痛がる、ギャーって泣く。他の仲間とトラブルを起こす、ギャーって泣く、暗くなっちゃった、ギャーって泣く。怖くなって不安になった時、あそこに行けば絶対大丈夫なはず。その時、その大人の方は正に避難所の役割を果たすこととなります。その避難所目がけて駆けてこんでいく。そして、そこで慰めてもらって安心感に浸る。一度安心感を回復したら、同じ人を今度は基地にして、拠点にしてまた元気よく飛び出して、また好奇心の塊になっていろんな活動をする。だけど、また転んじゃう。知らない人が突然物陰から出てきてびっくりした、怖い。怖くなって不安になると、また避難所へと駆け込んでいく。そして慰められて安心感を得たら、また同じ人を基地にして元気よく飛び出していく。また怖くなったら避難所に戻る。元気回復したらまた基地から飛び出していく。言ってみれば、子どもの日常生活は、この輪っかの上をひたすらぐるぐるぐるぐる回ることなんだ。すごく当たり前のことを図にしているんです。

しかし、この当たり前の事、いかにこの輪っかが安定して回っているか、これが、言ってみれば子どもの心と体の健康な発達が一番のカギになるということ、そういう風に考えることができるというわけです。逆に言えば、この輪っかを子どもがスムーズに安定して回るためには、大人がこの二つの大きな役割、避難所と基地の二つの大きな役割を果たす必要があるということになります。避難所、これはもうすでに申し上げています。怖い、不安、崩れた感情に寄り添って、それを共感的に受け止めてあげる。そして、その崩れた感情を立て直して、安心感を回復させるのが避難所の役割ということになります。でも、その感情を立て直すっていう時に少し考えていただきたいこと、それはちょっとここに書いたものであります。

その子どもの崩れた感情を、大人が鏡になって映し出してあげる。もちろん子どもの機嫌を直

すっていう時にいろんな方法あると思います。不機嫌になっている子ども、泣いている子ども、お菓子あげる、好きなおもちゃ与える、それで子どもは一時的に機嫌を回復してくれるかもしれませんが。しかし、やっぱりそうした関わりというものは、大概はその場しのぎです。本当に子どもの感情を、心底ちゃんと立て直すためには、大人が鏡になって子どもの気持ちを映し出してあげる、そういう事が必要だと言われています。例えば、先生方が担当していらっしゃる子どもが何かに躓いた、激しく転んだ。すごく痛そうな表情をして大泣きして自分の所に近づいてきた。先生って言って近づいてきた。そして、先生はその子どもの痛そうな表情を目にする。見た瞬間、その痛そうな表情を見た瞬間、先生方ご自身がどう反応するか。子どもが何かを口にしたり、食べた。そして子どもがいきなりすごくすっぱそうな表情を見せた。そのすっぱそうな表情を見た瞬間、先生方ご自身どう反応するか。瞬間的に子どもと同じように痛そうな表情になってしまったり、すっぱそうな表情になってしまったりする。自覚してなくても意外と子どもと密に関わっている大人というのは、かなり頻繁に子どもと同じような表情になってしまう。でも、考えてみると、「先生。」って言って先生の顔見たら、先生の顔が痛そうな表情。でもその痛そうな表情は、実は、子ども自身の痛そうな表情が先生の顔という鏡に映し出されているのと一緒。表情を通して気持ちを映し出してあげる。でもそれだけではなく、たぶんそれとほぼ同じタイミングで先生方は、「ああ、痛かったね。」という言葉を出している。「すっぱい、すっぱい。」っていう言葉を出している。部屋の隅でちょっと寂しそうに泣いている子どもを見ると、「寂しかったね。」とかっていう言葉を出している。何かができなくてしゅんとしている子どもの様子を見た時には、「悔しかったね。」なんていう言葉をつい口から出している。疲れた様子の子どもの様子を見た時には、「だるいの。」って言葉が自然に口から出てしまう。言葉を通して子どもの気持ちや感情を映し出す。これもしているわけです。実は、これが共感するということです。心底子どもに共感する。思いやりを示すということです。そしてこの共感、思いやりをしっかり示してもらった子どもが、心底自分自身の気持ちをちゃんと立て直してちゃんと安心感に浸ることができる。全部丸ごと受け入れてもらえたっていう気持ちになる。これが、実は避難所の在り方としては非常に重要なんだけって考えて頂けるといいかなという気がいたします。

しかし、大人の役割はここで終わりではなくて、もう一つ基地の役割があります。アタッチメントという、どちらかというこの避難所の役割という所が強調されがちなんですが、もう一つのこの基地の役割、それこそ避難所に戻って安心感を得て、元気になった子どもを大人は自分の所に留めておくのではなく、その背中をまたちゃんと押してあげる、そして、子どもが一人であるいは仲間同士で探索や冒険に向かっていけるように応援する、そして、離れたところから見守るということ。子どもの背中をちゃんと押してあげる、あえて自分の身から離して、子どもが一人で仲間同士で、何かにまた夢中になれるようにそれを応援する、これが基地の役割ということになります。この二つの役割をバランスよく果たしていく時に、子どもがこの輪っかを安定して回ることができるという風に考えることができます。そして、子どもが成長する、発達するというのを、このアタッチメントという考え方がどう捉えるかっていうと、この輪っかが徐々に広がっていくこと、それが子どもの成長発達です。

輪っかが広がっていくというのは、子どもがちゃんと一人でいられる力を身につけて、どんどん一人でいられる時間が長くなっていくということ、これが子どもの成長発達です。

0歳1歳のあたり、子どもは怖がってお母さんやお父さんの所にすぐ戻ってくる。そして、膝の上べったりのっかっている時間が長いかもしれません。しかし、その子どもが2歳になって、さらには園に入って行く。そうすると、子どもの輪っかは相当ひろがっています。そして、4歳、5歳、小学生、中学生、高校生、どんどん輪っかが広がっていく。一人でいられる時間が、どんどん長くなっていく。でも、この一人でいられる時間が長くなっていくっていうのは、言い換えれば、物理的な意味ではもう避難所、基地にあんまり戻ってくる必要がなくなるということの意味します。当たり前のことです。輪っか広がって、一人でいられる時間が長くなるっていうのは、言い換えれば、もうめったに避難所、基地に戻って来なくてもよくなるっていう、くっついてなくてもよくなるということの意味します。物理的にもう戻ってこない。じゃあ、その子どもにとってもう避難所、基地っていらないうことじゃない。つい私たちはそんな風に思ってしまうかもしれません。しかし、話はむしろ逆です。この輪っかがどんなに広がって、どんなに一人で

いられる時間が長くなっても、そして、子どもがくっついて来ようがこまいがそれに関わりなく、ただ変わらずにあり続けるというのが正に避難所、基地の一番大きい役割です。決してこの避難所、基地は消えてはいけないものです。子どもがどんなに大きくなっても、避難所、基地は消えてはいけない。それって結局どういう事かっていうと、輪っかが広がる、一人でいられる時間が長くなる、でもその子どもの気持ちからすると、「自分、何かあったら絶対戻れるところがあるもん、何か本当に困ったことがあったら絶対守ってくれる人いるもん。何かあった時に確実に戻れるところとしての避難所がずっと変わらずにあり続ける。そして、自分が何か思い立った時には「絶対見てくれる人いるもん、絶対応援してくれる人いるもん。」それが基地です。何かあった時に確実に戻れる所としての避難所。何か思い立った時にそれを必ず応援してもらえる所としての基地。これがずっと変わらずにあり続けるということが非常に重要なわけでありまして。年少の時はあんなに頻繁にくっついてきたAちゃん、でも年中になって年長になったら、今日一回でも自分にくっついてきたかな、全然くっついてこなかった、年齢が上がって全然くっついてこなくなった。もうAちゃんにとって私必要ないのかな。でも、話は逆なわけです。確かに物理的にはくっついてこなくなった。一人でいられる時間が長くなった。でも、子どもの視界の中には、必ずその先生はどっか入っているんです。子どもが見ている視界の中に先生は入っていて、子どもからすると、本当に何か困ったことがあったらあそこ先生いる、先生の所に行けば絶対大丈夫。絶対戻れる所としての先生がいてくれる。そして、何か自分がやっている所を先生は見てくれている。応援してくれている。物理的には離れていても、この避難所、基地があるからこそ子どもは遊びや活動に夢中になる。自発的な遊びっていうのを展開することができる。そういう風に考えることができるんだと思います。

よくこのアタッチメントを Autonomy/Relatedness Autonomy そのまま訳すと自律性。Relatedness は、誰かと関係を持てている状態です。平たく言うと、Autonomy は一人でいること、Relatedness は二人でいること。一人でいることと二人でいることは、物理的には絶対に両立しないものです。当たり前です。一人でいることと二人でいることは物理的には絶対に両立しない。しかし、それが、心の中では表裏一体ということです。これがアタッチメントです。一人でいることと二人でいることが、心の中では表裏一体。これがアタッチメント。その意味は、今申し上げたことです。自分に何かあったら絶対戻れる所があるもん、何か思い立った時には、それを応援してくれるところあるもん。何かあった時には必ずまた二人になれる、二人でいられる。その見通しに支えられて、子ども達は、ちゃんと一人で自律的にいろんな活動をすることができる。そして、自分の世界をどんどん広げていく。可能性を広げていく。そういう事が言えるんです。もちろん私たち大人は、できるだけいいことをいっぱいやってあげたいものだと思います。特別なことをできるだけいっぱいやってあげたい。いろんな良い刺激をできるだけ多く与えてあげたいと思うものだと思います。それ自体は決して否定されるべきことではありません。大人の役割は、いろんなこと子どもに体験をちゃんとさせてあげる、それはそれですごく重要です。しかし、時々その思いがあまりにも強くなってしまうと、それこそ、いっぱいやってあげられる大人がいい大人、みたいに思ってしまうと、時々やっぱり勘違いするわけです。いろんなことやってあげられる大人がいい大人。そういう風に思ってしまうと、あれはやってあげた方がいい、あれも必要だ、これまだやっていないから急いでこれをやってあげなきゃ、やらせなきゃ、そういう思いが強まってしまう。意外に私たち大人は、ここの手の平の所にいられなくなって子どもの後ろについて回ったり先回りしてしまったりということが、やっぱり多く生じがちなんだと思います。そうになってしまうと、先ほどから言っている一人でいられる力、こういったものの発達というのは、時に阻害されてしまうようなこともあるわけでありまして。そういう中で、いろんな事をしてあげるっていうこと自体は、それはそれで重要なんですが、それ以上重要なのが、言ってみれば、子どもからすると、何かあった時に絶対戻れる所としての避難所、何か思い立った時に絶対応援してもらえる所としての基地。この避難所と基地としてあり続けるということが、実は子どもの育ちにおいて最も重要な大人の働きなんだということで、そんな風に考えて頂けるといいかなという気がいたします。

ということで、既に時間が過ぎているんですが、言ってみれば、この輪っかをちゃんと回れている状態というのが、子どもが実は自発的な遊びに夢中になれている状態という風に言う事がで

きます。子どもがしっかり遊びこむことができる、あるいは、いろんな活動に夢中になれるっていう状態というのは、この輪っかがちゃんと回っている時であります。

ちょっと時間の関係で、この辺があるんですが…。最後の方に、遊びって言う、言ってみれば、この好奇心を満たす自発的な遊びって言う様なもの、これが実はあの輪っかがちゃんと回る中でより可能になる、そしてこの自発的な遊びの中で、子ども達って言うのは、すごくいろんなことを学ぶ。アタッチメントがもたらす安心感に支えられて、子どもは思い切り自発的に遊ぶことができる。子どもの遊び、時に大きく二種類に分けて考えることがあります。

一つは、この孤独な科学者としての遊び。孤独な科学者。子どもは、時々一人黙々と遊ぶわけです。一人遊びに夢中になる。積み木をただひたすらこう積み上げる。同じことに夢中になる。大人からすると何面白いんだろうか、さっきからずっと同じことばかりやっている。もっと違う遊びやった方がいいんじゃないかな、全然発展性がないと思う。だけど、子どもの様子を見ると、嬉々としてずっともう何十分も同じような遊びを続けている。その孤独な一人遊びです。科学者。科学者って何をする人かっていうと実験する人です。でも闇雲に実験するわけではなくて、仮説を立てて実験する人。仮説を立てて実験して、実験を通して、「ああ、この仮説、当たり。間違い。」そういう事を地道に検証している人が科学者です。でも、子どもが一人遊びに夢中になっている時、その時子どもの頭の中では、この科学者と同じような脳の働きが生じている。積み木に夢中になっている。でももしかしたら、その子どもの頭の中には、「どうやったらさっきよりも一段高く積み上げることができるんだろうか。どの形の積み木を上、どの別の形の積み木を乗せたらもっと高く積みあがるんだろうか。きつこの形の積み木だ。」と仮説を立てる。仮説を立てて実際にやってみる。やってみたらできた。さっきよりも一段高く積みあがった。達成感です。自分の思い通りに事が叶った。これももっとも質の高い喜びです。達成感。自分の思い通りに物が叶った。一回この達成感喜びを知ってしまうと、もっとやりたいっていう気持ちが子どもの中には沸き上がってきます。そしてさらにもう一段、もう一段。そういう風に子どもの好奇心というのは果てしなく広がっていく、膨らんでいくわけでありまして。でも考えてみると科学者、私たち大人の中ではすごくよく頭を使う人です。一人遊びに夢中になっている時に、子どもというのは、正にすごく頭をよく使っている。しかし、仮説、こうなるだろうっていう風に思ってやってみた。でも、それがいつも思い通りになるとは限らない。むしろ思い通りにならないことの方が多いかもしれません。絶対さっきより一段高く積みあがるはずって思って積んだら全部崩れちゃった。子どもは一種のフラストレーションに落ちるかもしれません。がっかりするかもしれません。でもその時にまた、一回この達成感、喜びを知っている子どもは、へこたれずに「じゃあもう一回かいてみよう、この形の積み木じゃなくてこっちなんだ。」と仮説を立て直すんです。結局子どもは正に一人遊びの中で、仮説を立てて実験して、実験失敗したらまた仮説を立て直す。永遠とそれを繰り返してる。科学者と同じような頭を使っている。すごくよく頭を使うんですね。頭を使えば使うほど地頭は鍛えられます。重要な事は、何かが結果として出来たっていう事ではなくて、頭を使うという経験そのものが、どれだけ成り立っているか。夢中になって何かに取り組んでいる時に、子どもはそれぞれ仮説を立てて実験して実験失敗したらまた仮説を立て直して。すごくよく頭を使う。頭は、使えば使うほど子どもの情報を処理する力、しっかりと物を考える力、こういった物が子どもの中にしっかりと成り立っていくということが言えるわけでありまして。正にこういう経験を通して、自分の頭で考えぬく、これはいわゆる、最近の言葉で言うと、主体的、対話的で深い学びの中の主体的で深い学びって言うのが、正にこういう風な子どもの経験の中で培われるって言う風に考えていいのかもしれない。

しかし、当然ですが、子どもはいつも一人で黙々と遊んでいるだけではないのです。仲間と遊ぶ。これが、社交的。社交的。仲間と遊ぶわけです。そして、ここに法律家という言葉があります。これは、それこそ揉め事、争いごと、それを駆け引きや交渉を通して、うまく解決するプロフェッショナル。これが法律家。この法律家の意味は、そういう事です。駆け引きや交渉を通して、言ってみれば、ちょっと違う考え方や文化を他の仲間と自分の考え方や折り合いつけながら一緒にこう楽しく遊ぶ。子ども達は、時々残酷なそういう物を経験するかもしれない。しかし気が付いてみると、いつの間にかまたご機嫌に仲間ともシェアされたりします。子どもは子どもなりに、いろんな形でその葛藤みたいなものを解決する。駆け引き、交渉する。法律家も

また科学者とは全然違った意味ですごく頭をよく使うんです。正に、仲間と一緒に遊びに夢中になっている時の意見の違いなんかが生じて対立が生じるかもしれない。しかし、それで駆け引きや交渉をしながらだけど、一緒にこうやったりやったりしていく。そういう経験を通して、子どもというのは他の人と共同していろんなことを学び合うって事ができるわけです。これが、正に、さっきのよりは対話的で深い学び。こういったものに繋がっている。いわゆる主体的で対話的な深い学び、そのために何をしたらいいか。でもこれ、やっぱり根本に還ると、一番重要な事っていうのは質の高い一人遊び。質の高い集団遊び。これ自体が、実は主体的、対話的で深い学び、そのものだっていう、頭を使うという経験そのものが重要。結果として何かが出来たっていうのは、それはもうどちらかというと二の次三の次で良いわけです。頭を使うという経験そのものが、しっかりと円の中で成り立っているかどうか。これが、確実にやっぱり子ども達の将来に繋がっていくっていう風に考えていただけるといいかなっていう気がいたします。いずれにしても、要するに、この輪っかがしっかりと回っている中で子ども達というのはこうした遊びに夢中になれるんだ。ちょっとでも不安なことがあると、子ども達っていうのは遊びに夢中にはなれないんです。あらゆる不安から解放されたその状態で、子ども達は思いっきり遊ぶ。あるいはいろんな活動に夢中になれるということ。そういう意味で、ちょっとこのアタッチメントというものを円の中でどういう形で成り立っているのかな。一人一人の子どもを見た時に、子ども一人一人ちゃんと安心感の輪っかというのを回ることができているのかな。あるいは、Aちゃん、Bちゃん、Cちゃんそれぞれ子どもにとって私は基地、避難所としてちゃんと役割を果たすことができているのかなって、時々そんなことを考えて頂けるといいかなって思う所があります。

冒頭にお話ししたように、アタッチメントというのはすごく当たり前の話です。すごく当たり前の話なんです。しかし、当たり前のことの中に、実は一番大事なことが含まれている。私たちは、当たり前のことを当たり前すぎて時々思い返してみるっていうことをやめてしまったりします。でも、当たり前のことの中に一番大切なことが含まれている。そういうことを少し頭のどっかに置いといていただいて、安心感の輪とか避難所とか基地とか、そういう言葉を時々思い出していただきながら、日々の保育や幼児教育というようなものを、時々見直していただければなという風に思う所でございます。長時間にわたってご清聴いただきましてどうもありがとうございました。

分 科 会

第1分科会	「子どものやさしさや思いやりの育ちを考える」……………	25
第2分科会	「保育者の主体的な学びと遊び体験の充実」……………	29
第3分科会	「得意分野を磨き遊びの専門性を高める」……………	33
第4分科会	「仕事の効率化と組織の活性化を考える」……………	37
第5分科会	「子ども理解から子どもの育ちを考えた保育実践」……………	41
第6分科会	「子どもたちの多様性の尊重、ジェンダー平等などへの理解を深める」 ……………	45
第7分科会	「子どもとともに作り出す環境構成」…………… ～主体的・対話的で深い学びを支える環境の構成・再構成～	49
第8分科会	「子どもとともに作り出す環境構成」…………… ～子どもたちの主体性を大切にする丁寧な保育～	53
第9分科会	「子どもとともに作り出す環境構成」…………… ふれあい活動を豊かにする環境構成の工夫 ～コーナー別活動の実践を通して～	57
第10分科会	「子どもの主体性がいきる保育者のかかわり」……………	61
第11分科会	「子どもの主体性がいきる保育者のかかわり」……………	65

第1分科会

「子どものやさしさや思いやりの 育ちを考える」

助言者	丸田 愛子（鹿児島国際大学福祉社会学部准教授）
司会者	鶴野恵理香（信愛こどもの園）
問題提起者	菖蒲ゆかり（第一鹿屋幼稚園）
記録者	新町名々保（鹿屋幼稚園）
記録者	松浦 茜音（鹿屋幼稚園）
運営委員	三浦 昌平（大崎幼稚園）

【研究課題】

愛されて育つ子ども

【研究・研修の視点】

子どもたちを取り巻く環境が目まぐるしく変化している。少しずつコロナに対する状況も緩和されつつある中ではあるが、地域とのコミュニケーション不足や人間関係の希薄化、ジェンダー、貧困などの世界的な問題も多く取り上げられている。

保育現場でも、様々な行事の縮小や中止が続いていたため、家庭との関わりが少なくなっていた。また、情報機器の普及により、物的環境は豊かになっているものの、価値観が多様化し人間関係が希薄となっている。そのため、他者を理解し、多様性を感じ、思いやりを育むきっかけを作るためには、どのようなことに取り組めば良いかを考えなければならない。

本園では、このような現状を踏まえて、SDGsなど、家庭や地域の力を借りながら、様々な取り組みを通して、多様性を肌で感じることはできないかと考えている。そこからさらに、大人の丁寧な関わりを加えることで、自己肯定感も高まり、本園の教育方針の1つでもある心身共にたくましい元気な子が育ち、身近な友達や人、物に対しても目が向けられ、思いやりや優しさを発揮していけると考える。

【研究・研修の手がかり】

- ・ 普段から友達に対しての言葉遣いや関わり方の課題点が園全体で多く挙げられたため、改善に向け、絵本を基に劇や思いやりの木を実施し、子ども同士の関わりを考える。
- ・ SDGsを基に、視野を広げ地球規模の問題や福祉的な観点を知り、他者を理解し、多様性や思いやりを育む。
- ・ 園内研修を通して子どもたちの育ちに目を向け、保育者間で共通理解し、丁寧な働きかけを行うことで、子どもたちの個性が尊重され、自己肯定感が育つと考える。

【研究計画】

◎令和4年度

「愛されて育つ子ども」について研究をさらに深め、子どもを取り巻く環境を考慮し、保育実践、園内研修を継続する。

◎令和5年度

子どもが主体的に活動できる環境設定を工夫し、自主性や多様性を養う。

【発表の概要】

(1) 研究・研修テーマのとらえ方

人との関わりの中で、相手の気持ちに気付き、共感することができるように、保育者が環境を整え、思いやりに繋がる過程を研究する。

(2) 研究の内容

友達の関わり方について知り、思いやりへの理解を深め、さらにSDGsを基に福祉的観点を知る。また、園内研修を深め、子どもの思いに寄り添い、成長を見守る。

(3) 研究の方法

- ・ 思いやりについて、人との関わりを楽しむ環境の構成を工夫する。
- ・ 支援活動を実施したり、手話を通してコミュニケーションの図り方を学んだりする。
- ・ 子どもたちに関する情報共有の在り方について、園内研修に着目して考える。

(4) 実践例

- ・ 友達の関わり方について、思いやりの絵本を参考にした保育や「思いやりの木」の作成を通して、相手の思いに気付く力の育ちを考える事例。
- ・ 寄付活動や手話活動を通して、困っている人に寄り添い、小さなことから始める大切さを学ぶ事例。
- ・ 園内研修を通して、子どもたちの育ちについて語り合うことで、保育者の心持ちの変化に着目し、そのことが子どもへの丁寧な関わり方に繋がる事例。

(5) まとめ

園全体で友達に対して言葉遣いや関わり方が課題であったため、友達との関わり方を改めて考えるきっかけ作りとして、「思いやりの絵本」を参考にした保育に取り組んだ。さらに年長児は、「思いやりの木」を作成し、周りの思いやりにも気付けるような環境作りを行った。その事がきっかけとなり、少しずつお互いの良いところを認め合い、他者を思いやる心を育てることができたのではないかと考える。そして、SDGsを基に、寄付活動を行い、子どもと家庭が主体的に考えて行動することで、物を大事に扱うことの大切さを学び、世界の人々に心を通わせるきっかけ作りができた。また、手話活動では、手話を学び、音楽を手話で伝える楽しさを体験し、周りの人へ感動をもたらすことができた。そして、私たち保育者も園内研修を通して、自分の視野を広く持つ意識が高まり、子どもの思いに寄り添い、保護者にも成長を共有することで、愛されて育つ子の輪を広げることの大切さを学ぶことができた。

(6) 今後の課題

- ・ 子どもが主体となって活動する環境設定を工夫する。
- ・ 家庭や地域との交流の場を増やし、多様性を養う。

【討議の柱】

- ・ 思いやりを育み子どもたちが自ら発揮していくために、どのような取り組みをされていますか。
- ・ 保育者同士で自己肯定感を高め、保育の質を高めるために取り組まれていることはありますか。

すか。

【討議内容】

◎ 11 のグループに分かれ、討議の柱に沿って、有意義な情報交換が行われた。

- 1 SDGsについて園でどのくらい理解し、保育に取り入れているか
 - ・SDGsに対して特別に取り組んでいるところはまだ少なかった。
 - ・海に行ってゴミ拾いをしている。
 - ・身近な廃材を使って製作に取り組む。
- 2 コロナ後の行事や地域との交流、保護者支援はどうしているか
 - ・行事の人数はコロナ前の制限なしへ戻ってきているところが多い。
 - ・園庭開放を行う。
 - ・コロナにより、行事を見直すきっかけにもなった。
- 3 優しさや思いやりの育ちに対する各園の取り組みや課題
 - ・帰りの会で優しい言葉をいくつ言えたかな？と振り返る時間を設けている。職員にも良い影響を与えている。
 - ・生き物の飼育を通して思いやりを育む。
 - ・年長児が年少児のクラスにお手伝いに行く「お手伝い保育」をしている。
 - ・子ども達が全員いる場面で、その日の子どもの思いやりのある姿や良いところを話す機会を作る。
- 4 保育者同士で自己肯定感を高め、保育の質を高めるために取り組んでいること
 - ・月に一度、研修テーマを決めて全職員で話す機会を作る。
 - ・悩んだ人が自分から発信できる雰囲気を作る。
 - ・公開保育、研究保育を行う。事前に見てほしいところ、気になる子の対応を伝えておき、助言をもらう。
 - ・職員同士で褒め合う時間を設け、自己肯定感を高める。



【助言者まとめ】

助言者：丸田愛子先生（鹿児島国際大学福祉社会学部児童学科准教授）

第一分科会「愛されて育つ子ども」

—子どものやさしさや思いやりの気持ちを考える—

・社会性の育ち

①感情の育ち ②自我の育ち ③言葉（言語）の育ち ④自立に向けて

①～④の育ちを幼児教育で目指す。

子どもの心が育つ過程では大人の働きかけが成長を支えるベースとなり重要となってくる。

〈保育者の関わりと働きかけのポイント〉

・「表情」「言葉かけ」「身振り手振り」「動作」温かい眼差しや笑顔、うなずき、さりげない触れ合いが子ども（乳幼児）が安心できて、理解できる。自己発揮が出来る関わりへとつなげる。

・これからの時代の保育・幼児教育の方法

①主体的 ②対話的 ③深い学び…この3つの柱を保育の中でどのように実践していくかが重要。

「主体的」…自分からしようとする事、目的や展開など見通しをもつこと、自分の成長を実感すること、振り返って次の工夫ができること。

「対話的」…自分の感じ方や考えを伝えあうこと、自分以上の人の考えを自分の活動に取り入れること。

「深い学び」…なぜ？という理由を考えること、物事の仕組みや仕掛けを考えたり、理解したりできること。

・保育環境の構成や教材・教具の工夫

〈保育のポイント〉

・環境に応じて行動・思考できる子どもを育てる…意図的に環境構成を考える。

・子どもの理解の助けとなるような工夫…意図的に教材を用意する。

・地域との連携

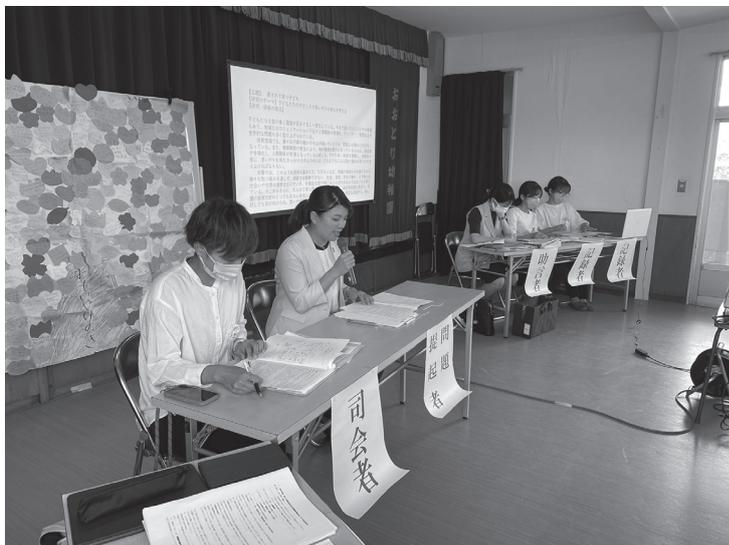
園が中心となり地域とつながる。そしてそれを保護者へとつなげ、園と地域と保護者で連携を図る取り組み。

・教職員の資質向上を図る

園内研修の工夫：研修テーマ設定・研修の情報共有

心構え：意見を出し合える雰囲気づくり

〈これからの課題〉



「子どもの育ち」をとらえていく時にどのように「保育の見える化」にしていくのか。

誰に？…子ども、職員、保護者、関係者

どのように？…写真を掲示、お便り配布、連絡帳、保育参加、参観などをやっていくことが社会に開かれた質の高い幼児教育となっていくのではないか。

第2分科会

保育者の主体的な学びと 遊び体験の充実

助言者	味園 佳奈 (鹿児島純心女子短期大学准教授)
司会者	朝倉 俊江 (枕崎幼稚園)
問題提起者	海老原由子 (せいあこども園)
記録者	岡元 七菜 (せいあこども園)
記録者	神川あゆみ (せいあこども園)
運営委員	朝倉 文昭 (枕崎幼稚園)

【研究課題】

子どもと共に育つ保育者

【研究・研修の視点】

コロナ禍においてこの3年間、園内外での活動に制約ができ不自由さも感じた時ではあったが、子どもたちと共に今何ができるか…深く考えていくことができた期間となっていたことと思う。

本園は指宿の豊かな自然環境の中に立地している。園外保育において海に出かけることも多く、少し足を延ばせば、干潮時に長さ約800mの砂の道(砂州)が出現し歩いて渡ることができる知林ヶ島もあり、海の近くならではの活動を取り入れることができる。地域の公園や広場においても数種類のどんぐりや木の実を採取する楽しみも多く、園においても草花、樹木が豊かで虫や鳥も身近に感じる環境となっている。

昨今の状況で地域の方との触れ合いが減少した中で、身近な所に目を向けた時、私たちの地域の豊かな自然がより恵みに感じていった。本園のねらいの一つとしても「自然の美しさや不思議さに気づき、その恵みに感謝する心を育む。人と自然との調和、世界の平和に私たちがどう貢献できるのか、共に祈り、考え、やがて行動できる人になることを願う。」と挙げている。昨今の世界情勢においても、これらのことは「今」「未来」を生きていく子どもたちにとっても尊く大切なことである。地球環境や人々の暮らしをよりよいものとする継続的な目標としてSDGsにも着目し、私たちができることは何であろうかと学びを深めていくこととした。

まず身近な自然からどのように気持ちが動くか、そこからどのように行動することができるのか、子どもたちと共に豊かな恵みに目を向け、様々な観点から向き合っていくことができればと思う。

【研究・研修の手がかり】

- ・ SDGsについて子どもたちと共に興味・関心をもつことから始め、学びを深める。
- ・ 身近な自然に目を向け、自然の中で諸感覚を使い、感じる心を育てていくには、体験が重要である。

子どもたちの姿をドキュメンテーション化し、保育者の気づきを分かち合う。そこから発展し、子どもたちが、自ら発見し生き生きと活動できるように環境、準備が大切となり、保育者間でも会議を重ねていく。

【研究計画】

◎令和4年度

「保育者の主体的な学びと遊び体験の充実」について行事を通して考える。

◎令和5年度

保育者が主体的に学び続け、子どもたちが自然の中で自らの遊びを見つけられるよう環境を整えて考える。

【発表の概要】

(1) 研究・研修テーマのとらえ方

本園でも子どもたち一人ひとりの個性が尊重され、主体性を育む保育は大きな目標である。そのために普段から子どもについて丁寧に話し合い、保育会議の場を持ち、意見交換や意見の共有をしている。子どもたちの姿を通して保育者もまた互いに学び合うことで、環境や関わりに創意工夫が生まれ、目標に向かう仲間として心強い関係性がより保育の質につながっていく。

前述したように本園は自然豊かな地にあり、保育者間で、この期間だったからこそ子どもと共に、地域の身近な自然により深く関わり知っていきたいという意見が集約できた。子どもたちが自発的にこれらに興味を持ち、楽しみながら遊びを体験していく過程を尊重していくには、どのように環境を整え、準備していくことが望ましいのか会議を重ねた。自然の中での遊びや発見を通じて、子どもたちは自然に対する理解や愛着を深めることができる。今回は普段から着目していたSDGsにつながるきっかけとなり、子どもたちと共に学ぶ貴重な経験となった。

(2) 研究の内容

- ・ 園内外の環境について見つめなおし、環境構成や関わりについて考察する。
- ・ 子どもたちの活動が豊かに展開するための創意工夫について考える。

(3) 研究の方法

- ・ 実践例を通した子どもの姿から考察する保育者の主体的な学びについてと、そこから発展していく過程について検証していく。
- ・ 実践例を通した子どもの経験や育ちへの理解を深めていく。

(4) 実践例

- ア お泊り保育にて～SDGs～
- イ 春の自然 ～発見・体験を通して～

(5) まとめ

- ア ・ 実践例において、園内外の自然に目を向け、子どもたちの気持ちや声を大切にしながら体験を重視した活動を行ってきた。子ども発信の事柄をきっかけに園全体のこととして捉えることができた。保護者の方へもSDGsや環境について伝える機会も持ち、園だけではなくご家庭や普段の生活から見直していくことへもつながった。
- ・ 子ども同士で自分の思いを伝える中、子どもたちは自己の存在感も感じながら、友だちの気持ちも知り、考える大切な経験を積み重ねている。この過程をこれからも大切にしていきたい。

イ 身近な動植物に心を動かされる中で 生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもちながら関わるようになる。これらの豊かな経験を通して「この自然（命）を大切にしたい」と感じ学んでいくのではないかと思った。

今回の研究を通して、子どもたちの声をひろいあげ、それらをドキュメンテーションや記録などで振り返り、今後につながるように考察していくことの大切さを改めて実感した。その中で保育者間の意見交換や共有をし、様々な視点から気づくことも多くあったと思う。子どもたちの声を大切にし、子ども発信の活動を生き生きと捉えていくことを意識しながら充実した保育となるように努めた。今後も一人ひとりの心の動きや気持ちを見つめ、保育の学びを深めていきたい。

(6) 今後の課題

- ・ 保育者自身も普段からの生活に目を向けていく。環境に対して自分たちでできる取り組みは何だろうと一人ひとりが意識して普段からの生活に目を向けていくことが大切である。
- ・ 様々な体験を通して心を動かし、まず身近な自然を大切にしていく。一人ひとりが意識をもつことにより、広い観点でつながっていくことを、園でも持続的に活動していくことができるよう引き続き考えていきたい。

【討議の柱】

- ・ 遊びや体験を通して、子どもたちの心が動いた活動について共有する。
- ・ 自然や地球環境など普段の生活から考慮していることや大切にしていることについて意見交換する。

- ・ 今後、保育者として主体的に学んでいきたい事柄について、取り組んでいること、取り組みたいことについて協議する。

【質疑応答】

質問：園内での保育者間の共通理解をするための時間作りや担任以外の職員との連携、保育の共有する伝達方法はどのようにしていますか？

回答：週1回の保育会議（お昼寝時間などを利用）で、子ども達の様子や気になることについて話などをする。また、参加できない保育者がいたりするので、内容をまとめて書面化したり、SNS（LINE WORKS）などを利用している。

研究発表を聞いて

- ・ 子どもの発信「ゴミが落ちてるよ」から、SDGsにつながり、とても素敵だと思った。またSDGsの17の項目にも目を向け、社会に役立っていると感じた。
- ・ お泊り保育について、事前に伝え、年長児と一緒に考えながらお泊り保育に取り組むことにより、子どもの心に残りとてもいいと感じた。
- ・ 子どもの声を拾える保育者が素敵だと思った。

【討議内容】

◎遊びや体験を通して、子どもたちの心が動いた活動について共有する。

- ・ 保育者がケガをしてしまったとき、治るまで気にかけてくれる子どもがいて優しさを感じた。
- ・ パプリカを年中児が育てているが、ピーマンが苦手な子が半数以上いた。どうにか持ち帰り食べて欲しいと思い、パプリカの肉詰めの写真を見せた。興味を持った子どもがその写真を持ち帰り、家庭で作ってもらい、美味しく食べることができた。
- ・ 朝顔を育てたり、ボディペインティングを通して、色水を作り、色の変化を楽しんだり、絵の具を身体に付けることで感触を知ることができた。
- ・ 虫を飼うことで、成長過程を目で見て知ることができ、虫への興味、命の大切さへと繋がった。
- ・ 縦割り保育を通し、活動内容を話し合うようになり、色々なことに気付いたり、声を聞き入れたりして共に進めていった。その結果、自分たちで話し合いができ、考えることが出来ることに子どもたち自身が気付き、活動が盛んになった。
- ・ 年長児は木市に行き、自分で選んだ野菜などを育てる。
- ・ お店屋さんごっこでは、現代に合わせ、現金で支払うのではなく、スマホ決済（paypay等）をすることにより、「ペイペイ」と言うことを楽しむ姿が見られた。
- ・ ナス・トマト・ピーマンなどに水をあげ成長を楽しみながら、食育にも繋がる。
- ・ 夏には、ボディペインティングや夏祭りを行う。

◎自然や地球環境など普段の生活から考慮していることや大切にしていることについて意見交換する。

- ・ 物についているエコマークについて紹介した後、家庭から持ってきてもらった箱などをマークごとに分ける遊びを行っている。
- ・ 子どもたちにゴミの分別について話ができるように、保護者にも分別などについて知ってもらうことが大切だと感じた。
- ・ 年長児は、配膳を終えた後、自分で食べきれぬ量かなど聞き、減らしたり増やしたりすることで食品ロスに心掛けている。
- ・ 空き箱などを家庭から持ってきてもらい、自由遊びなどで遊んでいる。また、リサイクルマークなどを子どもたちに見せて、ゲーム遊びをした後、自ら分別する子どもたちの姿が増えた。
- ・ 野菜を一から育てることで、成長過程を学ぶことができた。また、野菜スタンプに使用することで、野菜が苦手な子も「食べてみる！」と苦手意識が減り、親しみが持てるようになった。
- ・ 各クラスで水の量に調節について声かけし、電気もメーターを見て気を付けている。年齢で声かけが難しいが、子どもたちと共に、節電節水に心掛けている。
- ・ 公園などに行き、ゴミ拾いなどボランティア活動を行っている。
- ・ ハエなどの虫を子どもの前で退治してしまうことを不快に思う子もいて、そのような場合の

保育者としての対応方法はどのようにすればよいか。

- ・ツバメの巣を見つけ観察、カブトムシを育てている。
- ・各家庭から廃材を集めて、廃材遊びを行っている。

◎今後、保育者として主体的に学んでいきたい事柄について、取り組んでいること、取り組みたいことについて協議する。

- ・就学しても主体的に学んでいけるように、小学校へのアプローチもしていきたい。
- ・保育者が地元の自然や環境について知っておき、子どもたちと共に体験しながら学んでいきたい。
- ・ジェンダー問題として、男の子が立ってトイレしたくないという子がいた。個性を大切にしながらそれぞれに対応していきたい。
- ・コロナウイルス以前の保育にマスク、来園人数など戻しているか。コロナウイルス以前の保育のあり方を知らない保育者も多い現在、様々な難しさがある。
- ・子どもたちがしたいことを受け止め、実践させたい。
- ・子どもたちの多様性が求められるようになってきたが、就学へ繋げられる保育ができているか、保育を取り巻く社会について考えていきたい。
- ・現代に合った保育をしながら、子どもたちに合わせた保育をしたい。
- ・タブレット学習を取り入れていきたい。

【助言者のまとめ】 助言者：味園 佳奈先生（鹿児島純心女子短期大学准教授）

子どもと共に育つ保育者「ひと・もの・こと」などの環境に出会い、関わりながら子どもたちは主体的・対話的で深い学びが実現する。

◎なぜ体験が重視されるのか

- ・幼児期は環境に主体的に関わりながら体験的に学ぶ時期である。子どもが周囲の環境に関わるようにしていくことが重要である。だからこそ、環境を通した保育が重視される。今回の公開保育で展開された射的で例えると、的に当てられた嬉しさや外れた悔しさなどが経験として挙げられる。射的という環境に働きかけることで、緊張感や達成感等といった経験がもたらされる。それが、経験と環境の相互作用であり、遊びを通してのプロセスの中に様々な学びがある。保育者が意図的に計画的に構成した環境の中で、子どもたちは自分で自己選択をし、自己実現を経験する。その中で達成感や自己肯定感を味わい、その経験の積み重ねが“やって良かった”“楽しかった”“自分は〇〇が得意”といった自分作りの原点になる。幼児期のこうした経験が、小学校以降の教科書を使った教育で“面白そう”“少し難しいかもしれないけどやればできる”という主体的な学びにつながる。

◎どのように環境を整えていくのか

- ・問題提起で出された知林ヶ島に行く前のおにぎり作りでは、自分で食べられる量を考えておにぎりを作ることで、家族への感謝の気持ちや、友達と一緒に作る楽しさ、おにぎりを持つていくことが楽しみという経験が考えられる。経験は子どもたちの学びであり、保育者がいかに自覚化を図るかが学びに繋がる。保育者自身が対象の特性を知ることによって、子どもへの声かけが変わり、子どもの経験も広がる保育者自身が対象の特性をよく知り、それを踏まえて子どもたちへの関わりを工夫することでより良い主体的、対話的な深い学びが可能となる。

◎子どもの育ちをどのように見取るか

- ・日々の保育記録が重要である。目に見える姿から子どもの行動を意味づけ、直接関わりながら、その関係の中で生み出された姿を理解し、外側から表れた姿から子どもの内面を見ることが重要である。個人内でのカリキュラム・マネジメントの実践、保育者間での連携カリキュラム・マネジメントを組織として実践していくことが重要である。家庭や地域との連携では、地域の人材を生かした保育実践や、保育者として親として子どもの育ちを喜びあえる関係づくりを大切にしたい。その中で子どもの目に見える姿から何が育ちつつあるのか、一人一人の育ちを大切に見取ることが保育者自身の学びにもつながる。子どもの学びの主体として子どもの経験に必要な環境を整え、組織的に子どもの育ちを見取ることができるよう工夫してほしい。

第3分科会

得意分野を磨き遊びの

専門性を高める

助言者	有村 玲香 (鹿児島国際大学福祉社会学部准教授)
司会者	前田 栞里 (桜ヶ丘中央幼稚園)
問題提起者	並川 綾乃 (錦城幼稚園)
記録者	北原 樹音 (錦城幼稚園)
記録者	中仮屋 凜 (錦城幼稚園)
運営委員	尾方みゆき (鹿児島さくら幼稚園)

【研究課題】

子どもと共に育つ保育者

【研究・研修の視点】

今日、教育・保育の「量」から「質」への転換が議論となっており、子どもの豊かで健やかな育ちに資する教育・保育の質の確保・向上が求められている。本園は、これまで、「かしこくやさしく 元気な子」の子ども像をめざして、子どもと共に「うきうきわくわく」することを見つけ直接体験し、遊ぶことが学びにつながるよう、日々の教育・保育の充実に努めてきた。

しかしながら、「子どもたちの自発性や発想が十分生かされていない」、「研究で学んだことが、日常の活動に十分生かされていない」などの課題があり、具体的にどのように取り組んでいけばよいのか模索しているのが現状である。特に、研究保育においては、保育者がクラスや子どもたちの実態を踏まえて遊びを考えて活動を展開しているが、1つのクラスでの単発的な実践で終わってしまい、累積的で実効性のある取組となっていない。

そこで、これまでの研究実践の取組を見直し、一つの遊びを中心に、それぞれの保育者が「やってみよう！」、つまり、自らの得意なことを生かし、保育者相互が磨き高め合いながら、一つの遊びを連続的・累積的に研究実践することとした。また、子どもと共に一つの遊びを追求することにより、一人一人の保育者のよさを引き出し、保育者自身の専門性を一層高めることにつながるのではないかと考えた。

以上のように、一人一人の保育者の得意なことを積極的に取り入れ、保育者同士の協働性を高めることで、より充実した遊びに発展し、子どもと共により質の高い教育・保育を目指せるのではないかと思います、本主題を設定し、研究を進めていくことにした。

【研究・研修の手がかり】

- ・ 保育者自身が自己分析をした後、職員間でお互いのよさや、やってみよう保育について意見を出し合うことにより、自らの得意な遊びを構想するとともに、協働的な雰囲気を醸成する。
- ・ 保育者のよさや得意なことを生かし、積極的に取り入れた保育の展開を考え、実践する。
- ・ 一つの遊びを同学年・異年齢で連続的、発展的に展開し、遊びの広がりや深まりを追求する。

【研究計画】

◎令和4年度

- ・ 得意分野を生かした遊びの展開を考える。
- ・ 環境や援助を通して子どもの育ちについて考える。

◎令和5年度

- ・ 保育者の得意、不得意を自己分析し、実践・研究する。
- ・ 保育者の協働性に着目し、専門性を高める。

【発表の概要】

(1) 研究・研修テーマのとらえ方

- ・ 私たちは、子どもたちが遊びに意欲的に参加し、没頭している姿が見られる保育を目指している。そのためには、一人一人の保育者がもっている内なる力（人的資源）を十分生かすことが大切であると考え。具体的には、保育者自身が自らの得意・不得意を自己分析し、お互いのよさを知り、相互に磨き高め合いながら、子どもにとってよりよい遊びを展開していきたいと考える。

(2) 研究の内容

- ・ 題材「おおかみ遊び」を通じた遊びの広がりや深まり、遊びの専門性を高める保育者相互の連携・協働の在り方を探る。
- ・ 遊びの専門性を高める観点や手順を明確にし、保育の質の向上を図るカリキュラムの在り方を探る。

(3) 研究の方法

- ・ 一つの遊びをクラス、学年間で連続的、発展的に展開する。
- ・ PDCA（計画→実行→評価→改善）のサイクルで、累積的に研究し、カリキュラムの改善を図る。

(4) 実践例

- ・ 年少組で経験した新聞紙遊びをきっかけに開発した「おおかみ遊び」を、進級した年中組では、保育者の得意分野を生かした新たな遊びに発展させた4歳児の事例
- ・ 3学期のゲーム遊びに向けて、他の学級、学年の実践を踏まえた活動を取り入れ、保育者の具体的な働きかけを担当、副担で話し合いながら保育を展開していった3歳児の事例

(5) まとめ

- ・ 「おおかみ遊び」に係わる遊びを連続的、発展的に展開したことにより、一人一人の子どもが遊びに夢中になり、意欲的に活動している姿が見られた。
- ・ 子どもの遊びの広がりや深まりを追求するためには、意識が連続的に発展するように活動を総合的に組み立てることが必要であることがわかった。
- ・ 研究を通して、自分自身の得意を見つめ直し、他の保育者のよさも知る機会になり、よりよい保育をめざそうとする意識が高まった。

(6) 今後の課題

- ・ 得意とする遊びの種類を増やし、より統一的なカリキュラムにする必要がある。
- ・ 保育者が互いの見方・考え方や意見を尊重し、それぞれの持ち味を生かしながら、連携して意欲的に子どもの支援に当たれるよう、意見交換の場を計画的に設定する必要がある。

【討議の柱】

- ・ 保育の質の向上のために得意分野を生かした日常的、継続的な研究保育の進め方
- ・ 保育者同士のコミュニケーションを深めるための取り組みや、専門性を高めるための工夫

【討議内容】 ～グループ発表より～

(討議の柱1)

保育の質を高めるために得意分野を生かした日常的、継続的な研究保育の進め方。

- ・ 研究保育等で各分野のそれぞれ得意な先生からアドバイスをもらい、得意、不得意を少しでも伸ばしていけるようにしている。
- ・ 行事等では、それぞれの保育者の得意分野を生かせるよう考慮しながら、担当を振り分けて取り組んでいる。
- ・ それぞれの保育者の得意なことを生かしながら、やってみたい保育を行っている。
- ・ 年間を通した取り組み（ごっこ遊び等）では、学期ごとに少しずつレベルアップをし、継続的に取り組むようにしている。
- ・ 研究保育を年に1～3回程度行うことで、いろんな先生からアドバイスをもらいながら自分の保育を見つめ、得意分野を高めるように取り組んでいる。
- ・ 年長になると運動会で太鼓を披露する。そのため年少、年中のころからリズム遊びを取り入れ、連続的に行っている。
- ・ 改めて自分と向かい合うと何が得意かわからない。得意なものが生かしているか不安である。
- ・ カリキュラムに沿った保育をしていかないといけない部分があるため、自分の得意分野を生かした保育ができないところがある。



(討議の柱2)

保育者同士のコミュニケーションを深めるための取り組みや、専門性を高めるための工夫。

- ・ 休憩時間にエピソードを紹介する中で、他の先生のよいところを褒めている。
- ・ 補助、正規職員の先生全員で話合いができる機会を設け、コミュニケーションを深めている。
- ・ コロナ禍より、集まっての話合いが少なくなっていたので、今後取り入れていきたい。
- ・ 職員室がフリースペースになっており、好きな場所で様々な話をしながら作業を進めることができている。
- ・ いろいろな課題についての話ができる環境を作り、コミュニケーションを深めている。
- ・ 同学年のペアの先生とはよくコミュニケーションをとることができているが、他の先生とはあまりとれていない。そのため、全体行事等の準備では、他学年の先生とペアを組んで取り組むようにしている。
- ・ 少しずつ食事会などもできるようになり、交流の場が増えている。休憩時間を使って保育者同士のコミュニケーションが取れるようになっている。

【助言者のまとめ】

助言者：有村 玲香先生（鹿児島国際大学福祉社会学部准教授）

① 得意分野とは何か

得意ということ自分を中にとどれだけ意識することができるかで、伸びていく方向性を示していける。私にとって「伸びていきたい方向」を決めると、その先が「得意分野」の領域として「強み」になる。これまで、私たちが磨いてきた「得意分野」を子どもにとって楽しいと思える活動に向かって伸ばしていく。このことが、「子どもと共に育つ保育者」として「得意分野を磨き遊びの専門性を高める」という今回のテーマに繋がっていく。

② 研究とは何か

「研究発表」「保育研究」という言葉で普段から研究という言葉が使われるが、研究は何の役に立っているのでしょうか。研究とは、保育者の有している保育・幼児教育の専門知識を使って、実践における問題解決の方法論を獲得することである。この研究の視点を用いて、現在自分では解けない問題や課題があった時に、問題への対応方法を分析して、獲得する過程を明らかにしていくことが、保育研究として大きな意義がある。

③ 専門性とは何か

保育者は、他者よりも保育や幼児教育分野に関する知識や技術の「量」「質」を用いて問題を解く経験を重ねている。専門性とは、その技術や知識を使って、問題を解決するための枠組みであると考えている。この枠組みを使い、対応することで何も知らない状態から始めることなく、専門性を用いて対応することができる。この枠組みを専門性と捉え、みんなの力で体系化していくことが専門性の研究へと繋がる。

④ まとめ

「継続は力なり」と、専門性を高めるためには「続けること」が秘訣と言える。今回の研究発表では、「続けること」・「発展的に連続的に遊びを展開していくこと」にこだわって取り組んだことにより PDCA サイクルを生み出し、結果的に保育者の専門性の向上に影響を与えたのだと考えている。

また保育者が変わるために、最初は今の自分から少しだけ異なる視点から考えることにより、現状認識に変化をつける。U理論による変化の5つのレベルでは、「①課題に反応して解決する」、「②課題にフォーカスして現状認識を再構造化し実践する」、「③異なる認識で再設計して、新たな行動とプロセスを創造する」、「④対話を掘り下げ、前提となる枠組みを考えて再構成する」、「⑤目的を再生成していく」という構造がある。この「課題を掘り下げて解決策まで浮上する過程」において、得意分野を誰かと比較して発見するのではなく、「自分の中で得意なことは何か？」と問うことで保育者自身の変化を生み出す。

最後に、専門性を高めることで「得られること」と「得られないこと」がある。

「得られること」は、磨きたいと努力している専門性が高まることである。一方で「得られないこと」は、「やったことがない」「経験したことがない」領域の専門性は高まらないということである。このことを自覚しチーム保育として必要なことは、「周りのできている人と一緒に行く」という方法で解決をめざす協働である。協働には、グループ討議の柱2の「コミュニケーションを深めるための取り組み」が欠かせないため、チームや組織として専門性を発揮していくときの重要事項と捉えている。

そこで、まずは個人の目標を立てる。次に、集団で保育に取り組むことで得意分野を磨き遊び

の専門性を高める。そして、自己に応じた目標を立てる。この時の上手な目標の立て方としては、「明日からでもできる目標」を立てることがポイントと言える。このような循環が日常の保育として定着し、連続的・発展的に行うことができれば、得意分野を磨き遊びの専門性を高める保育者として実践していけるのではないかと考えている。

学び多き研究発表をありがとうございました。



第4分科会

仕事の効率化と

組織の活性化を考える

助言者 福島 豪
(鹿児島国際大学福祉社会学部准教授)
司会者 厚地 智佳 (高千穂幼稚園)
問題提起者 鮫島真由美 (宮内認定こども園)
記録者 兼元 恵子 (高千穂幼稚園)
記録者 森山 聖奈 (高千穂幼稚園)
運営委員 西元 道子 (鹿児島第一幼稚園)

【研究課題】

子どもと共に育つ保育者

【研究・研修の視点】

国の政策として日本社会における「次元の異なる少子化対策」が発表され、令和5年4月からはこども家庭庁も発足し、こどもが真ん中の社会の実現が打ち出された。幼稚園、保育所、認定こども園での乳幼児に対する「教育・保育の質」についても大きな注目が集まっているところである。

一方、乳幼児への教育・保育の現場においては、少子化の影響による園児数の減少や職員の人材不足による一人当たりの業務の負担の増加、国の基準配置による職員数での配置では全ての業務に対応することが難しい現状など改善していく必要があることが多くある。働き方改革に対応する長時間労働の是正や持ち帰り業務の削減なども大きなポイントである。

乳幼児が一人の人間として成長していくための土台を形成する時期の教育・保育を担う職員は、子ども達にとり大変重要な「人の環境」である。その職員ひとり一人が生き生きと仕事を行い、楽しく協力し合うことが子ども達にとっても重要である。そのために、業務の効率化と組織・チームとしての協同などを検討することを本研修の視点とする。

【研究・研修の手がかり】

- ・ 自園での仕事の効率化と組織の活性化に関わる取り組みについて振り返りを行う。
- ・ 鹿児島県私立幼稚園協会加盟園へ任意でのアンケートの協力をもらい、現状の教育・保育現場における各園での取り組みや課題について取りまとめる。

【研究計画】

◎令和4年度

- ・ 業務の効率化・職員のモチベーション向上のため、どのような取り組みがあるか職員それぞれで考え、意見を出し合い、実践・改善を重ね今後のよりよい職場作りに役立てる。

◎令和5年度

- ・ 令和4年度の研究や討議を踏まえて、自園や各園での取り組みを更に研究調査し、仕事の効率化と組織の活性化についてとりまとめを行う。

【発表の概要】

(1) 研究・研修テーマのとらえ方

自園でこれまでに取り組んできている仕事の効率化や組織の活性化につながる実践について改めて振り返り、それらの内容についてメリットや配慮が必要な事項等について考察してみる。また、他園における仕事の効率化や組織の活性化のための取り組みの現状を調査し、情報を共有するとともに、今後の更なる仕事の効率化や組織の活性化の為の指針とする。

(2) 研究の内容

- ・ 自園でこれまでに取り組んできている実践について
- ・ 各園における現状の取り組みや課題等について

(3) 研究の方法

- ・ 自園でこれまでに取り組んできている実践について振り返りを行い、仕事の効率化と組織の活性化という側面から改めて検討を行う。
- ・ 他園での取り組みを調査するために、本園の職員全員に調査してみたい内容を提出してもらい、それらを取りまとめてアンケートを作成する。他園より回答いただいたアンケートへの内容を整理し、現状の取り組みや課題等を調査する。

(4) 実践例

ア 登降園管理システムの利用

現在では多くの園で導入が進んでいる登降園管理システムを本園では令和2年度より利用している。園児の登園・降園の時間の管理や保護者への園からの連絡送信、保護者から園への欠席等の連絡、バス利用者管理、書類のデータ化など様々な機能を利用できる。これまで電話で行っていたやり取りが減り、緊急時の連絡がスムーズに行えている。各クラスにタブレットを置き、保護者からの連絡を確認できるようにし、また、預かり保育や延長保育の利用料の計算などを自動化することで事務職員の負担も減っている。現在手書きの出席簿もこのシステムとタブレットを使った方法を検討している。

イ 希望休日指定制度と職員会議・園内研修

翌月の勤務シフトの作成に際し、翌月の中で休みを取りたい日を事前に指定できる制度を取り入れている。園の行事等には配慮しつつも、職員のプライベートへ少しでも配慮が出来ることを目的としている。また、職員の働き方の見直しの一つとして、令和3年度より毎月第3土曜日の午後から家庭保育が出来る方は家庭保育をお願いし、その時間に職員会議や園内研修を行っている。保護者の協力があるが、保育終了後の遅い時間に行っていた時に比べ、職員がより集中して取り組み、帰宅時間が遅くならないなど、メリットが多いと考えている。

ウ 他園での仕事の効率化や組織の活性化に関する調査

本分科会の研究・研修のテーマは、昨今の働き方改革や乳幼児の教育・保育の現場で働く職員の仕事の在り方など各園で様々な工夫をしているとともに、なかなか解決が難しい課題などがあるのではないかと考えられる。(3) 研究の方法で示した通り、本園の職員に調査内容を考えてもらい、それらをまとめてアンケートを作成した。鹿児島県私立幼稚園協会加盟園に任意での回答に協力をもらい、現状における教育・保育現場での取り組みの状況や課題等を調査した。

(5) まとめ

仕事の効率化や組織の活性化のために自園で取り組んできている実践について改めて検討することで、それらの実践をより良い方向に進める方法はないかなど考える機会となった。また、他園での状況を調査することで、どの園においてもそこで働く職員のために様々な工夫をし、課題等の解決に向けて協力して取り組んでいる様子が分かった。

(6) 今後の課題

職員の仕事の効率化とともに、園児への教育・保育の質の担保や保護者への利便性や丁寧な対応等、乳幼児への教育・保育施設としての社会的な役割を踏まえながら変化への挑戦が必要である。

【討議の柱】

仕事の効率化と組織の活性化について、工夫していることや課題となっていることについて

【討議内容】

1 仕事の効率化を図る為の各園での取り組みについて

(1) ICT化の導入

<活性化ポイント>

- ・ アプリを活用して出欠、バスの変更や連絡帳としての活用をし、電話対応の時間が減る。
- ・ アプリの導入により、降園後に連絡事項を保護者に伝えることができ、保育時間が確保で

きる。

- ・ 日案・月案・要録等をデジタル化し、データでの管理が可能。
- ・ バスの運行状況をリアルタイムで知ることができる。
- ・ アプリを活用することによって保護者が写真を選択できるようになる。

<配慮ポイント>

- ・ ICT化の導入にあたり、機材の費用や保護者への説明等、慎重に進めていく必要がある。
- ・ 書面でほしいという保護者からの意見があり、より見やすい書類作りを行う。
- ・ 導入するにあたり、職員も使い方について練習をする時間が必要である。

(2) 製作物に関する工夫

- ・ ラミネートをし、次年度も使えるようにしている。
- ・ 製作ボックスを用意し、パートの先生にお願いをする。
- ・ 衣装のベースは園にあるものを活用し、保護者の協力を得て製作をする。

(3) その他

- ・ 家庭訪問を廃止し、個人面談に変更している。
- ・ 行事を半日に設定し、保育者の準備等の負担を減らす。

2 組織の活性化について

(1) 職員会議について

- ・ 全職員の参加が厳しく、ノートや議事録、回覧板等を活用し、情報共有を行っているが伝達が上手くいかず、共通理解が難しい。
- ・ 第3土曜日を午前保育にし、午後から職員会議を行う。
→ 保護者の協力があってこそその時間ということを心にとめ、時間の有効活用を行う。
→ 職員が6日勤務にならないよう平日に休みを設けるが、難しい場合もある。

(2) シフトや業務、休憩について

- ・ 給食の時間に入る職員を設け、休憩時間にお部屋から出られるよう職員を配置している。
- ・ 休憩室を快適な場所となるよう工夫をしている。
- ・ 複数担任（正規職員）となるよう人員配置をし、活動によって複数で保育を行ったり、一人で保育を行ったりする時間を設けている。
→ 保育から離れている時間を確保し、その際事務作業等を行う時間に当てる。
→ 職員の得意不得意に合わせ、活動を主で行うよう工夫をしている。（ピアノ、運動、製作）
- ・ 有給休暇を消化するために、年度初めに年間の有給休暇の希望を全職員が出しシフトに反映している。
→ 有給休暇の希望に変更があった場合、前の月20日までに変更を申し出る。
→ 有給希望日は変更可能、変更不可を明確にし、休み希望が重なった場合は譲り合いで変更をしている。
- ・ 平日休みの場合は事前に書面にし、引継ぎがスムーズになるようにしている。
- ・ 土曜日の出勤時間を夏休みにシフトしている。（年間変形カレンダー）

【指導者助言まとめ】

助言者：福島 豪先生（鹿児島国際大学 社会福祉学部 児童学科 准教授）

○研究課題について

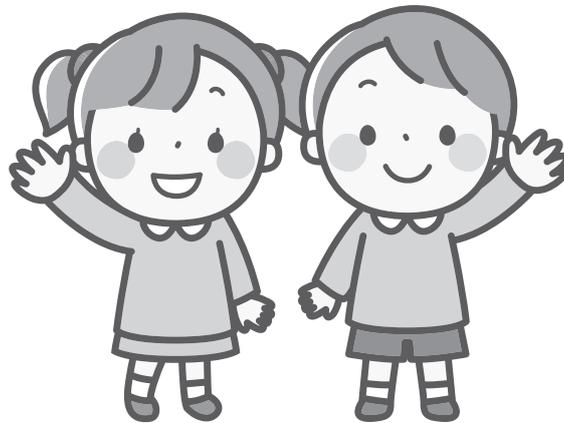
- 多くの幼稚園・こども園・保育園業界では、人手不足による業務過多が現状である。業務過多による疲弊は、本来の教育の意味を見失い、気づけば「子どものため」ではなく「自分自身の身を守るため」ただただ仕事をこなすという状況に陥る



ケースも少なくない。こういった現状を打破する為・根本的な解決に向かう為の考え方が「仕事の効率化」であり、それが「組織の活性化」へと繋がるのではないだろうか。

○正しい意味での効率化・活性化を目指す

- 効率化に必須の ICT 化はまだまだ移行期である。移行期は一番手間のかかる期間ではあるが「何を残して、何をなくしていくのか」各園の特色や良さを残しつつ、効率化を図ることが大切である。
- 効率化に対する国の顕著な動きとして「働き方改革」が挙げられる。しかし「働き方改革」には大きな落とし穴がある。定時に帰ること＝改革なのか？ということを理解しておかなければならない。
- 効率化の最大のポイントは「人数」と「仕事量」のバランスを合わせていくことである。それぞれの職場で効率化を図れる雰囲気作りができているだろうか。人間関係ができてこそその効率化であり、どの立場からも意見が言えるような環境が大切である。お互いに認め合う精神があるからこそ、効率化のアイデアが生まれるのではないだろうか。
- 正しい意味での効率化を実現する。その為に倫理的に大切な部分は「意識の持ち方」「認め合う精神」が根底になければならない。



第5分科会

子ども理解から子どもの育ちを 考えた保育実践

助言者 森木 朋佳
(鹿児島純心女子短期大学人間教育学部教授)
司会者 藤田はつほ (友愛幼稚園)
問題提起者 西 優貴 (伊集院幼稚園)
記録者 佐抜 真優 (伊集院幼稚園)
記録者 坂口 小雪 (伊集院幼稚園)
運営委員 大園 貴文 (吹上中央こども園)

【研究課題】

子ども理解

【研究・研修の視点】

幼保連携型認定こども園教育保育要領解説（文部科学省 2017）「序章：幼保連携型認定こども園の教育及び保育は、生涯における人格形成の基礎を培う重要な役割を担っているものであることを踏まえ、子ども・子育て支援に関わる制度において、発達に応じた保育者の適切な関わりや、質の高い教育及び保育並びに子育ての支援の安定的な提供を通じ、その間の子どもの健やかな発達を保証することを目指して行われるものである」とされている。保育の質を向上させるために、多角的に子どもの姿を捉え、子どもたちの興味・関心がどこにあるのか、その広がりや深まりを捉えることが必要になってくると考える。子どもの姿に合った保育実践をしていくにあたって、今までの保育を振り返る場の充実が求められる。以上のことからこの研究・研修テーマを設定した。

【研究・研修の手がかり】

- ・ 次の保育に向けて考える時に、子どもの成長の様子や来月どんな姿になるのかを予想し、子ども理解をするうえで、保育実践に繋げていく。
- ・ ウェブや保育マップといった保育記録を、次の保育に生かしていくためのツールとなるように、活用法について研究する。

【研究計画】

◎令和4年度

- ・ 園内研修としてウェブを活用し、子ども理解を深める。
- ・ ウェブを通して子どもの育ちを見立てて、保育実践に取り入れる。

◎令和5年度

- ・ ウェブの活用法について更に研究を深め、園内研修を継続する。

【発表の概要】

(1) 研究・研修テーマのとらえ方

本園は、創立以来一貫して、キリスト教保育による「愛」を保育の方針としており、自由遊びを中心とした保育を行っている。毎月の職員会議でキリスト教保育誌という教材で学び、子ども理解を深め、保育に生かすことを目指している。しかしながら、子どもの遊びの様子などを職員間で共有することや、意見交換があまりできていないことが課題である。また、認定こども園になったことで職員やクラスが増え、一人ひとりの子どもの実態把握のための記録を取ることが習慣になっておらず、様々な取り組みを行ったが、長続きしなかったことも現状である。本研究では、ウェブという方法を用いて、子ども理解を深め、かつ次の保育へ生かすことができないかと考え、月案会議の時間を活用して園内研修を行うことにした。

(2) 研究の内容

- ・ 継続的に子どもの実態把握をするためにどのような方法があるか検討する。
- ・ どの立場の保育者でも意見交換しやすくする方法を考える。

(3) 研究の方法

- ・ 1ヶ月ごとにテーマを決めて、ウェブというやり方を用い、子どもの姿・遊びの展開・保育者の援助など付箋を使って視覚化する。
 - ・ 子どもの姿を視覚化して、次の保育に向けて、意見交換をする。
- (4) 実践例
- ・ 2月 いちごがり → クッキング (いちごサンド) → いちごの製作 (折り紙)
 - ・ 3月 春を楽しもう
 - ・ 4月 新年度を迎える～ドキドキもワクワクも～
 - ・ 5月 トラブル発生!～ボクの言い分・ワタシの言い分～
- (5) まとめ
- ・ ウェブや保育マップを用いて保育の道筋や子どもの姿を視覚化し、職員同士で意見交換を行いながら日々の保育を振り返ることで、子どもたちの今の姿を多角的に捉え、次の保育を考えるきっかけとなっている。また、意見交換を行う中で、周りの保育者がどのように子どもを捉えているのか、どのような言葉掛けを行っているのかを知ることができ、学びの時間となっている。
 - ・ 園内研修を行うことで、子どもの遊びや友だちとの関係、計画実践した保育で子どもたちがどのような反応があったかなどを今までより深く捉えようと、保育者自身の保育に対する意識が変わったと実感している。
- (6) 今後の課題
- ・ 意見交換を行う際に、保育年数によっては考えを言い出すことが難しい場面があるため、どの保育者でも発言しやすい場を作っていく。
 - ・ ウェブや保育マップを作る園内研修で、次の保育に向けてどのようにしていきたいかを話し合っているが、研修・話し合いをして終わりになっているため、園内研修に参加できない職員にも共有していく方法についても研究していきたい。
 - ・ ウェブや保育マップを作成する時間がテーマによっては長引いてしまうこともあるので、今後も継続していく中で、保育の展開を視覚化するスキルを高め、スムーズな意見交換ができるようにしていきたい。

【討議の柱】

- ・ 一人一人の子どもを理解するための各園の取り組みについて
- ・ 付箋 (保育マップ作り) を体験してみて、良かった点や難しかった点について
- ・ 子ども理解において課題に感じていることについて

【討議内容】

1 問題提起に関する質疑応答

- (1) (問) 1人あたり付箋を何枚使用して書いているのか。
 (答) 内容によって書く量もそれぞれ変わるため、1人あたり15枚程度配り、自由に使用できるようにしている。
- (2) (問) 付箋に書く時のルールなどあるのか。
 (答) 『子どもの様子』と『保育者の援助、言葉がけなど』を色分けして記入していく。
 マッキーペンだと見やすく、分かりやすい。
- (3) (問) 保育ウェブ、マップを作成するにあたり、テーマがあり、自由に貼っていくのか。
 どのように進めていくのか。
 (答) 月案会議時に保育の振り返りのツールとして保育ウェブ、マップを作成しており、その月の子どもの姿を考察した後、次の月のテーマを決めている。約1か月後にある月案会議までに配られた付箋に各自記入をし、会議の時に保育者同士その時のエピソードについて話をしながら五領域や五感などに分類分けをして付箋を貼っている。

2 グループ討議

- (1) 一人ひとりの子どもを理解するための各園の取り組みについて
- ・ 職員会議で話し合ったことを共有する。
 - ・ 月に一度巡回の先生が来て、気になる子ども (療育) について主任、担任と話し合いを行う。

- ・ボードを用いて、大事なことはメモをする→見たらサインをする→気になることがあった場合担任などに聞いてもらうようにしている。
 - ・職員会議（正職、補助、学年会など分けて実施）→参加できない先生のためにノートを書き、見たら印鑑を押す。
 - ・毎日の終礼 ・個人記録（学期に1回） ・写真に残す（クラス便りに載せる）
 - ・保健師、心理士に園にきてもらい、週に1回、発達相談会を実施している
- (2) 付箋（保育マップ作り）を体験してみて、よかった点や難しかった点について
- 〈よかった点〉
- ・子どもの様子の流れや気持ちを深く知ることができる。
 - ・子どもの言葉、良い所を意識しながら拾うことができる。
 - ・付箋の色やペンの色を変えることで分かりやすい。
 - ・一言で書くので要点を掴みやすく見やすい。全員で行うことで共通理解につながる。
- 〈難しかった点〉
- ・簡潔に一言で書くこと ・子どもの目線になって想像することが難しい。
 - ・時間が限られている中で実施するのが難しい。
- (3) 子ども理解において課題に感じていることについて
- ・一人ひとりを見るのが難しい。 ・全職員が把握することが難しい。
 - ・心や時間に余裕がないと理解することが難しい。
 - ・それぞれの発達段階への理解を踏まえたうえで、個々の発達を大切にしながら集団の保育をどうしていくのか。

【助言者まとめ】 助言者：森木 朋佳先生（鹿児島純心女子短期大学人間教育学部教授）

○ 保育の実践と評価

- ・すべての保育は、「計画に基づいて実践され、評価される」という枠組みの中で行われている。
- ・保育ウェブ、保育マップという名称は異なるが、目的は同じで、目に見えるようにすること＝可視化することにある。目に見えるようにすると、それをきっかけに会話が広がったり記憶が新たになったりするなどの効果がある。可視化の手段として、ウェブを用いる場合とマップを用いる場合の差は、「ウェブ＝蜘蛛の巣状に広がっていく」つまり、一つの事柄からいろいろなところにつながっていく様子をイメージしたり確認したりできること、「マップ＝道筋が示されたもの」つまり、経過、過程、行き先を確認しながら保育したり、計画を立てたりすることにある。
- ・子どもの育ちにおいて、毎日に変化の連続である。気づいたらできていることがたくさんある。それは保育者の保育の力なのか、集団の力によるものなのか、それともその両方なのかを評価することは難しい。そのような意味で、子どもの成長＝心を著しく動かされた体験からいろいろなものを吸収して活動していく子どもたちの様子は、何を書いても記録になるし、何を書いても評価になる。そこが保育のいいところであるが、1点だけ課題があるとしたら、人は見たいものしか見ないということにある。子どもの育ちを三層に分かれた三角形で表すと、一番上が「できる・できない」真ん中が「行動的・関係的発達」一番下が「内面的充実」とおくことができる。「行動的・関係的発達」はすぐに表面に現れてこない。したがって、すっかり変容が起こってから気づいても不思議はない。
- ・例えば、伊集院幼稚園の実践では、「5月 トラブル発生～ボクの言い分・ワタシの言い分～」のテーマとおき、次のテーマを、「6・7・8月 砂・水・泥を全身で楽しもう～社会経験は砂場から～」とした。「行動的・





関係的発達」に焦点をおいたテーマのきり方だと思う。「言いたいことを伝え合う」を経験した子どもたちだからこそ、このテーマを立てることができるし、テーマからは、あえてトラブルが起こりそうな場面で、もしかしたらうまくいくかもしれないという保育者の見立てが感じられる。今日の保育、または今月の保育を振り返る時に、漫然と振り返るのではなく、何を見なければならなかったのかを意識し、そこを見ていくことが実践に対して評価していくことではないか。

・保育マップは、中心にテーマがあるので、個々の活動とテーマのつながりが確認しやすい。マップやウェブの考え方は、保育園で浸

透している印象がある。理由は、保育園はシフトで勤務しているため、毎日顔を合わすとは限らず、幼稚園よりもさらにどうやって連携を図るかが重要になってくるからである。

「確実に間違いなく」伝わるよう開発されたツールともいえる。幼稚園から認定こども園に移行している園が増え、シフト勤務もある中で、これまで以上に職員間で連携を図り、理解を深めていく必要がある。保育マップやウェブは有効な手段となり得る。

- 問題提起についての振り返り
 - ・園の現状として、子ども理解から保育を出発させたいという思いはある。でも継続的に取り組めない、努力はしているが、という相談から、「ウェブ」をやってみては？と提案した。
 - ・1回目は、付箋の大きさを指定しなかったので、大きい付箋に小さい字でたくさん書くことになった。付箋に「出来事」と「保育者の気持ち」を一緒に書いたため、どう分類して良いのか分からず、かなり時間がかかり、結果としてごちゃごちゃしたウェブになった。そこで、付箋の大きさを3分の1の大きさにすること、付箋に簡潔に書く練習をすることを提案した。また、整理がしやすいようマップ作成に切り替え、テーマに沿って整理することを提案した。
 - ・その結果が、3月の子どもの姿をまとめたものになった。子どもの姿をまとめたうえで、考察が書いてあり、それを元に4月のテーマをどうするか積極的に話し合われたことも印象的だった。この時期の子どもの小さな心の揺れをしっかりと受け取り、子どもがもっと生活しやすい、子どもから出発した保育ができるのではという話ができていることが伝わってきて、とてもよかった。
 - ・翌月のテーマの「ドキドキ・わくわく」は、プラスにもマイナスにも捉えられる。そのため、振り返る際に、付箋の分類がしにくいということが生じた。テーマを立てても、曖昧なものは、保育者一人ひとりの捉え方が違う。言葉の意味が全員に共有されているかを見直す必要性に気づいたことが、4月は成果になったと感じる。
 - ・3回目の園内研修を終えて、「子どもの内面（その行動をした思い）を捉えることができた」という当たり前だけれど難しいことが実践されたことを確認できたことは、大きな成果であった。「いろんな子どもがいるよね」は便利な言葉で、ついこの言葉でまとめてしまう。でもこの言葉の裏にある、どんな子どもがいるのか、もっと深く、細かく見立てられたことは、子ども理解ができたという評価できる。
- まとめ
 - 子どもが言葉で話していること、保育者が気付いたことなど、本当に子どもたちを一番近くで、一番丁寧な言葉で語るができるのは保育者である。その保育者が子どもの動きを、他の保育者と共有できる言葉で、いわゆる可視化する方法によって共有することで保育の質は必ず上がる。会話が aumentari、「私たちの保育ってわるくないかも。」と思えたりすることが日々の保育の原動力になると思う。今回の実践を用いながらより子ども理解について心を寄せていただければと思う。

第6分科会

子どもたちの多様性の尊重、 ジェンダー平等などへの理解を深める

助言者 千石久美子（メンタルケア研究会コロナ代表）
司会者 富田 宏邦（あけぼの幼稚園）
問題提起者 牧 志穂美（ヴェリタスこども園）
記録者 上國料夕佳（ヴェリタスこども園）
記録者 大島あけみ（ヴェリタスこども園）
運営委員 豊永 藤浩（武幼稚園）

【研究課題】

子ども理解

【研究・研修の視点】

「子ども理解」は、保育の始まりであり、出発点であるといわれる。

「子どもを理解する」とは、一人ひとりの子どもと直接ふれあいながら、子どもの言動や表情から、思いや考えなどを理解し受け止め、その子どもの良さ、可能性を理解しようとすることとされる。

幼稚園教育において育みたい資質・能力の三つの柱「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びあう力・人間性等」をベースに「5領域」を踏まえたうえで「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置き、一人ひとりに応じた教育・保育に取り組むこと、加えて、一人ないし少人数の保育教諭の理解だけでは一面的・主観的になりやすいので、多くの保育教諭で理解することも肝要であると捉え、本研究の視点としたい。

そのために、子どもの姿を様々な角度から、多様な方法で捉え、遊びや生活が子どもの内面的な成長にどのように関係するのかを様々な記録を通じて理解し、職員間で共有するようにしたい。

また、保育教諭として、一人ひとりの子どもがどういった良さを持っているかを洞察する眼を育むと同時に、一人ひとりの多様性や生活環境に影響される子どもへの特別な支援の必要性について、幼児期を中心としつつ、乳児期から児童期への育ちの連続性までを視野に入れ、保育教諭間で子どもの育ちの共有を図り、保護者や関係機関とも成長の道筋を共有できるように努めたい。

【研究・研修の手がかり】

- ・ 子どもたちの多様性についての理解を深め、具体的な事例を通して、保育教諭間での情報共有を図り、保育教諭同士の双方向の対話、効果的な会議や研修などの仕組みを構築する。
- ・ 保育教諭間の対話を通して、「多様な学びの場」の重要性、グローバル社会において必要とされる人間の多様性の尊重、ジェンダー平等について意識の共有を図り、園として統一した対応を考える。
- ・ 多様性のある子どもを受け入れる中で意思の疎通を図るために全職員が手がかりを見つける。

【研究計画】

◎令和4年度

- ・ これまでの一人一人の育ちと学びの支援を振り返る。
- ・ 支援の在り方について全職員で共通理解を図り、家庭や関係機関との連携を深めていく。

◎令和5年度

- ・ 全職員が、子どもたちの将来の自立と社会参加を見据え、同じ場で共に学ぶ「多様な学びの場」の重要性、グローバル社会の必要とされる人間の多様性の尊重、ジェンダー平等などの理解を深める。

【発表の概要】

(1) 研究・研修テーマのとらえ方

本園では多様性のある子どもがいる中、子ども一人ひとりに合った環境、言葉、関わりを全職員で共通理解していくには、どのような保育、援助、対応が必要かを考えてきた。多様性、ジェ

ンダー平等の考え方を保育の中に取り入れることで、すべての子どもが多様性やジェンダー平等に対する理解を深める姿勢が自然と身に付き、園生活を楽しく過ごせるよう、園内研修を通して職員同士の理解・意識共有を深めて、実践に移していくことにした。

(2) 研究の内容

- ・ 多様性のある子どもの実態把握に努める。
- ・ 記録を基にミーティングを行い、対応を考える。
- ・ KJ法を活用する。

(3) 研究の方法

- ・ 毎月、多様性のある子どもの個別経過記録を記入し、振り返り、職員会で報告する。
- ・ 保育教諭と英語教諭間のミーティングを通して、一人ひとりに合った対応ができるよう検討する。ジェンダーに関わることについての対応をその都度話し合い、職員に周知する。
- ・ KJ法を活用し、全職員で子ども理解についての研修を重ね、様々な意見を取り入れることで学びや考えを深める。

(4) 実践例

- ・ 多様性のある子ども達の成長と保育教諭の学びを追い、関わり、援助、対応についてまとめた。
- ・ 全職員で「子ども理解」を深めるため、園内研修でKJ法を活用し、共通理解を図った。

クラス	年間の成長	年間の取り組み
Dクラス（年少）	実践例Ⅰ K児	意思の疎通の手立て
Aクラス（年長）	実践例Ⅱ T児	性別にとらわれず、人権を尊重

- ・ 性別に関わらず、一人の人間として全ての活動において子ども自身が選べる環境を提供して、選択できる権利、責任、平等である機会を増やせるように保育を進めた。
- ・ 子どもの1年間の成長や保育の中での困り事や発見などを全職員からアンケート形式で集め、KJ法で議論し、共通理解できるようにした。
- ・ 学期に1回外部講師に教育相談に来て頂き、子どもの様子を見てもらいアドバイスを頂いている。

(5) まとめ

多様性とジェンダー平等を職員間で考えると、多様性は文字通り多種多様であり、ジェンダー平等にしていくにはたくさん問題があり、身体も心も未発達な幼少期にしか携われない保育教諭では出来ることが限られてくると強く感じた。多様性のある子どもたちが今後おそらく壁にぶつかるであろう、小学校、中学校、高校などの時期において少しでも子どもたちが自分の多様性を主張できる環境を整えるべく、理解すること・受け入れることを大人が共通認識する必要性や、多様性を尊重する社会を創造することの重要性について、研究を重ねていくことで、子ども一人ひとりに合わせた環境、言葉、関わりが改めて大切だと認識できた。

(6) 今後の課題

- ・ 子ども一人ひとりの多様性を認め、環境を整え、様々な場面で子ども自身が選択できるようにする。
- ・ 職員間でも、同じような関わりがもてるように終礼、職員会などを利用して密に話し合いの場を設ける。(KJ法を活用していく)

【討議の柱】

- ・ 子どもの多様性を尊重するためには、保護者、他児などの周囲の理解が不可欠である。周囲の理解を得られるようにするにはどうしていくべきか。
- ・ 子ども一人ひとりを理解するため、職員同士の意思疎通・対応の統一に効果的な研修内容や職員会議の在り方とは。

【グループ討議の柱】

- 子ども一人ひとりを理解する、子どもの多様性を尊重するために
 - ・ 「個性」をどう定義して受け止め、尊重するか
 - ・ 子どもとの関係構築、コミュニケーションの在り方
 - ・ 当事者だけでなく周囲の子どもと保護者の意見の尊重。
 - ・ 「差別」と「区別」の違いの定義。

- 2 職員同士の意思疎通・対応の統一をするために
 - ・効果的な情報共有の仕方。
 - ・全職員が顔を合わせられる、集まりやすい環境の構築。
 - ・効果的な研修の在り方。

【討議内容】 17グループに分かれ、討議の柱を元に話し合った。

- 1 子ども一人ひとりを理解する、子どもの多様性を尊重するために
 - ・誰が何を好きになっても良いということ伝える・集団に入れない子の話・個性なのか本質か・その子に対して環境を整えることの大切さ・家庭との連携をしっかりと取り、園でも同じような気持ち、対応をする・何に興味があるか観察し、興味があるものから少しずつコミュニケーションをとっていく・先入観を持たない大切さ・固定概念を変えていく必要性・災害等は男女別の方が確認しやすい・男女の違いについて意識させることも大切なのでは・自分は「区別」と思っている、相手は「差別」と思っているかも。
- 2 職員同士の意思疎通・対応の統一をするために
 - ・職員会のファイル作成・ノートに書き込み、全員見られるようにする 押印で確認
 - ・園で使用しているアプリを使って、情報の発信・共有

【助言者のまとめ】 助言者：千石 久美子先生（メンタルケア研究会・コラソン代表）

- ・ 人生を歩み始めた幼い子どもたちが、自分が持って生まれた特性を尊重し、個性を大事にした生き方ができるように成長することを願っている。人生の基礎工事という一番大事な時期に、保育教諭は関わっている。今だからできることがたくさんある。今しかできないことがある。それを大切にしたい。
- ・ 様々な経験を積み重ねることで、貴重な学びを得る。ただし、何をしてもいいわけではなく、「人を傷つけない」「自分を傷つけない」「法律を犯さない」という最低限の制限は必要。（千石先生が唱える三原則） それ以外の条件をはずして、のびのび・いきいきとチャレンジすることが成長の糧となる。
- ・ 幼児期：大人たちとの関わり（子どもの素直な言動に対する周囲のリアクション）で価値観が刷り込まれる 置かれた環境のバイアスに染められてしまう それらのバイアスに気づき解放されるようなサポートが望まれる。
- 保育教諭として出来ること 自己チェックから始めよう
 - ・ 自分が当たり前だと思っていることに疑問を持つ・自分自身に価値観の捕らわれはないか・バイアスを当たり前と思っていることはないか・柔軟性を身につける事・自分自身の価値観の振り返り
 - ・ 言葉・行動は無意識の設計図（価値観、選択基準など）から表出される。
言葉（意味づけ・使い方など）を身近な人たちと確認し合うとチームとしての質が高まる。
 - ・ 「自分は自分でいい（OKだ）」という尊重された経験を積み重ねること
自分がどういう扱いをされたかが経験値として残っていく。
 - ・ 「そんなことしてもうまくいかない」と大人が思うことでも、その子にはチャレンジして経験する権利がある。「失敗するのは権利」「失敗から学ぶのも権利」 チャレンジした経験から学ぶ。
ただし、前述の「三原則」の範囲という制限は必要。ルールとして伝える。
 - ・ 他者と同じことが正しい事と刷り込まれ、みんなと同じことができない自分はダメな自分だと刷り込まれていくことで、他者と同じようにできないということが、悩み・苦しみとなっていく。
純粹無垢で、言われたことがそのまま浸透する幼児期には、その子を尊重する言葉かけが大切。本人がどう感じるかが大事。
 - ・ これまで保育教諭として経験して積み重ねてきた一般的な「正しいこと」が、その子にとっての正解とは限らない。
 - ・ 選択する自由の裏側には責任がある。「自由と



責任」というセットで、その子の理解力に応じた伝え方をしていく必要がある。マナーはしっかりと伝えていく。

- ・ 例：集団に入れない子“一種類ではない”人との関りを好まない子、関わりたいけど関わり方が分からない子など、同じ傾向でも背景にある特性の違いを見極めることが、個性の尊重、特別支援になる集団に入れない子と決めつけるのではなく、先入観を持たずに一人ひとりもしっかりと観察していく。
- ・ 言語化できない子のニーズにこたえるのは難しいが、行動傾向・表情などから汲み取る。
- ・ PDCAサイクルを回すことで、傾向が浮き彫りになり工夫のヒントが得られる。オーダーメイドの支援につながる。(A: Action 千石先生はA: Adjustment (修正) に置き換えている)

○「差別」「区別」について

差別：人権・人格を脅かすものは差別、差別はあってはならない

区別：必要な区別と不適切な区別がある 不適切な区別：明確な境界線がないもの

- ・ 区別をするのであれば基準が明確な区別を使ってほしい。それが平等な区別になる。

例：身長順、月齢順など

個人的な裁量による区別は曖昧。誰かが自分の価値観で決めた区別は不適切。

かけっこを男女で分けた場合、体力的に弱い男児、体力的に強い女児もいるが、これは個人差。身体的能力で優劣を決めるジャンルの場合、トランスジェンダーの対応には配慮と工夫を要する。

- ・ 「自由」の裏側には「責任」がある。「権利」には「義務」、これを両立する関りが必要となる。

年齢やその子の能力に応じた範囲で「選択」をする練習、「選択」した「結果」を引き受ける練習生きるということは、選択の連続。結果にとらわれず、経験から「学ぶチャンス」を奪わない。

- ・ その人がその人の能力の中で、精一杯出来る事を発揮しながら、お互いが足りない所を補っていくことが成熟した社会なのではないかと感じている。

質問：ジェンダー平等について幼児期に向かいたい目標とは

回答：子どもが何を望むか、子どもが伸びたい方向に伸ばしてあげることが大事。

この子の個性はどっちに伸びたいと思っているのかということを見極める。

質問：多様性を理解するための声かけ、多様性を尊重するために出来ること。

回答：～さんはどうしたい？という声かけが基本。「どうしたい？どうありがたい？」そう訊いたうえで、その環境の中で裁量権を与えていいかどうか、選択肢に制限を設けないといけない状況にあるのか見極め、「これとこれは出来るけどこれは難しいよね どうする？出来そうな中で選んでくれたらうれしいな」それでもこうしたいと主張する場合は、「それができるように考えてみるから待っててくれる？」と一旦預かる。

※一旦預かることの意味：あなたの意見を尊重しますというメッセージになる。

結果は制限されたとしても、気持ちを聞いてくれた、わかろうとしてくれたという事実が、自分は耳を傾けてもらえる価値ある人間なんだ、というメッセージになる。一刀両断に「ダメ」と言われると、自分の言うことなんか聞く価値がないんだとなる。

質問：自己尊重感・自己肯定感を育むためにはどうしたらよいか。

回答：日常的な言葉かけで育まれる気持ちを汲み取る。一緒に考える。やりたいと言ったら可能な限り環境を作り、体験させてみる。その体験の肯定的な部分に、肯定的なフィードバックをする。その繰り返しが大事にされているという実感となり自尊感情を育む。

○最後に 保育者(支援者)の中にある答え(良かれ)を提供するのではなく、子どもの中にあるものを引き出す。答えは子どもたちの中にある。子どもが笑顔になることが答え。

PDCAサイクルを回しながら試行錯誤をし、おかれた環境の中で可能なことを可能な範囲で取り組むことで、子どもたちの未来が拓かれるのではと思う。



第7分科会

子どもとともに作り出す

環境構成

～主体的・対話的で深い学びを支える環境の構成・再構成～

助言者 中村 洋志
(天文館てんてん保育園 園長)
(騎射場れいわ保育園 園長)
司会者 西原 美緒 (恵光東俣幼稚園)
問題提起者 本高 加奈 (いにしき幼稚園)
記録者 松本かおり (いにしき幼稚園)
磯辺 明子 (いにしき幼稚園)
運営委員 森山 剛充 (はなぶさ幼稚園)

【研究課題】

保育実践

【研究・研修の視点】

子どもは、主体的に人・物・ことなどの環境に働きかけることを通して、環境との関わり方や環境のもつ意味を感じたり、把握したりする。子どもが主体的に環境に働きかけるには、働きかける対象が子どもの興味・関心や願いに即したものであったり、方法であったりすることが必要である。つまり教師が一方向的に与えた環境やその関わり方ではなく、子ども理解に基づいた環境を構成して関わりを促していくことが必要である。このような意味から保育実践をしていくにあたって「子どもとともに作り出す環境構成」を大事にしていくこととした。

教育要領では、資質・能力を効果的・効率的に育んでいく学びの方法として、子どもが主体的にそして他者や物・自分と対話しながら学ぶアクティブ・ラーニング又は、「主体的・対話的で深い学び」が実現されることが大事であることが示されている。

これらのことを踏まえて、私たちは保育の実践の方向として、子どもが「主体的・対話的で深い学び」を実現することを支える環境の構成とはどのようなものであるかを明確にするとともに、その保育の実践の在り方を探求したいと考えた。

【研究・研修の手がかり】

- ・ 仮説に基づき、実践を通して「主体的・対話的で深い学び」を支える環境構成・再構成の在り方をさぐる。
- ・ 自由保育と設定保育を行い、研究の成果と課題を明確にしてまとめる。

【研究計画】

◎令和4年度

- ・ 幼児が主体的に活動できる環境を構成していくために、幼児の意欲を引き出し、教師の願いとバランスよく絡み合うようにするための保育はどうあるべきかを考える。

◎令和5年度

- ・ 「主体的・対話的で深い学びを支える環境の構成・再構成」をサブテーマにして、イメージ図などをもとに保育実践を深めていく。

【発表の概要】

(1) 研究・研修テーマのとらえ方

幼稚園教育において、生きる力の基礎を育てるためには、「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力の基礎」「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱で示される資質・能力を子どもの主体的な環境との関わりである遊びを通して、育てていくことが大事である。

子どもが主役の保育、教師が子どもとともに作り出す環境の構成、「主体的・対話的で深い学び」を支える環境の構成・再構成の在り方を追求していきたい。

(2) 研究の内容

- I 期：
 - ・ 「主体的・対話的で深い学び」の姿を文献研究
 - ・ 「主体的・対話的で深い学び」のとらえ方
 - ・ 「主体的・対話的で深い学び」のイメージづくり
 - ・ 「主体的・対話的で深い学び」を見取る子どもの姿の仮説づくり
 - ・ 「主体的・対話的で深い学び」を支える環境の構成・再構成の手順や内容の明確化
- II 期：
 - ・ 仮説に基づき、実践を通して「主体的・対話的で深い学び」を支える環境の構成・再構成の在り方を探る。
 - ・ 自由保育と設定保育について実践する。
 - ・ 研究の成果と課題を明確にしてまとめる。

(3) 研究の方法

- ・ 保育記録・指導案・保育実践をもとに、フォトカンファレンス・ディスカッション・ポートフォリオ等で保育研究を行う。

(4) 実践例

- ・ 自由保育（年少）「並べて遊ぼう」（フォトカンファレンス）
- ・ 設定保育（年長）「小麦粉でおもいきりあそぼう」（ディスカッション・ポートフォリオ）

(5) まとめ

「主体的・対話的で深い学び」の姿を求めてきたことは、子ども理解や10の姿を求めていくことでもあり、大変価値のあることであった。

「主体的・対話的で深い学び」を支えるのは、遊びを充実することである。

教師は主役を子どもとし、活動を見守り、何をどうしたいかを見取り、困り感に即して助言や援助をする。子どもの遊びに入りすぎて指図や手出しをしすぎると、子どもの主体的な学びが抑制されることが多い。子どもの興味・関心、願いや思いなどを個に応じて捉えること、つまり子ども理解は難しい。しかし、それらを累積していくことの必要性を感じた。

特に、設定保育にあたっては、子どもと一緒に活動の振り返りを行うことで、深い学びがたくさん生まれる。また、時間にゆとりを持ってじっくりと活動させることが大切である。

「主体的・対話的で深い学び」を実現する保育を実践していくことで、PDCAによるマネジメントサイクルの見直しへとつながった。

教師が一人ひとりの体験を理解することや、子どもの体験を教師が共有すること、その体験からどのように興味や関心が発展していくのか、また、子どもはその体験を通して何を学んだかなど、子ども理解に徹し、次の充実した遊びへつなげるために環境を整えていくこと、つまりそれらのことが、子どもとともに作り出す環境構成なのではないか。

(6) 今後の課題

「主体的・対話的で深い学び」が実現している姿は、多様であるとともにその質の深まりに応じて際限がない。そして、その質が高まることが幼児教育の質の高まりでもある。私たちは、より深い学びを実現する保育をこれからも追求していかなければならない。

【討議の柱】

- (1) 「主体的・対話的で深い学び」が実現する保育実践のための、子どもの見取り方
- (2) 子どもが主役になる環境の構成の取り組みについて

【公開保育の感想・質疑・応答】

- (感)・ 先生方の声が落ち着いていて、静と動がしっかりしていた。
- (感)・ 先生の準備、チーム・ティーチングがしっかりできており、子どもたちが遊びや活動に夢中になっていた。
- (質)・ 活動の手順を説明する際に、写真やイラストを普段から使っているのか。
- (答)・ 普段から、説明や手順をイラストや写真を使い、視覚で訴えられるようにしている。
- (質)・ 毎月の主題をどのように保育に落とし込んでいるか。
- (答)・ 強化目標として普段の生活の中で取り組んでいる。年間を通して取り組めるようにし

ている。

【問題提起についての感想】

(感)・ 時間にゆとりを持って取り組んでいること、職員全体で見守っていることが印象に残った。

(感)・ 子どものつぶやきや子ども同士のかかわりを見逃さないことが大切であると感じた。

・ 子どもが遊びに没頭していることを見逃さないようにしていきたい。

(質)・ 小麦粉遊びの活動は、一人の担任が行ったのか。また他の教師のかかわりや声かけはあったか。

(答)・ 小麦粉遊びを計画、保育したのは担任一人であるが、他の教師も保育を見ながら子どものかかわりを持った。また保育後、活動の振り返りを一緒に行った。

(質)・ 小麦粉の量はどれくらいだったか。

(答)・ 1kgの袋を10袋用意した。導入の絵本に小麦粉の袋が出てきたので、小麦粉の袋を使った遊びに発展したのでは。

(質)・ ポートフォリオはどのような形で、どのような頻度で作っているか。

(答)・ クラス全体に向けて、活動にスポットを当てたポートフォリオを月に1回発行している。

(質)・ 活動をする際のアレルギー対策について

(答)・ アレルギーに関して、年度初めに保護者に確認をしている。

また、今回の小麦粉遊びにかかわらず、活動を行う際には、保護者に活動内容を事前に知らせ、アレルギーや一人一人の状況に合わせ配慮している。



【助言者のまとめ①】 助言者:中村 洋志先生 (天文館てんてん保育園・騎射場れいわ保育園園長)

- ・ 子どもが生き生きしているのは、先生が生き生きしているからである。
- ・ 最大の環境構成は教師である。
- ・ 自園の子どもの姿と、実践を照らし合わせてみるとよい。
- ・ 自由保育とは、勝手にすることではなく、制約のある中での自由であるという事。
設定保育とは、ルールを引いてしまうことではなく、設定の中での自主性をどこまで認めていくかが大切である。
- ・ 保護者をどう取り込んでいくか、保護者の理解・サポートをどのようにしていくのが大切である。

【グループ討議内容】 (記録より抜粋)

- 1グループ ・ 補助の先生方と連携や情報共有を大事にしている。
・ はじめから子どもが主役ではなく、保育をする中で主役になっていくのでは。
- 2グループ ・ 主体的とは、最初はながされてもいい。その中からやりたいことを見つけていけばよい。
・ 幼稚園では選択肢をできるだけ多く与えてあげる。
・ 子どもが主役→その子のしたいこと、得意なことを見つけてさせてあげることで主役になるのではないか。
- 3グループ ・ 自発活動の時間、コーナー保育を行っている。
・ 子どもたち同士の話し合いの時間を設け、それに教師が助言している。
- 4グループ ・ 子どもをつぶやきを拾い、遊びに取り入れたり、助言したりする。

- 5グループ ・ 子どもたちの普段の姿、興味あるものを活動内容に設定することでおのずと主体的に活動に参加することができる。
 - ・ 自分のことは自分で行うことで主体性が育まれている。
 - ・ 活動の中で子どもたちの気付きを大切にする。
- 6グループ ・ 子どもの発言や遊びの様子から考える。また、子どもの「やりたい」を引き出すには充実した遊びが重要であるのではないか。
 - ・ 待つ姿勢で、子どもの主体性を促す。
 - ・ 教師がゆとりを持って、楽しめることが大切なのではないか。
- 7グループ ・ 子どもが考える時間と発表する時間の充実。
 - ・ 面談などで遊びや家庭環境などの背景を理解する。
 - ・ 子どもへの気持ちの高まり、熱中しているところを見落とさず教師が手を加える。
- 8グループ ・ 記録をとろうという気持ちを持つ。写真を撮ることで気付くことも多い。
 - ・ 自由遊びの時間に色々な素材を準備しておく。
- 9グループ ・ 子どもたちから「～したい」「～で遊びたい」の声を大切に環境を整えている。
 - ・ 季節の移り変わりなどをみんなで感じ、一体化できる。周りの環境からヒントを得る。
- 10グループ ・ 自分の考えと違う答えができることも想定しておく。
 - ・ 粘土遊び、砂遊び、お店屋さんごっこについての自園の取り組みを出し合う。

【助言者のまとめ②】

- ・ 「新型コロナウイルス感染症の影響」「チャット GPT 等の生成 AI の登場」など、時代は流れている今、幼稚園、幼児教育に携わる者として、今の状況をどう捉え、子どもたちに「何を」「どのように」伝えていくかが問われている。
- ・ 人には、それぞれ個性があり、「みんな違ってみんないい存在」なのである。
- ・ 幼稚園やこども園は小中学校の下請け機関ではなく、幼稚園・こども園等は独自の役割を担っている。「レベルではなく役割である」ことを認識し、幼稚園教諭として誇りをもって子どもたちや保護者等と向き合う必要がある。
- ・ 幼児一人一人の「よさや可能性」を生かすのは「環境構成」であり、最大の教育環境は保育者自身である。
- ・ 学ぶことに興味や関心を持ち、見通しを持って粘り強く取り組むとともに、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」ができていくかという視点を常に意識しながら、子どもの姿を見取っていく姿勢が大切である。また、教職員側の柔軟性が問われている。結果を急ぎすぎないことに留意すること。
- ・ 保育で配慮すべき主なポイントとして、①子どもが主体的に活動し、よりよい経験を積めるように配慮する。②子どもたちの健康と安全を最優先する設備や環境になるように配慮する。③静と動のバランスが取れた活動になるように配慮する。④できるだけ、子どもたちが様々な人と関わる力の基礎を育めるように配慮する。以上のことに留意し、「育てたい3つの資質」を意識しながら、幼児期の終わりまでに育ててほしい姿を目指して、欲張らずに、焦らずに、じっくりと一人一人と向き合い、日々の取り組みを進めてほしい。



・ 大切なものは目に見えない。どの子もかけがえのない「いのち」を持った存在である。

第8分科会

子どもとともに作り出す

環境構成

～子どもたちの主体性を大切にする丁寧な保育～

助言者 今村 幸子（鹿児島女子短期大学講師）
司会者 吉田 竜也（こぼと・ゆなの木こども園）
問題提起者 深見 茉由（吉田南幼稚園）
記録者 柿木杏梨沙（吉田南幼稚園）
記録者 山田 望（吉田南幼稚園）
運営委員 緒方 玲子（和光幼稚園）

【研究課題】

保育実践（E分野）

【研究・研修の視点】

本園では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」や「5領域」を基盤とし、卒園までの期間で資質・能力を一体的に育むことができるように計画を立て、保育を行っている。幼児教育の基本でもある、子どもたちの「主体性」を大切に保育を行っているが、一人一人の「主体性」を尊重することの難しさも感じていた。そのことから、まずは出発点として「子どもたちが集団の中で意見を出し、互いの思いや考えを伝えあいながら、一人一人が自分の力を発揮する場面を多く作ることができるような環境構成」を作っていかなければならないと考える。子どもたちの「主体性」を大切にするためには、子どもたち一人一人の声に耳を傾ける必要があるため、保育者同士の連携も重要となってくる。保育後に保育者同士で振り返りを行い、改善点やそれぞれの保育者の気づきを共有することが求められる。

この研究を通して、子どもたちの「興味・関心」や「つぶやき」から、どのように活動を発展させていくか、また活動の発展をさせていく中で保育者主導になりすぎず、子どもとともに環境構成を作り出していくためにはどのような工夫が必要かを追求していきたい。

【研究・研修の手がかり】

- (1) 子どもがどのようなことに興味・関心があるのか、主体的に活動するためにはどのような援助や環境構成を行っていけば良いか、日々の保育を振り返り、考える。
- (2) 子どもの興味・関心から遊びを展開し、連続性を持つことができるような環境構成を子どもとともに作り出すためには、保育者がどのように関わり、援助を行っていくか考え、実践する。
- (3) 『サークルタイム』を活用し、子どもから上手く意見を引き出すことができるとともに、子どもたちが自ら話しやすい環境作りをする。
ア 子どもの興味・関心に気づき、子ども自身が主体的に活動するための準備や環境構成を考える。行っている活動を子どもと一緒に可視化することで、期待感を持てるようにする。
イ 日々の活動を保育者間で振り返り、課題を明確にする。次の活動に発展することができるように、子どもの姿を予想しながら準備や援助を行っていく。

【研究計画】

- ◎令和4年度
 - ・ 事例を通して、園として大切にしたい環境構成の視点について考える。
- ◎令和5年度
 - ・ 子どもの興味・関心やつぶやきから、子どもたちが主体的に活動することができるような環境構成について研究する。

【発表の概要】

- (1) 研究・研修テーマのとらえ方
この研究では、プロジェクト型保育を行っている。大人数を一斉に保育するのではなく、一

人一人の興味・関心に寄り添った保育、そして小グループに分かれ、少ない人数の中で意見や活動が活性化するような保育を目標に取り組んだ。大人数の中から5つのグループに分かれ、より子どもたちが活性化しながら主体的に活動することができるように言葉かけや援助を行った。そこで、保育者が子どもたちと一緒に良いバランスで環境構成を行っていくためには、どのようなことが大切なのかを考えながら研究を深めていくことにした。

(2) 研究の内容

ア サークルタイムやマッピングなどを活用し、子どもたちの意見や考えを可視化しながら環境を構成していく。

日々の活動を保育者間で振り返り、課題を明確にする。次の活動に発展することができるように、子どもの姿を予想しながら準備や援助を行い、情報を共有して活動を進める。

(3) 研究の方法

ア 保育後に保育者同士の振り返りを行い、改善点を見つけ次の日の環境構成を行う。

グループが5つに分かれていたため、保育者も担当するグループを分けた。活動後に保育者同士で進行状況や様子を伝えあったり、振り返りを行ったりする。

イ 実践から見えた子どもの育ちを「幼児期までに育ってほしい10の姿」に当てはめながら振り返りを行う。

(4) 実践例

年長5歳児29名の『さくらぐみワールドカップ』までの活動

(5) まとめ

今回の実践を通して「子どもと一緒に作り出す環境構成」を意識し、子どもの興味関心やつぶやきを特に大切にしながら保育を行った。サークルタイムやマッピングの活動を行う中で子ども同士での意見の交換の場や話し合える場を多く設けるようにしたこと、また、その活動で子どもから出た意見を可視化して、保育室内に掲示しておくことで、子どもが主体となり活動を展開することができていたように感じた。保育者同士の振り返りを大切にして、子どもの姿を予想した環境設定を行うが、予想と異なる意見や考えもあり、その都度臨機応変に対応していく必要もあった。常に子どもたちに問いかけ、一緒に考え、疑問を解決していくことで保育者と子どもが一体となり活動することができたのではないかと思う。

今回の研究を通して、今後も子どもの「主体性」や「興味・関心」「つぶやき」を大切にしたい丁寧な関わりの中で子どもとともに環境構成を行っていきたいと感じた。

(6) 今後の課題

ア 子どもたちが準備を進める中で色々な素材で試すことができるように、更に教材の準備や、教材研究を行う必要があった。

イ 文字への興味・関心がない子へのより分かりやすい伝え方について工夫する必要があった。

【討議の柱】

- ・ 子どもたちが「主体的」に活動するために取り組んでいることや心掛けている点はどこか。
- ・ 保育で取り組んでいる内容を保育者間でどのように可視化しているか。

【討議内容】

1 問題提起に関する質疑応答

(問) 実践発表の中では、蕎麦作りのグループに視点をあて失敗体験から成功体験への道筋を話していたが、プロジェクト型保育全体を通して、同様な事例があったのか。

(答) チアダンスグループの衣装の装飾について、幼児一人一人の持つイメージが異なっていたため意見を一つにまとめることの難しさを幼児も保育者も感じた。

(問) 限られた時間の中で、職員間の連携は、どのように行っているのか。

(答) 保育後、14時以降の時間を活用して、その日の活動の振り返りや今後の活動の進め方等についてクラスの保育者と情報共有をする。

(問) サークルタイムをするにあたっての導入の仕方や約束事などは、どのようにしていたのか。

(答) 導入としては、日々の活動を見守りながら幼児が興味を示していることを題材にしてい

る。また、クラス全員で気持ちのよい話し合いができるよう、幼児自身が感じたことなどを基に約束事に繋げていっている。

(問) ワールドカップを行う中で、サッカー選手以外の役割をどのように引き出し、広げていったのか。

(答) サッカー会場に行くなど、家庭での実体験や園での活動の積み重ねから得たものを幼児同士で意見を出し合ったり共有したりしながらマッピングを活用して広げていっていた。



【グループ討議】 ※討議の柱の上から順に(1)、(2)とする。

1 グループ

- (1) 幼児が興味のあるものを保育者自身を知り、実態把握を行って、その中で幼児が好きな遊びに集中できるような環境を整える。
- (2) 幼児同士や職員同士で振り返りを行う中で、やってみたいと思えるような活動を展開していき、幼児と一緒に活動の材料を集める。

2 グループ

- (1) 自由遊びで幼児の興味があるものや、やりたい遊びの声を拾って、その活動に取り入れたりやりたい気持ちを尊重し意欲に繋げたり活動の中での声掛けを意識しながら保育している。
- (2) 保育後の終礼で幼児の姿を情報共有したり学期ごとに一クラスの活動を正職で見て、その中で出た課題や反省点を職員全体で共有したりしながら次の活動に繋げていく。また、週に一度、YouTube 配信で幼児の様子を職員だけでなく、保護者とも共有している。

3 グループ

- (1) 各年齢や一人一人の幼児に合わせた実態把握、園の特色に合わせた取り組みを行っている。幼児がやってみたいと思えるような環境や声掛けを行い、幼児の可能性を広げていく。
- (2) 終礼でその日の活動や支援を必要とする幼児の写真を使用しながら、情報共有をしたり支援を必要とする幼児に対しての手立てを職員全体で考えたりする。また、可視化することが難しい場合は、14 時以降の時間を有効活用しながら、職員間での情報共有を行っている。

4 グループ

- (1) 幼児の興味があるものを幼児自身が選択できるような環境を設定する。事例として、朝の会で幼児がやりたいことを活動の中に取り入れたり、制作物では幼児が使用したい素材を用意していたりする。また、幼児だけでなく保育者と幼児の間に生まれる共主体性を大切にしている。
- (2) 一年に一度、他の保育者に保育を見てもらうチャレンジ保育や同学年の保育者同士で写真を見ながらよいところを伝え合い、より良い保育を展開できるように研究している。

5 グループ

- (1) 自由遊びの中で、子どもたちのつぶやきを拾ったり毎月の制作物を幼児と一緒に考えたりしながら活動に取り組んでいる。また、保育者が考えた保育に対して幼児からプラスで提案をしてもらいながら一緒に保育を作っていく中で遊びの連続性も大切にしている。
- (2) 言葉での情報共有はうまくできているのだが、保育者間での可視化という部分に難しさを感じている。その中でも、園全体でできることとして、月末に幼児の成長した部分や好きな遊びをまとめて共有している。ドキュメンテーションやホームページ、ICT 等を活用して、幼児の様子を保育者だけでなく保護者とも共有している。

6 グループ

- (1) より主体的に遊びが展開されるよう、幼児自身で活動について話し合いをしたり図鑑や ICT 教材等の調べるツールを用意したりする。
- (2) それぞれの勤務形態が異なることから全体での話し合いが難しいため、ドキュメンテーションや YouTube、終礼や園だより等を活用して情報共有ができるよう工夫している。

7グループ

- (1) 子どもたちの遊びの中で出た声を保育に取り入れたり、消極的な幼児も全体の場で気持ちを発信できるように、選択できる環境や空間を整えたりする。
- (2) 終礼での情報共有は、行われているが、全体への共有事項については紙面でなされることが多いので、より可視化できる方法がないか今後の課題である。

8グループ

- (1) 主体的に活動をしていくには、乳児期からの土台作りも重要になってくる。また、幼児のやりたい気持ちを尊重し、興味関心に合わせた環境を整える。
- (2) ドキュメンテーションや写真を使用した話し合いを行ったり終礼で情報を共有したりしている。

【助言者のまとめ】 助言者：今村 幸子先生（鹿児島女子短期大学講師）

○発表を受けて

保育者は、活動を通してどんなことを学ばせたいかを考えるが、反対に、幼児は、どんなことを学んだのだろうという部分に視点を置くことで保育の見え方が変わってくる。幼児が「こんなことをしたい」と言ったことに対し、「それをしよう」とすぐに返すのではなく、その活動に関連する教材を、保育室内の幼児の手の届くところに置くことで、子どもたちの中で自然と興味広がっていく。このような幼児の興味が広がる方向に寄り添った環境が用意されていることに保育の温かさを感じた。幼児が発信したことに対して、保育者が受信をしてくれる。それによって、自分の意見が周りに伝わっていき、影響していくことを知り、学んでいく。

○プロジェクト型保育について

幼児が感じた「何でだろう」という疑問を、幼児自身が明らかにしたり試したり問題解決していくような過程をサポートしていく保育である。幼児の探求的な遊びや学びを実現するために大人が工夫していくことが大切である。主役は幼児であり、保育者は幼児が主体的に学んだり遊んだりできるように援助する存在である。以上のようなことを重視する保育の一形態がプロジェクト型保育である。また、この保育形態は、認知能力と非認知能力、双方を育てることができる。さらに、対話をするということ、幼児自身が見通しを立てるということ、行動するという、振り返るというこの4点を通して、構想するというで認知能力が育まれている。非認知能力に関しては、自分のやりたいことに向かっていくまでの力を培っていく。

○まとめ

主体性の本来の意味とは、自分の意志、判断で行動しようとする態度のことを指す。主体的とは、幼児が自ら考えて何をすべきか設定し、やる気を持って取り組む状態のことを指す。この2つのことを踏まえて活動するにあたって必要な3つの柱がある。まず、やりたいことがないと成り立たない。さらに、やりたいことを表出し、そのやり方を知っていることが必要である。この3つの柱が揃わなければ、主体的に行動することが難しいと考えられる。

これから求められる保育として、自分で行きたい先を自分で考え、そこに繋がる道を探し、自分で決めた道を試行錯誤しながら諦めずに進んでいけるような保育を行っていくことが大切である。また、自分の発信を大切にしてもらえることや自分の発信に価値があることを知り、周りと協力して助け合いながら過ごすことの尊さを感じてもらえるような保育を展開していく。幼稚園は、幼児が初めて出会う社会であり、保護者が大切なものを初めて託す社会でもある。それぞれが初めて出会う社会だからこそ、その社会の在り方が彼らの当たり前になる。幼児期に子どもをよく見守り、思いに寄り添い、実現するために保育者は何ができるかを考え、環境を整えていくことが保育者としての役割である。



第9分科会

「子どもとともに作り出す環境構成」

ふれあい活動を豊かにする環境構成の工夫

～コーナー別活動の実践を通して～

助言者 鮫島 準一
(鹿児島国際大学福祉社会学部 特任准教授)
司会者 山野 宏美 (こまつばら幼稚園)
問題提起者 小中原まりあ (清谿幼稚園)
記録者 久松 彩香 (清谿幼稚園)
記録者 一森絵里香 (清谿幼稚園)
運営委員 田中 裕一 (鹿児島幼稚園)

【研究課題】

保育実践

【研究・研修の視点】

現在、核家族化・少子化、地域との関係の希薄化に伴い兄弟や友達と一緒に遊ぶ経験が少なくなっている。さらに近年は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、保育現場でさえも閉鎖的な環境になっていると言わざるをえない。

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」には、特に配慮すべき事項として、「環境を通して行う教育及び保育の活動の充実を図るため、教育及び保育の環境の構成に当たっては、多様な経験を有する園児同士が学び合い、豊かな経験を積み重ねられるよう、工夫をすること。」また、「家族や地域において異年齢の子どもと関わる機会が減少していることを踏まえ、満3歳以上の園児については、学級による集団活動とともに、満3歳未満の園児を含む異年齢の園児による活動を、園児の発達の状況にも配慮しつつ適切に組み合わせて設定するなどの工夫をすること」と示されている。

本園は、同年齢編成の学級で保育の活動を行っているが、毎日の自由遊び、週に2・3回の集団リズム、年間5回のふれあい保育（異年齢児保育）を通して、異年齢の園児との交流ができるようにしてきた。しかし、実際は同年齢の友達とのかかわりが深まったり、遊びの発展が見られたりしたものの、異年齢とのかかわりは、ほとんど見られなかった。

そこで、「子どもとともに作り出す環境構成」を念頭に異年齢交流を最も目的とする「ふれあい保育」に焦点を絞り、研究を進めることにした。

【研究・研修の手がかり】

- ・ ふれあい保育（異年齢保育）の在り方について明らかにし、Plan（計画）Do（実行）Check（評価）Action（改善）を繰り返し、物的環境や人的環境を構成することで、対話や共同が生まれ、気づきや考え、工夫や発見による豊かな学びに繋がるのではないか。

【研究計画】

◎令和4年度

- ふれあい保育の月1回実施。（令和4年度の9月から令和5年2月まで。）
- 4つのコーナーの設定（運動・製作・表現・砂場）
- コーナー担当者の固定化による
 - ・ 環境構成の工夫の積み重ね
 - ・ 遊びの変化の捉え
- 実施後の反省、見直し、次回計画の立案のサイクル化

◎令和5年度

- ・ 令和4年度と同様に月1回ふれあい保育の実施。

【発表の概要】

(1) 研究・研修テーマのとらえ方

「運動遊び」「製作遊び」「表現遊び」「砂場遊び」、4コーナー別にPDCAサイクル（計画、実行、評価、改善）を繰り返し研究を進める。

<年齢交流が進んだ点>

- きっかけとして教師が必然的に、異年齢児交流を持つことができるようルールや子どもの配置、環境作りを心掛けたことにより、同学年とかかわることが多かった子どもが、異年齢児とのかかわり方を知っていくことができた。
- 自分から異年齢クラスの教師や友達とかかわったり、遊びの輪の中に入ったりすることができるようになった。
- 週行事の集団リズムで、年長児が積極的に年少児に声を掛け、一緒にふれあう姿が見られた。

<子どもの活動の良さ>

- 年長児や年中児は、リーダーシップを取り、教えたり優しく声を掛けたりする姿が見られるようになった。
- 年少児や年少少児は、年長児や年中児に対して憧れを持ち、意欲的に活動に取り組む姿が見られるようになった。

<教師の取り組みの変化>

- 異年齢交流を深めるための活動や環境構成を工夫するようになった。
- 各コーナー担当保育教諭を固定化したことにより、子どもの実態把握がしやすくなり、実態に合わせた声掛けや援助、環境構成の工夫が見られた。
- 活動の進め方が徐々に、教師主体の活動から、子ども主体の活動に変化してきた。

【研究の課題】

<さらに進めていくこと>

- 朝の自由遊びの中で、ふれあいを促す環境構成を取り入れていく。
- ふれあい保育の年間計画を見直し、継続して異年齢児交流を持てるようにする。

<改善していくこと>

- 各コーナーの活動の様子を録画し、ふれあい活動の環境構成の内容を共有していく。（自己評価）
- 個に応じた多様な援助の必要性を共有化していく。
- ふれあい活動の中で、個を生かす場を設定していく。

<新しい取り組み>

- ふれあい活動を通じた異年齢交流の様子を子どもたち自身や保護者が感じられる機会を作る。
（学級PTAや掲示物などで知らせる。）
- 体験活動を重視した季節感のある活動を多く取り入れる。
- 異年齢児交流（ふれあい保育）の意義を教師間でさらに共通認識を図っていく。

【討議の柱】

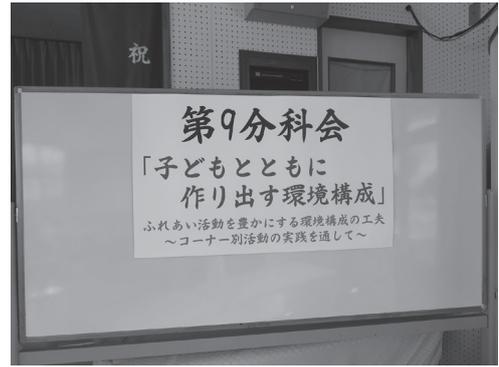
- ・ 環境構成の人的環境としての教師のかかわりをどのように深めていったらよいのか。
- ・ 園の活動の中で、どのような異年齢交流を図っていったらよいのか。

【討議内容】

1 問題提議に関する質疑応答

（問） 0・1歳児の異年齢活動の様子を聞かせてください。

(答) 担任や補助教諭と一緒に各コーナーを少しずつ周って体験するようにしている。参加できる内容の時には、異年齢児と活動し、教師は見守っている。難しい時には、製作コーナーでは補助教諭と一緒に貼る、運動コーナーは年上の子が三輪車を運転するなどできることを時間いっぱい使ってどの活動にも参加している。



2 グループ討議

(1) 環境構成の人的環境としての教師のかかわりをどのように深めていったらよいのか。

6グループ 異年齢の関わりのかきかけを教師が意図的に作っている。お店屋さんごっこなど自然にできる異年齢交流を大切に、子どもの声を大切にして自然にできる異年齢交流や意図的な異年齢交流を大切にする。

7グループ 子ども達一人ひとりの実態を把握し、安心して過ごせる環境作りや教師が声掛けや関わりが大切。子ども達の意見を取り入れながら、活動の準備をし、教師の間でアイデアの提供をそれぞれの活動の中でしていき声掛けや、関わりを通して展開していく意見がでた。

(2) 園の活動の中で、どのような異年齢交流を図っていったらよいのか。

6グループ 他の園での活動は、異年齢保育を常に行っている園や虹色タイム（つばき幼稚園のわくわくタイム）を設けたり、大掃除をバスのコースごとに行ったり、年間を通して異年齢交流がある園がありとても学びになった。

7グループ 日常的に異年齢の子ども達同士で関わることで、子どもたちは自分より小さい友達が何ができて何が難しいのかを知ることができる。また、その関わりの中で教師はどのように声掛けをしたら異年齢交流ができるのか、関わり方を知ることができているという意見がでた。月に1回給食を一緒に食べる交流する時間がある、年長児が小さいクラスを助けながら行える活動を取り入れて異年齢交流を出来たらいいという意見がでた。その為には継続的に計画をしっかりと立てることにより深い異年齢交流ができるのではないのか。

【助言者のまとめ】 助言者：鮫島 準一先生（鹿児島国際大学福祉社会学部特任准教授）

1 つばき幼稚園での公開保育について

○ 本園の教育方針「子ども一人ひとりを大切に遊びを通し、五感に訴え心揺り動かす保育を展開する」どおりの、子どもの目線に立った素晴らしい施設、設備、子どもたちがわくわくするような園に行きたくなるような環境、そして自分の居場所がきちんとある雰囲気やあたたかい設営に感動した。

○ 縦割り保育の「わくわくランド」では、身近な廃材を利用して「段ボールコーナー」「空き箱コーナー」「魚釣りコーナー」など本当に子どもたちがわくわくしながら活動している姿がまぶしかった。「金づちコーナー」では、危ないからさせないのではなく、金づちも使わせてみることで失敗しながらも、自分が作りたいものに懸命に取り組む。ここでの体験的学びが成長に繋がっていく。

○ 教育方針にあるように、「スライムで遊ぼう」など五感を刺激する活動が2歳児の保育では環境設定がなされ、子どもたちがスライムの感触をにこにこしながら体感していた。

○ 職員間の連携がよくとれていて、穏やかな雰囲気の中での職員同士の会話、子どもとの目線の高さを同じにした丁寧な声掛けが随所に見られた。素晴らしい公開保育の提供に感謝したい。

2 清谿幼稚園の研究発表について

- 幼稚園における研究とは、目の前の子どもが今何を考えているのか、何に興味を持っているのか、何が望みなのか等を保育者が確かにとらえ、知ろうとすることがスタートであり、最も大切な基本である。そして、その子どもの思いや願いの実現のためにどれだけ環境を整えていくかが保育者の仕事であり、その関わりの在り方を日々振り返りながら、改善工夫し次の実践へと繋いでいくことが重要。まさに、清谿幼稚園の研究はそれであり、地道な実践の積み重ねには今後の異年齢保育の在り方において学ぶことが多々あった。
- 現代の子どもたちは、地域における異年齢の子ども同士の遊びがあまりない状況なので、そこで培われる社会性や思いやり心、年上への敬いの心などを幼稚園や保育所で意図的に計画実践していく必要がある。
- 清谿幼稚園では、期待できる子どもの姿として、他者を気にかけて助けようとしたり、年上を目標として憧れたり、問題解決に悩みどう解決するか考え、うまくいかないことや我慢の経験を重ねたりして成長していく子どもとして、異年齢交流を取り入れ実践研究している。このことは、時代の要請でもあり、とても価値がある実践である。
- 異年齢保育のよさとは
 - ・ 共に学びあうことである。(双方向の学びがある) 年上の子への憧れ「自分もやってみたい」という意欲的な態度や遊びの幅が広がる。生活習慣の自立や自制心や社会性が養われる。
 - ・ 年上の子は先生の承認や励ましの声掛けで自分のよさを知ることに繋がり、おのずと異年齢の子どもと関わるができるようになる。
 - ・ 同年齢の子どもの中で埋もれていた子どもも異年齢交流をすることで、年下の子から敬いの目で接せられ、自信がつき自己肯定感が高まる。また、自尊心やリーダーシップ等も芽生え、異年齢間の友達ができることにより、同年齢+異年齢の仲間の輪も広がる。
- 異年齢保育の留意点として
 - ・ 子どもは発達に合わない遊びには飽きてしまう。年齢ごとにゲームのルールを工夫したり、トラブルにならないようおもちゃ等の配置が必要になったりする。
 - ・ 年齢差による力関係の発生が起きないようにストレスやトラブルの早期発見、適切な対応を。
 - ・ 年上の子どもへの負担を配慮する。「お兄ちゃんでしょ」はストレス。年下の子どもへの対応に困っていたら援助したり、感謝の気持ちを代弁し「ありがとう」と声掛けをしたりする。
 - ・ 安全面への配慮をする。(年齢差による運動能力差への配慮)
- 研究結果から学ぶ
 - ・ 見守るだけでは変化しない。限られた時間の中で保育者が仕掛け、声を掛け教材の準備をする。交流のきっかけ作りとして、無理強いせずさりげなく行う。(誘導)「2人でとても楽しそうだね」(称賛) 子どもの様子を紹介する(支持) 子どもの言いたいことをくみ取る(代弁) ことで異年齢で関わる子ども自身がそのよさを感じる。最初は誘導的な声掛けが多いが、楽しさの体験を積み重ねていくことで教師の声掛けが減少し、子ども主体の遊びに繋がる。子どもが自分でコーナーを選択できることや途中で活動を変更できる自由があるところがよい。



とても楽しそうだね」(称賛) 子どもの様子を紹介する(支持) 子どもの言いたいことをくみ取る(代弁) ことで異年齢で関わる子ども自身がそのよさを感じる。最初は誘導的な声掛けが多いが、楽しさの体験を積み重ねていくことで教師の声掛けが減少し、子ども主体の遊びに繋がる。子どもが自分でコーナーを選択できることや途中で活動を変更できる自由があるところがよい。

第10分科会

子どもの主体性がいきる

保育者のかかわり

助言者 植木 章子
(鹿児島キャリアデザイン専門学校非常勤講師)
司会者 小濱真由美 (研明舎幼稚園)
問題提起者 藏前美佳子 (めぐみ幼稚園)
記録者 新福 果穂 (めぐみ幼稚園)
記録者 瀨崎 朱花 (めぐみ幼稚園)
運営委員 義永 淳子 (鴨池幼稚園)

【研究課題】

保育実践

【研究・研修の視点】

近年、社会環境の大きな変化や人々の意識や価値観の多様化等に伴い、子どもたちの育ちをめぐる環境が著しく変化し、家庭や地域社会における教育力の低下が指摘されている。こうした中、新しい時代を生きる子どもたちのために、幼稚園、認定こども園における日々の保育の実践の質が求められている。

幼稚園教育要領、認定こども園教育・保育要領には子どもの主体性を大切にする保育が示されている。子どもは主体的に環境に関わったり人的環境や物的環境から働きかけたりする関係性の中から主体性を育んでいる。しかし、その環境が発達に応じたもの及び活動に対して適切な保育者の指導が行わなければ、子どもの主体性を育むことは難しい。つまり、幼児期の主体性の育成は未来を生きる土台作りであると言える。

子どもの主体性が生かされる教育・保育実践を展開するためには、子どもを見る目を養い、寄り添う保育者の姿勢とともに、環境構成、遊びの内容と広がり、的確な記録等の知識や技術を高める必要がある。また、一人一人の発達の実情をとらえたうえで、具体的なねらいや内容を設定し、それらを達成させるための適切な環境を構成していく必要がある。保育者は、環境に関わって様々な活動を生み出していく子どもたちの姿を捉えながら、その状況に応じて多様な関わりをしていかなければならない。そこには保育者間の連携やカンファレンスを通じた情報共有とそれに応じた関わりのみならず、保護者との連携や子どもたちと共に一緒に考えることも大切であると本園では考える。

【研究・研修の手がかり】

たてわり保育（異年齢保育）の中で、主体的な保育の在り方について考える。

【研究計画】

◎令和4年度

- ・ 一人一人の個性・発達状況を的確に把握し、実態に即した環境構成・支援を考える。
- ・ 個別支援の在り方や主体性を生かすための小集団への保育者のかかわりを考える。

◎令和5年度

- ・ たてわり保育（異年齢保育）を通して、一人一人の個性を認め、子どもが成長に応じて主体的に活動していくための保育者のかかわりを考える。
- ・ 子どもたち一人一人の成長を促すための保護者との連携の在り方を探る。

【発表の概要】

(1) 研究・研修テーマのとらえ方

本園は、教育目標の3つの柱の1つとして、たてわり保育の実践を行う中で、異年齢の子どもが交わり、お互いを思いやり刺激し合っただけで子ども同士のつながりを深めることにしている。日々の集団生活の中において、教師主導型より、子ども同士がお互いのことを理解しながら主体的に進める保育の方が楽しさや成長に繋がっていくと気づかされている現状である。

そうした中、支援を必要とする子どもが増えてきていることから学期ごとに発達支援計画を作成し、その子どものねらいと支援内容について職員全体で共通理解を図ってきた。また、職員だけでなく支援を必要とする子どもたちの姿をクラスの子どものほかもちろん異年齢の子どもたち、保護者とも共通理解を深め、一人一人の園生活が充実したものになるための保育展開を考えていくことが必要であると感じた。

(2) 研究の内容及び方法

- ① たてわり保育(異年齢保育)における子どもたちの様子を研究保育や特別支援コーディネーターの方を招いて、職員研修を行い、支援方法や保育の在り方などを学ぶ。
- ② 異年齢児の子どもたち同士の関わりを写真や動画を使って成長の姿を記録し、保育を振り返る手段とともに保護者に発信することで連携の在り方を考える。
(保育ドキュメンテーションの実践)
- ③ 実践例は、1人の対象児(Hくん)の様子を観察する中で指導の在り方を考える。

(3) 実践例

- ① 発表会におけるHくんに対する保育者のかかわり(同年齢児との活動)
- ② たてわり保育での主体性がいきる保育者のかかわり
- ③ 保育ドキュメンテーションの実践例

(4) まとめ

対象児の事例から考察して、まずはその子の抱えている不安感や心配事、苦手なことを見聞きし、様子を見て個別に声掛けをしたり一緒に考えたりすることで、少しずつ自信がつくように関わることの大切さに気付いた。対象児ができたことや主体的に考えてしたことに対して個別や全体の前で褒めることで、様々な活動にも意欲的に取り組むことができたように感じた。また、保護者とも園での様子とその時の対応を話し、家庭での様子や対応も聞き、お互いに共有することで本児について考えることができた。その時に、口頭だけでなく、写真を用いて話をすることで共通理解がより深まった。

一人の子どもへの保育者のかかわりによって、その子どもが主体的に考えたことを友だちに教えたり声掛けしたりする姿が見られ、その友だちが自然と苦手なことを克服し、成功体験を得ることができた姿を目の当たりにした。また、その友だちのみならずクラスや学年、園全体にも子どもたちが考えて行動できるようになった。

そのことから、1人の子どもをよく観察し、その子の発達段階に合わせて関わることで、他の子どもの成長を促すきっかけにも繋がったので、一人一人の子どもとより密に関わり、子ども、保育者、保護者と共に考えて情報共有することが大切であると考えた。

(5) 今後の課題

- ① 支援を必要とする子どもが多い中で、子ども同士のかかわりを広げるために保育者が子どもの発達段階を理解したうえでその方法を考える手立てが必要である。
- ② たてわり保育(異年齢保育)の中で一人一人が満足できる保育環境を構築する必要がある。

【討議の柱】

- ・ 子どものやってみようという気持ちを引き出す環境は人的環境、物的環境の観点からどのようなものがあるか。
- ・ 子どもの主体性を引き出すために、職員が共通理解するための職員間の連携の在り方についてどのような方法があるか。

【討議内容】

◎討議の柱に沿って、7つのグループに分かれ、有意義な情報交換が行われた。

- 子どものやってみたくらいという気持ちを引き出す環境は人的環境、物的環境の観点からどのようなものがあるか。

〈人的環境〉

- ・様々なコーナーを配置し、実際に保育者自身が遊ぶ姿を見せることで子どもの意欲に繋げる。
- ・クラス会議やサークル活動を取り入れ、友達の意見や気持ちを聞き、共有する。
- ・活動に対し、活発な子とそうでない子を組み、友人関係の中で興味を引き出す。

〈物的環境〉

- ・子どもの手に取りやすい場所に廃材を置き、いつでも使えるようにしておく。
 - ・図鑑や実物を子ども達が見えるところに置いたり、iPad等で子ども達が調べたりできるような環境を整える。
- 子どもの主体性を引き出すために、職員が共通理解するための職員間の連携の在り方についてどのような方法があるか。
 - ・連携ノートを作り全職員が伝えたいことを記入し、誰でもいつでも見ることが出来るよう職員室に置く。また、連絡が取りやすいよう普段から話しやすい雰囲気づくりに努め、空き時間も活用し共有する。
 - ・朝礼や終礼、職員会議や連絡アプリを活用し子どもの主体性が見られた姿の事例紹介をする。



【助言者のまとめ】

助言者：植木 章子 先生（鹿児島キャリアデザイン専門学校非常勤講師）

討議の柱である2つのテーマに沿っての助言・まとめ

1 討議1について

環境とは、人的環境、物的環境、自然や社会の事象、場所・時間・空間など子どもを取り巻くすべてである。単独で成立するのではなく、相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものになるように計画的に環境を構成し、工夫していくことが大事である。幼児期にどのような環境の下で生活をするのか、またその環境にどのように関わるのかは重要な意味を持つことになり、それは一人の人間の将来に渡る発達や生き方にまで影響を及ぼすということになる。人的環境、物的環境は相互に関わり合っているためはっきりと分かれるものではないがあえて挙げるとすると、①物的環境：幼児が自分から興味を持って遊具や用具、素材についてふさわしい関わりができるようにする。②人的環境：教師の影響が大きいので、計画的な環境を作り出すということが必要。教師の関わりは基本的に間接的なものとし、幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿が育まれるように援助していくことが大切である。

従って教師がモデルとして物的環境に関わりを示すことで、充実した環境との関わりが生まれてくるということになる。

〈環境構成のポイント〉

- ① 子どもの発達にあった環境を構成すること。
- ② 様々な興味・関心を引き出す環境を構成すること。
- ③ 子どもが主体的に動ける環境を構成すること。

2 討議2について

○保育カンファレンスを実施することで、情報を共有しながら子どもを多面的に理解することに繋がっていく。その方法として大きく2つ考えられる。

- ① 観察を通して理解する…園内研究保育による研修を深める
- ② 記録を通して理解する…映像（写真、ビデオ、ドキュメンテーション等）で見える化して確認し合う

3 保育の在り方と指導計画について

① 環境を通して行う保育であるということをおさえ、保育者は用意した環境に子どもがどう関わるかを予測し、子どもの自発性や主体性を保障しながら必要な体験が得られるように援助を考えなければならない。そして子どもたちの様子などを教育課程で確認し、指導計画に位置づけしていくことが大切である。

② 乳幼児期の発達の特性やその発達過程を踏まえて「遊びの環境」「生活の環境」を整えていくことが求められている。保育の意図や願いを環境の中に刷り込ませながら子どもが必要な体験を積み重ねていくことが出来るように、また楽しく遊んだり友だちや先生と関わったりしながら主体的な活動が展開されていくように、計画的に環境を構成していくことが求められている。

保育者に求められる実践：子どもの生活が豊かになるための環境構成を計画的に行うことで、子どもと共により良い保育環境を作り出すということ。

→環境を通して生きる力が育まれる 主体性・認識力・思考力・豊かな感性・想像力等
幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿

③ 保育を展開する際の《環境の視点からの基本の考え方として》

- ・適法性…どのようなねらいで実施していくか
- ・適量性…どんな素材・教材をどれだけの量で準備していくか
- ・適時性…いつ、どんな順序で計画を実践していくのか（スケジュール化）
- ・適切性…どんな見届けをするか
- ・地域性…園の地域の何を生かすか

これらを考慮し、指導計画に位置づけしていくように心がけていくことが重要である。

4 子どもの主体性が生きる保育者の関わりについて

保育者が子ども理解、幼児理解をしながら保育実践を行うことが大切である。幼児を理解するということは、一人一人の幼児と直接触れ合いながら幼児の言動、表情から思いや考えなどを理解して受け止める、そしてその幼児の良さや可能性を理解していくということである。保育者は一人一人の幼児が主体性を発揮して活動の展開をしていくことができるような、幼児の立場に立った保育の展開が大事であるということ意識し、幼児一人一人の特性を的確に把握し理解すること、一人一人の幼児の興味や関心に応じた子どもが関わりたくなる環境、遊びたくなる環境を用意していく必要がある。活動の主体が幼児であること、環境から

受ける影響が大きいということを頭に入れながら教育的、意図的に環境を構成していくことに努める必要がある。



第11分科会

子どもの主体性がいきる

保育者のかかわり

助言者 上月 素子
(四恩こども園 教育保育スーパーバイザー)
司会者 中尾志津江
(認定こども園ゆかり幼稚園・どんぐりの森保育園)
問題提起者 松田 直之 (あゆみの森こども園)
記録者 川原 由佳 (榕城幼稚園)
記録者 徳浦 亜美 (榕城幼稚園)
運営委員 野田 理教 (西之表幼稚園)

【研究課題】

保育実践

【研究・研修の視点】

近年、幼稚園教育要領などにおいて、「子どもの主体性を育む」ことが保育者に求められている。しかし、子どもの主体性を育むために、保育者が何をどう考え、保育を計画すれば良いのかは、各園、各保育者に任されていて、具体的に記されている指針はない。また、経験年数の少ない保育者では、子どもの主体性を育む保育を計画することは容易ではない。そこで、本園では、すべての保育者が子どもの主体性を育む保育を実践していく力を育むために、保育実践のためのプロセスを具体的に言葉にし、さらに順序立てをして、「保育実践プロセス」を作成している。この「保育実践プロセス」を活用して、本園では保育者がどのように子どもの主体性を育てているかを再度検証し、研究を行った。

【研究・研修の手がかり】

- ・ 主体性を育む保育を実践するまでに、保育内容を考え、企画するプロセスを言葉にして順序立てる（保育実践プロセス）

【研究計画】

◎令和4年度

- ・ 本園における主体性を育む保育を実践するまでの、保育内容を考え、企画するプロセスを検証し、言葉にして順序立てる（保育実践プロセス）。
- ・ 経験年数の少ない保育者が保育実践プロセスを活用して実践し、保育実践プロセスの検証を行う。

◎令和5年度

- ・ 保育実践プロセスを活用し、子どもの主体性を育むためには何が大切かを検討する。
- ・ 保育実践プロセスを活用することで、主体性を育む保育を実現できているかを検討する。

【発表の概要】

(1) 研究・研修テーマのとらえ方

本園では、様々な活動を通して、「自分への信頼感」を育てている。自分への信頼感という土台の上に「自分で考えて行動する力」「集団の中でやり取りをしながら着地点を見つけて行動する力」を育むことで、主体性が育まれていくと考えている。主体性を育むためには、保育者側が意図的に作った環境や、子どもたちの好奇心を刺激する意図的な働きかけを実践する保育において、プロセスを活用しながら、子どもたちのやりたい気持ちを大切にして活動することが大切である。

本研究のテーマの中に書かれている「保育者のかかわり」は、子どもに直接意図的に関わることのみならず、意図的な環境作りや、子どもたちのやりたい気持ちを引き出す働きかけなど、様々な視点で捉えることができると考えた。

本園では、子どもの主体性を育む保育を実践する保育者がどんなことをしているかに注目した。

保育者のかかわりのプロセスを具体的な言葉にして、順序立てることで、誰もが主体性を育む保育を実践することができるのかを研究していきたい。

(2) 研究の内容

本園では、子どもの主体性を育む保育を実践するためには、子どもの好奇心を動かす働きかけが大切だと考えている。本園で年間を通して実践している野外活動の「森の活動」では、保育者自身が様々な情報にふれ、自らの好奇心を動かし、自らの心の動きをもとにしながら、子どもの好奇心を動かしていくことの意義を長年の経験で実感している。そこで、「森の活動」を実践するまでに、保育者が、活動の内容を考え、企画するプロセスを言葉にして、順序立てることができれば、誰もが主体性を育む保育を実践できるのではないかと仮説を立てた。今回は、保育者が考え、企画をするプロセスを言葉にして、順序立てたものを「保育実践プロセス」と呼び、経験年数の少ない保育者でも実践できるのか、研究を進めていく。

(3) 研究の方法

- ・ 「森の活動」の保育実践プロセスを作成する。
- ・ 経験年数の少ない保育者でも保育実践プロセスを活用すれば、子どもの主体性を育む保育を実践できるのかを検証する。

(4) 実践例

「森の活動」…森にでかけ、五感で自然を感じ、自分の感じたことを保育者や友達と共有し、自然との距離を縮めるとともに、自分の感じていることはそのままいいんだという自分への信頼感を育む活動。

(5) まとめ

今回の研究では、経験年数の少ない保育者が保育実践プロセスを活用して実施してみると、子どもたちから、「やってみたい」「これはどうして?」「もっと知りたい、見てみたい」などの言葉が聞かれるようになり、好奇心を動かしている姿が見られるようになった。保育実践プロセスを活用した中で、経験年数の少ない保育者が大切だと思ったことは、①子どもの好奇心を動かすためには、保育者も好奇心を動かし、様々な情報にふれること、②自分の好奇心が動いたポイントを見返して、整理して具体的な言葉にすることで、自分自身を活かした保育を子どもたちに提供できたことである。保育実践プロセスによって、「考える」「企画する」などの抽象的なことでも、どんな準備をしていくかが事前にわかり、指示を待たずに、保育者自身が主体的に仕事に取り組むようになり、子どもの主体性を育む保育が実現できたのではないかと考えられる。

(6) 今後の課題

- ・ 「森の活動」の保育実践プロセスだけでなく、他の活動の保育実践プロセスも検証していきたい。

【討議の柱】

- ・ 保育者一人ひとりがどのように主体的に保育にかかわっているのか。
- ・ 子どもの主体性を育む保育を実践するまでに、どのようなプロセスを踏んでいるか。

【協議内容】

1 問題提起に関する質疑応答・感想

- ・ 子ども達のやりたい気持ちを大切に心がけ、保育者自身も心を動かすことが大切。

- ・子ども達のやりたい気持ちに働きかけ、プロセスをもとに考えている。

2 グループ討議

研究討議の柱をもとに「子どもの主体性を育む保育の展開についてどのような方法があるのか」ということを視点にあてて話し合う（感想等を含めて）

- ・ 自由遊びの中の子ども達の声拾って遊んだり保育者が働きかけたり拾い上げていく。
- ・ 個々に丁寧な支援をし、考えさせて、「何でもできるやっでござらん」と自信を持たせる声掛けする。
- ・ 自分の保育は主体性を考えできているか疑問があったが、実際は深く掘り下げられていない。自分自身が動いて心を動かす体験をさせてあげたい。
- ・ 園全体で取り組むお店屋さんごっこをしている。プロセスを踏んで計画を立てている。
- ・ ヨコミネ式に取り組む園。まず文字の練習は興味を持たせてあげる。1つきれいな文字を誉めてあげる。
- ・ 主体性を考える保育は難しい。心の余裕が必要。自由に保育ができる環境が必要。子どもが興味あることをしっかり拾って、心揺さぶる活動をしていく。
- ・ 決まった行事・活動の中で子ども同士話し合うが、子どもたちの主体性を大切にしながら保育をすることは、なかなか難しい。今回の発表を聞き、子ども達のやりたい声や意見を聞いて取り入れていきたいと思った。
- ・ 子ども達の目線に立って話す。
- ・ 命令でなく問いかけをする。やる気を出す声掛けをする。
- ・ 子ども達の発言を記録していく。
- ・ 子ども達が主体的に活動していけるように考えて過ごしている。
- ・ 子ども達の声聞き子ども達が話し合っ意見を出し合い活動している。共主体を大切にしている。
- ・ 年長クラス。毎日会議をし、グループ討議のように子ども達が司会・記録などをしている。
- ・ 地域のお祭りなどでダンスを発表している。
- ・ 各学年・クラスで分かれ絵をかき、その中から活動に生かしていく。
- ・ 各園のマネジメントについて。

一人で考えず抱え込まず、園全体で保育の空いた時間に仕事をする。チェックリストを作り、いつでもどこでもホワイトボードに書き出し、皆に振り分ける。

【助言者のまとめ】 助言者：上月 素子先生（四恩こども園教育保育スーパーバイザー）

研究発表の共有にあたり以下の2点について考察する

(1) 経験年数の浅い保育者の「子どもの主体性を育む」保育の実践

- ① 経験年数の浅い保育者が「子どもの主体性を育む保育」を実践する上で大きな助けになった、あゆみの森こども園の「保育実践プロセス」という仕事の進め方・考え方。

特に参考にしたいのは、「保育計画をゼロから作り上げる」「過程を順序立てて具体化する」「言語化する。話し合いを重ねて精度を高める」の3点。

「保育実践プロセス」という、保育計画から実践までの仕事を進めるための道すじ（見通し）があることで、要所要所で話し合い、一人で抱え込むことなく、異なる考え方や発想に触れ、自分の考えを言語化し、他の職員と共有しながら内容を深めていくことができる。殊に経験年数の浅い先生にとっては、見通しを持って仕事を進めることが



でき、話し合いを通して多くの学びを得る。

② 情報収集の旅に出るという保育者の姿勢と子どもの主体性の育ち。

保育を計画するにあたり、事前準備—どのような保育をしたいかを掘り下げ、自分の言葉として整理する—に心を込める。保育者が好奇心を持ち（ワクワクしながら）事前準備をする→子どもたちに伝わる→楽しそう・やってみよう・やろう＝主体的行動に繋がる。そして子どもたちは、「レシピ」（子どもが主体的にかかわっていけるしかけとして活動の手順を示したもの）の、「イマココシール」をワクワクしながら見て、自分で判断して行動するという経験を重ねる。こうした保育の工夫は、子どもの主体性を育む上で大切にしたい。

(2) 「子どもの主体性を育む」保育内容としての「森の活動」の実践

① 遊びを中心とした「環境を通して行う教育」は、幼児教育の共通理念だが、保育の場としての「環境」については、園舎を中心とした「室内」で保育活動が行われており、自然を環境として活かした保育活動は、多いとはいえない。

② 「森の活動」では子どもたちが「やりたい」と感じられる活動にするために以下の点を心掛けている。「好奇心が動き、五感を働かせる活動にする」「子どもたちがそれぞれに気づき、答えが一つにならない活動を考える」「抽象的でなく具体的なテーマを選ぶ」「やりたいと思う動機付けを丁寧にして好奇心を刺激する」、そして「準備をきちんとしたら、野外での“ライブ”—子どもたちの主体的な活動に委ねる—を楽しむ」。自然は、「子どもの主体的な育ち」を考える上で貴重な教育資源である。自然の中で自然を活かすような保育を、もっと取り入れたい。

③ 「体験型」「探求する」保育としての「森の活動」の持つ現代的意義。

幼児期からデジタル社会に身を置く子どもにとって、「森の活動」のような「体験」を学びの出発点とし、主体性を育む「探究する」学びは、未知の課題に対応する力を育てる上でとても重要だと注目されている。

いま幼児教育者に求められていること

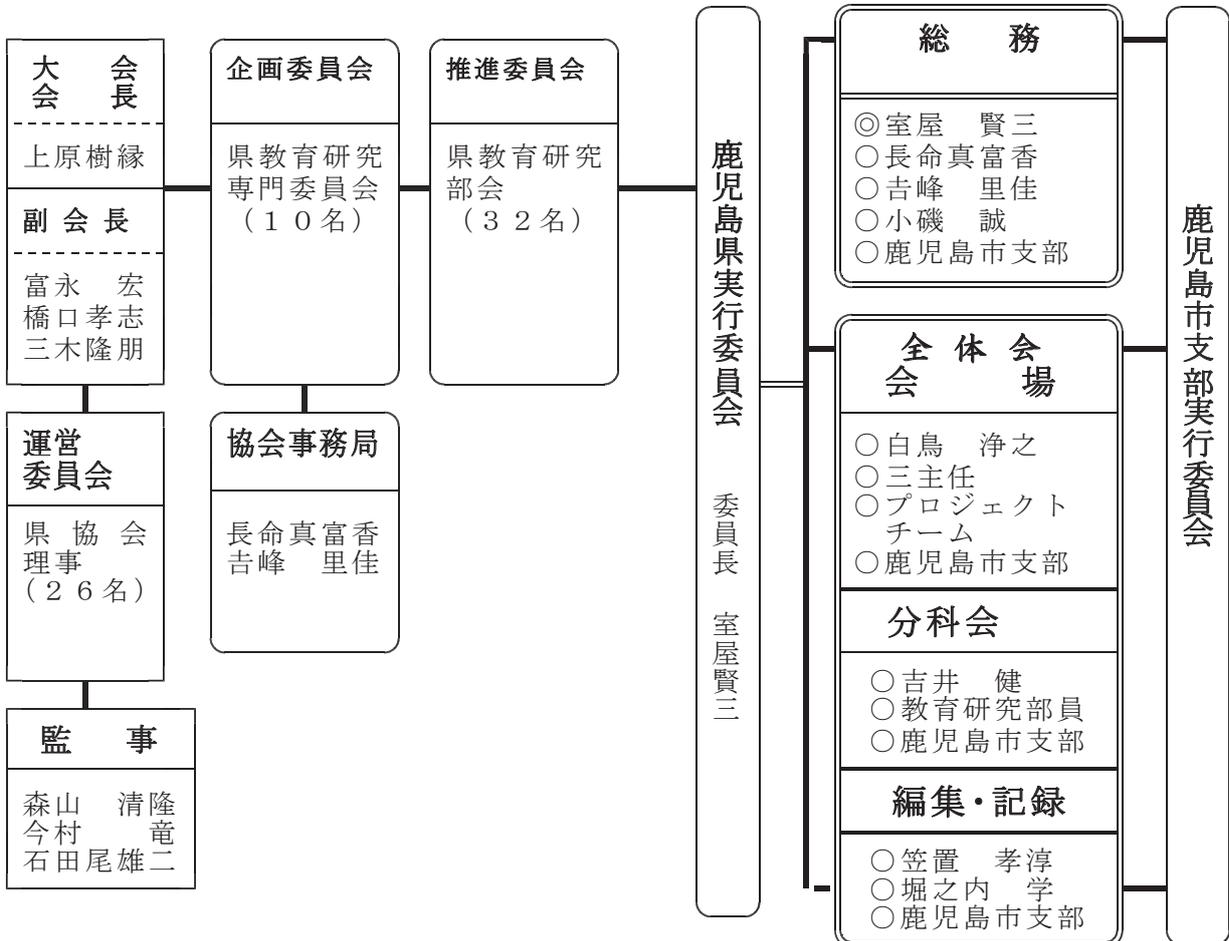
幼児を取り巻く世界は予測不可能と言われている。それを切り拓く力を育むことはできるのか。近年、チャット GPT・人工知能 AI が話題になっており、幼児を取り巻く世界にも広がりを見せている。何でも素早く答えてくれるチャット GPT だが、「問い」を入れないと答えない。質問され沢山正解を答える人は知っている人＝えらい人という感じがある。しかし人工知能の出現で、人間にしかできないのは答えることより「問う」ことになっていく、と考えると、自ら問いを發することのできる主体性の育ち、幼児期の「どうして」「なぜ」と問える力を、大切に守り育てることを大事にしたい。

石井桃子さん（児童文学者）の言葉に「子ども時代をしっかりと楽しんでください。大人になっ

てから老人になってからあなたを支えてくれるのは、子ども時代の〈あなた〉です」というのがある。「子どもの時代をしっかりと楽しむ」ことが予測不可能な社会を逞しく乗り越える力を育んでくれる。発表者の問題提起にあったように、保育者自身、保育をワクワクする旅と捉えるような好奇心をもって仕事に向かっただけであればと思う。



令和 5 年 度
第 6 2 回 鹿 児 島 県 私 立 幼 稚 園 教 職 員 研 修 大 会 鹿 児 島 大 会
運 営 推 進 組 織 表



鹿 児 島 市 支 部 実 行 委 員 会

会 長	富永 宏(伊敷)
委員長	小磯 誠(鹿女短すみれ)
副委員長	橋口 孝志 (吉田南) 永吉 龍志 (田上) 堀之内 学 (桜ヶ丘中央)
委 員	
鶴重裕子 (宇宿)	福留美智子(ひまわり)
有村修次 (こまつばら)	末兼静香 (清谿)
津曲恵造 (谷山善き牧者)	井上博孝 (たにやま)
田中裕一 (鹿児島)	宮内啓子 (可愛)
野元博史 (喜入)	
鹿児島市 6 ブロック 園長・主幹・主任等	

大会運営委員

※県協会理事・監事・顧問

職名	氏名	園名	職名	氏名	園名	職名	氏名	園名
会長	上原 樹緑	おおぞら	委員	小磯 誠	鹿女短すみれ	委員	石田 拓郎	宮 内
副会長	富永 宏	伊 敷	〃	大保 辰美	つばき	〃	吉井 健	信 愛
副会長	橋口 孝志	吉 田 南	〃	金竹久美子	アソカ	〃	白鳥 浄之	末吉中央
副会長	三木 隆朋	川 辺	〃	池水 大地	コスモス	〃	三浦 昌平	大 崎
委員	園尾 憲一	竹 の 子	〃	桃 蘭 智	加世田聖母	〃	武 祥三	野 間
〃	永吉 龍志	田 上	〃	笠置 孝淳	慈 光	〃	岩川臣之介	す み れ
〃	堀之内 学	桜ヶ丘中央	〃	島谷 精利	青 山	〃	森山 清隆	共 研
〃	室屋 賢三	共 立	〃	田原 慎也	せんだい	〃	今村 竜	第一鹿屋
〃	井上 博孝	たにやま	〃	若松 忠洋	あ お ば	〃	石田尾雄二	ゆ かり
〃	伊福 勇史	鹿児島おおとり	〃	瀬戸口 悟	あ さ ひ			

企画委員

※研究推進委員を兼ねる

職名	氏名	園名	職名	氏名	園名	職名	氏名	園名
委員長	室屋 賢三	共 立	委員	白鳥 浄之	末吉中央	委員	小平田典子	鹿児島おおとり
副委員長	吉井 健	信 愛	委員	小磯 誠	鹿女短すみれ	委員	重久 直美	星ヶ峯
〃	笠置 孝淳	慈 光	委員	堀之内 学	桜ヶ丘中央	委員	内野 悦子	喜 入

研究推進委員

※県教育研究部員

支部	氏名	園名	支部	氏名	園名	支部	氏名	園名
鹿市1B	森山 剛充	はなぶさ	鹿市5B	尾方みゆき	鹿児島さくら	始・伊	西元 道子	鹿児島第一
鹿市1B	西原 美緒	恵光東俣	鹿市5B	崎濱 彰吾	紫 原	始・伊	中村あゆみ	薫 光
鹿市2B	緒方 玲子	和 光	鹿市6B	田中 裕一	鹿 児 島	大 隅	三浦 昌平	大 崎
鹿市2B	三月田智子	和 光	鹿市6B	山崎 里佳	清 谿	大 隅	鶴野恵理香	信 愛
鹿市3B	義永 淳子	鴨 池	南 薩	朝倉 文昭	枕 崎	熊 毛	野田 理教	西 之 表
鹿市3B	川迫美由紀	共 研	南 薩	森田 美帆	枕 崎	熊 毛	横山 咲子	野 間
鹿市4B	豊永 藤浩	武	西 薩	大園 貴文	吹上中央			
鹿市4B	神田夕紀子	田 上	西 薩	新田 麻美	青 山			

編集委員

※大会研究誌及び研究集録の編集

氏名	園名	氏名	園名	氏名	園名
富 永 宏	伊 敷	室屋 賢三	共 立	山 下 守	錦 城
吉 井 健	信 愛	義永 淳子	鴨 池		
小磯 誠	鹿女短すみれ	今井 和代	共 研		

令和5年度 第62回鹿児島県私立幼稚園教職員研修大会 鹿児島大会 参加者集計

< 支部ごとの参加者 >

鹿児島市	南 薩	西 薩	始良・伊佐	大 隅	熊毛・大島	合 計
688	51	122	110	103	40	1,114

< 全体会の参加者 >

鹿児島市	南 薩	西 薩	始良・伊佐	大 隅	熊毛・大島	合 計
532	40	93	88	78	34	865

< 各分科会参加者 >

分科会	参加者数	分科会	参加者数
第 1 分科会	85	第 7 分科会	87
第 2 分科会	57	第 8 分科会	82
第 3 分科会	92	第 9 分科会	98
第 4 分科会	106	第 10 分科会	73
第 5 分科会	99	第 11 分科会	47
第 6 分科会	116	合 計	942

※ 分科会の場合は出席した方、全体会の場合はレポート提出により修了した方を計上しています。

参加者数一覧

支部	園名	分科会	全体会		支部	園名	分科会	全体会
鹿市1B	うちの	8	1		鹿市4B	あけぼの	8	7
	はなぶさ	17	15			なでしこ	9	10
	千年	2	1			みのり	7	8
	伊敷	8	7			昭和	15	17
	いにしき	8	8			さみどり	9	9
	玉里善き牧者	12	6			武	6	8
	草牟田	6	5			鹿児島おおとり	13	8
	恵光東俣	6	6			ヴェリタス	17	9
計	67	49		武岡		3	4	
鹿市2B	カトリック吉野	6	7			さつき	9	9
	こぼと・ゆなの木	7	9			ひばり	0	0
	辻ヶ丘	13	10			田上	8	8
	さかもと	0	1			計	104	97
	川上	11	12			鹿市5B	かもめ	11
	共立	10	12		紫原		44	17
	和光	12	12		カリタス		7	8
	鹿児島三育	3	1		鹿児島さくら		5	5
	集成	8	8		つばき		14	13
	大谷	8	8		桜ヶ丘中央		14	13
吉田南	13	13		若葉	9		8	
よしだルンビニー	0	4		星ヶ峯	21		21	
計	91	97		錦城	16		15	
鹿市3B	アソカ	4	2		鹿女短すみれ		11	10
	敬愛	5	5		計	152	120	
	聖母	10	9		鹿市6B	宇宿	10	6
	やはた	13	7			ひまわり	5	5
	研明舎	2	2			こまつばら	16	15
	共研	5	5			清谿	6	10
	めぐみ	5	4			谷山善き牧者	7	11
	鴨池	13	13			たにやま	15	17
	鴨池しらうめ	8	7			鹿児島	11	11
	太陽の子	14	15			可愛	14	17
計	79	69		喜入		9	8	
				計		93	100	
支部計					支部計			
586					532			

支部	園名	分科会	全体会
南 薩	白百合	3	2
	指宿	2	2
	せいあ	4	5
	みどり	3	3
	柳和	2	3
	コスモス	2	0
	加世田聖母	6	6
	加世田しらうめ	8	8
	川辺	4	2
	かつめ	4	3
	枕崎	5	3
	長野	3	3
	支部計		46
西 薩	朝日ヶ丘	9	9
	伊集院	10	6
	吹上中央	1	0
	くしきの森	3	2
	友愛	2	4
	神村学園附属	4	4
	みくに	4	3
	川内聖母	7	5
	のぞみ	7	11
	純心	8	7
	せんだい	13	11
	青山	10	10
	宮之城聖母	3	5
	阿久根めぐみ	5	5
	あくね	3	4
	出水聖母	5	5
	慈光	2	2
	もみじ	0	0
	江内みかん	0	0
	風の杜	0	0
支部計		96	93

支部	園名	分科会	全体会
始 良 ・ 伊 佐	啓明	9	7
	薫光	6	7
	エミール	3	1
	エミールさくら	2	2
	双葉	2	4
	あいら	11	11
	宮内	3	1
	日当山	0	0
	隼人ひまわり	1	0
	あさひ	5	5
	鹿児島第一	10	11
	国分	3	2
	しおん	0	0
	カトリック国分	5	4
	国分愛の園	0	0
	竹の子	14	15
	かとれあ	4	4
	あおば	5	4
	あかつき	1	1
	きよみず	3	3
高千穂	3	3	
大口	6	3	
支部計		96	88

支部	園名	分科会	全体会
大隅	カトリック垂水	5	5
	鹿屋	6	6
	松下	7	0
	鹿屋カトリック	3	3
	信愛	7	6
	第一鹿屋	12	13
	西原	11	11
	星	7	7
	日の出	2	1
	南部	6	6
	大根占	3	0
	田代	0	0
	いずみ	2	3
	おおぞら	4	4
	しぶし	2	2
	カトリック志布志	3	3
	末吉中央	4	5
	大隅中央	2	2
	しゃら	2	0
	大崎	1	1
支部計		89	78
熊毛・大島	めいろう	2	1
	きりすと	1	7
	榕城	3	3
	西之表	3	3
	野間	7	6
	中央	3	3
	すみれ	2	2
	ゆかり	4	4
	あゆみの森	3	0
	亀津カトリック	1	3
天城カトリック	0	2	
支部計		29	34

分科会 参加者数

分科会名	人数
第1分科会	85
第2分科会	57
第3分科会	92
第4分科会	106
第5分科会	99
第6分科会	116
第7分科会	87
第8分科会	82
第9分科会	98
第10分科会	73
第11分科会	47
合計	942

全体会 参加者数

865

総計	942	865
----	-----	-----

※ 分科会の場合は出席した方、全体会の場合はレポート提出により修了した方を計上しています。

【大会事務局】

(一社) 鹿児島県私立幼稚園協会

〒890-0064

鹿児島市鴨池新町5-6

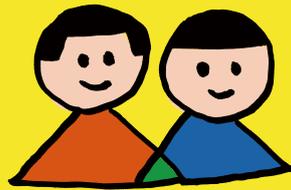
(プロパンガス会館502)

T E L 099 (285) 6688

F A X 099 (285) 6689

E-mail アドレス jimukyoku@muzoca.net

ホームページアドレス <http://muzoca.net/>



こどもが
まんなか
PROJECT